II. 遺跡調査の概要

なごやじょうさんのまる 名古屋城三の丸遺跡

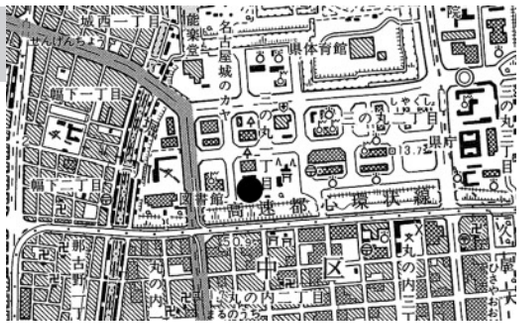
所在地　名古屋市中区三の丸地内

調査理由　名古屋地方裁判所執行部・簡易家庭裁判所交通部合同庁舎建設

調査期間　平成 13 年５月～９月

調査面積　1,000 ㎡

担当者　石黒立人・松田　訓・堀田剛史



調査地点（1/2.5 万「名古屋北部」）

調査の経過　調査は国土交通省中部地方整備局による名古屋地方裁判所執行部・簡易家庭裁判所交通部合同庁舎（仮称）建設に伴う事前調査として、愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 13 年５月７日から９月７日にかけて実施した。調査面積は 1,000 ㎡である。

立地と環境　名古屋市は、木曽三川（木曽・長良・揖斐）などによって形成された濃尾平野の南端及び、名古屋台地、尾張丘陵などに市域を広げる。名古屋城は名古屋台地の北西端に立地し、北西側に広がる沖積地との標高差を利用して築城されている。名古屋城三の丸遺跡は、この名古屋城の南側に位置している。現地表高は、13 mを測る。

調査の概要　今回の調査でこれまでに確認された遺構は、戦国時代の溝が約 10 条、近世の土坑約 200 基、井戸５基、かまど施設の基底部と思われるものなどである。

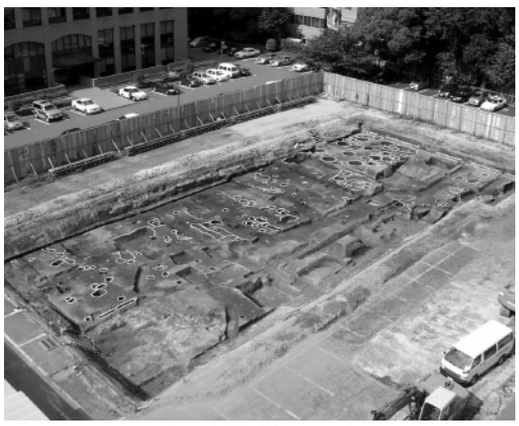
戦国時代の遺構では、主として溝が検出された。これらは、東西、南北の方位にほぼ合わせられており、規模も本遺跡で過去に確認されたこの時代の溝としては中・小規模程度のものであり、城の防備的性格を想起させる大規模なものとは異なり、屋敷などの区画に伴うものと考えられる。戦国期の遺物では、瀬戸・美濃産陶器碗、皿、土器皿、鍋、釜の破片が確認できたが、わずかな量であった。

近世の遺構では、屋敷跡に関連するものが検出された。本調査地点では、坪間路顕帖（名古屋市博物館蔵）などの記述から想定されていた屋敷境の位置に、南北方向の石組みを伴う近世後期の溝跡、これと間隔を開けることなく幅狭で深い掘り込みが併行して検出された。幅狭で深い掘り込みは、塀の基礎工事に伴うものと思われる。土坑では、東西方向に３列の土坑列が検出された。この東西土坑列は南北方向では並ばず、南に向かって隣列とは互い違いに検出された。埋土はいずれもしまりの少ない砂混じりの斑土で、人為的に一度に埋められた様相を示しており、庭木の移設痕などが推測される。素掘りの井戸跡は、いずれも調査地点南東部に集中して検出され、かまど施設の基底部と思われる遺構は、板状の石を敷いてその周囲を粘土で囲った痕跡が認められ、周辺に焼土、炭化物が混在した。

近世の遺物では、瀬戸・美濃産陶磁器、肥前産陶磁器の碗、皿、鉢類を中心とし、瓦、土器皿、焼塩壺等の出土が認められた。　（松田　訓）



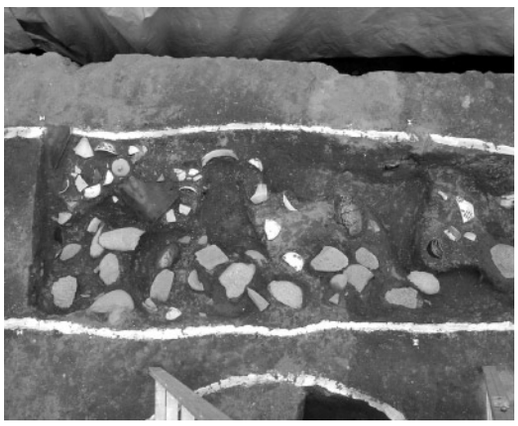
調査区遠景（南から）



上面全景（南西から）



カマド施設基礎部か



溝遺物出土状況



屋敷境溝（北から）



移植痕か（北から）



写真測量風景



現地説明会風景

でんぽうじほんごう 伝法寺本郷遺跡

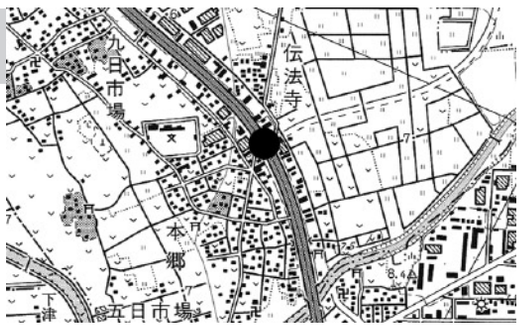
所 在 地　一宮市丹陽町伝法寺地内

調査理由　県道高速清洲一宮線建設

調査期間　平成 13 年 4 月～ 6 月、9 月

調査面積　1,600 ㎡

担 当 者　石黒立人・鵜飼雅弘・早野浩二



調査地点（1/2.5 万「一宮」）

調査の経過　伝法寺本郷遺跡は、一宮市丹陽町伝法寺地内に位置する。本遺跡の発掘調査は県道高速清洲一宮線建設の事前調査として、名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。調査対象は橋脚部分のみ 7 工区、合計 1,600 ㎡で、国道 22 号線伝法寺交差点の以北にＡ～Ｃ区の 3 調査区、以南にＤ～Ｇ区の 4 調査区を設定し、Ａ～Ｄ区を平成 13 年 4 月から 6 月、Ｅ～Ｇ区を平成 13 年 9 月にそれぞれ調査を実施した。

立地と環境　本遺跡は自然堤防と後背湿地が連続する五条川右岸、標高 6 m前後の沖積平野に立地する。周辺には北東 1.5 ㎞圏内に伝法寺廃寺、元屋敷遺跡、伝法寺野田遺跡、権現山遺跡など、弥生時代から古代にかけての遺跡が点在する。

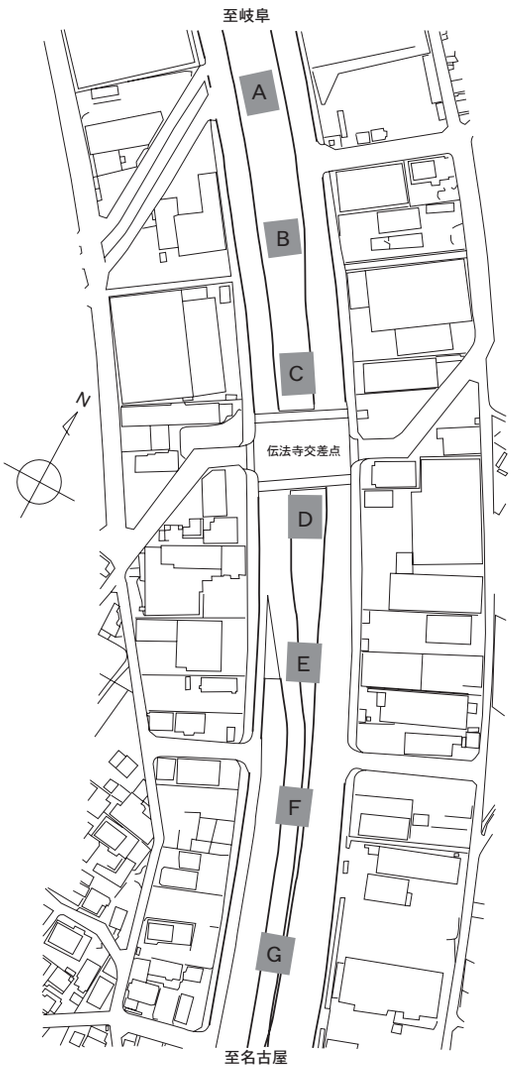
調査の概要　調査の結果、本遺跡は古代・中世を中心とする時期の遺跡であることが判明した。古代の遺物包含層と遺構は古い微高地に相当するＤ区において濃密で、その周囲の調査区は後背地あるいは旧河道に相当する。中世には沖積化の進行によって新たに微高地化したＡ・Ｂ区を中心に遺構が展開する。

Ａ・Ｂ 区　Ａ・Ｂ区は古代においては旧河道域に相当する。この旧河道は中世に至るまでには埋没し、その周辺は微高地化する。この微高地を形成する粗粒砂層の上面では中世の遺構が検出された。Ａ区ではほぼ南北方位をとる溝群を検出し、これらの溝群は中世から近世にかけて幾度も再掘削されたことも確認された。なお、Ａ区の河道からは大量の自然木とともに黒笹 14 号窯期の灰釉陶器椀が出土している。

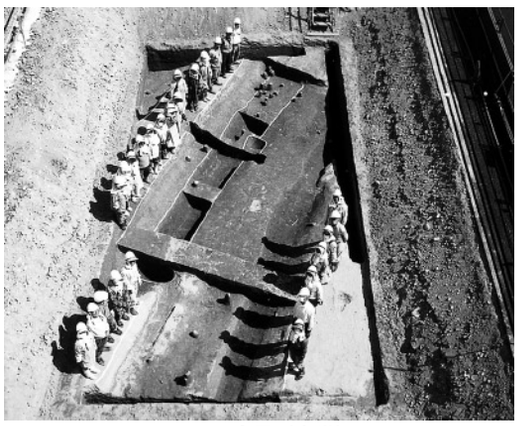
Ｃ・Ｄ 区　Ｃ区の大部分は後背地に相当し、近世以降の水田を検出したのみにとまる。一方でＣ区の南東部からＤ区にかけては古い微高地が広がり、Ｄ区では竪穴住居 2 棟（ＳＢ 01、ＳＢ 02）をはじめとする古代の遺構群を検出した。ＳＢ 02 では竈が比較的良好に残存しており、燃焼部の火床面では須恵器無台椀が伏せ置かれた状態で出土した。これらの遺構の時期は折戸 10 号窯期を中心とする。

Ｃ区の下層では、黒～黒褐色粘土の上面において小区画水田を検出した。作土および床土からは土師器の細片がえられたのみで、水田の時期は明確にされないが、他遺跡の水田遺構との比較から、古墳時代の可能性が高いと考えられる。なお、この黒～黒褐色粘土層はＢ区の南東部からＧ区にかけて広範囲に認められることから、遺跡周辺には広大な水田景観が広がっていたものと推測される。

Ｅ･Ｆ･Ｇ 区　Ｅ・Ｆ・Ｇ区では、近世以降の水田と島畠が連続して検出されるのみで、遺構、遺物ともきわめて希薄であった。（鵜飼雅弘・早野浩二）



調査区配置図（1：3000）



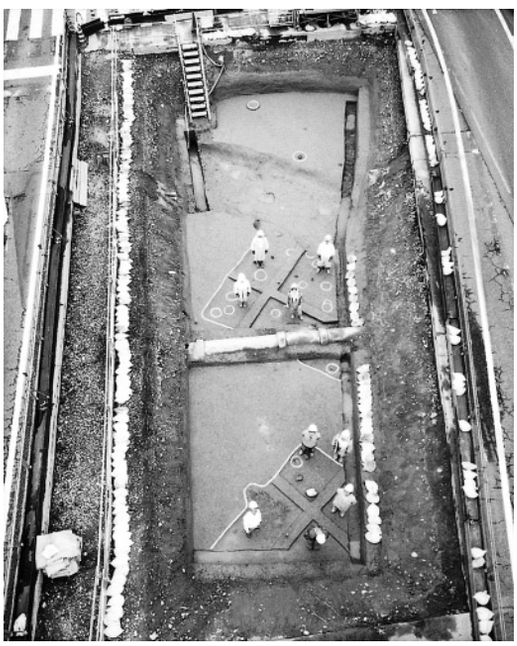
A 区　全景（中世）



A 区　旧河道出土灰釉陶器椀



C 区　古墳時代水田



D 区　全景（古代～中世）



D 区　SB02 竈

上品野蟹川遺跡（かみしなのかにかわ）

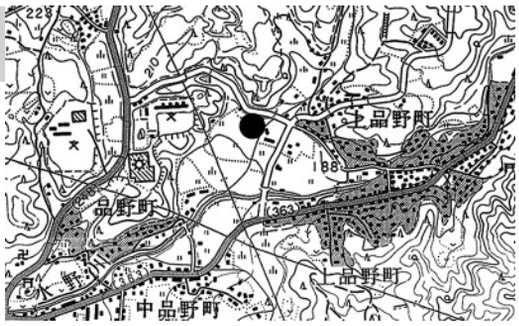
所 在 地　瀬戸市上品野町地内

調査理由　国道 363 号線道路改良工事

調査期間　平成 13 年 10 月～平成 14 年３月

調査面積　5,550 ㎡

担 当 者　服部信博・木川正夫・武部真木



調査地点（1/2.5 万「多治見･猿投山」）

調査の経過　調査は国道 363 号線道路改良工事の事前調査として愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として本年度はＡ , Ｂ , Ｃ , Ｄの調査区に分割して実施した。これまでに（財）瀬戸市埋蔵文化財センターによって平成７年と平成 10 年に調査され、愛知県埋蔵文化財センターでは平成 11 年度より調査を継続している。

立地と環境　遺跡は水野川と蟹川が合流する地点付近の標高 180m 前後の沖積地に立地している。現況は水田地帯であるが、近隣住民によれば戦時中は沼地であったのを改良し、芋などを栽培していたという。遺跡東方の丘陵上には中世城館跡の桑下城跡が、南方約 0.5 ㎞には旧石器～近世の複合遺跡である上品野遺跡などが分布する。

調査の概要　調査範囲は、河川合流部付近に形成された平坦地の西北端に相当し、これまでに旧蟹川と思われる自然流路と丘陵斜面､自然流路に挟まれた微高地などの地形が確認されている。今回の調査地点はＡ区とＣａ区の一部を除いてほぼ全体が自然流路に含まれることがわかった。また、Ａ区の丘陵斜面では自然流路の縁に沿うように幅約２ｍ、深さ 0.8 ｍの溝 SD01 を検出した。

自然流路は暗褐色砂質土層と青灰色粗粒砂～シルト層が拳大の礫層をはさんで堆積しており、表層では近世～近代の陶磁器や窯道具、上層の暗褐色粗粒砂層からは鎌倉～戦国時代の灰釉系陶器椀、小皿類と瀬戸・美濃産陶器、下層の暗褐色土層からは８世紀後半～９世紀代を中心とした須恵器、灰釉陶器が含まれる。

注目すべき資料としてＢ , Ｄ区自然流路の主に下層から「文室門」（ふんやのもん）と墨書された陶器が合計４点出土している。灰釉陶器椀または皿が３点（Ｋ -14 が２点、Ｋ -90 が１点）と須恵器椀１点であり、字体や筆致から２つのグループに分けられる。須恵器の墨書はＫ -14 の時期のものに近い。その他にも判読不能の古代の墨書２点がある。また、鉄鏃２点（Ｂ , Ｃ区）、川岸に近い浅瀬で陽物形木製品１点（Ｂ区）、緑釉陶器皿１点を検出した。昨年度調査では「山寺」「山」「阿」と「門」が判読できる墨書灰釉陶器が出土しており、平安時代竪穴住居１棟とピット群が検出された 00 Ａ区に隣接する今年度Ｃａ区に遺物の集中が認められる。「文室門」の意味は不明であるが、数少ない出土遺物の中でも墨書陶器の割合は高く、また川縁に単独で建つ住居もやや不自然な立地と感じられ、周辺が何らかの祭祀に関わる地点（施設）であった可能性が考えられる。

なお、包含層より古墳時代の土師器小型壺（松河戸 II）１点、古代の流路下層より青灰色粗粒砂～粘土質シルト層を約１ｍ掘り下げたところで縄文土器（後期）を検出した。

（武部真木）



A区空測写真　（蛇行する SD01 の画面右側全体が自然流路）



B区全景（東から）

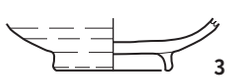


1



3

1



2

3

NR01 出土墨書灰釉陶器

中洞窯跡（なかぼらかま）

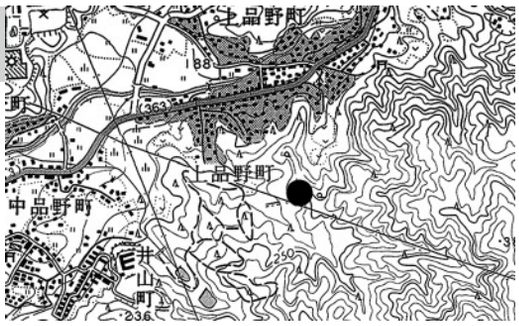
所 在 地　瀬戸市上品野町地内

調査理由　東海環状自動車道

調査期間　平成 13 年 7 月～ 10 月

調査面積　1,200 ㎡

担 当 者　服部信博・藤岡幹根・川添和暁



調査地点（1/2.5 万「多治見･猿投山」）

調査の経過　本遺跡の発掘調査は東海環状自動車道建設の事前調査として日本道路公団中部支社岐阜工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。調査面積は 1,200 ㎡で平成 13 年 7 月から 10 月にかけて実施した。

立地と環境　中洞窯跡は、瀬戸市東部、上品野町の品野盆地を囲む丘陵内に位置する古窯である。水野川の支流である中洞川の右岸、丘陵の南西斜面に立地しており、標高は 225m である。周囲には、宇トゲ窯跡・上品野窯跡・稲荷北神社北窯跡・桑下窯跡・上品野丸山窯跡など中世古窯が多数知られている。

調査の概要　遺跡全体は中洞川の堰堤建設時にかなりの破壊を受けていたものの、調査によって、遺跡が南西方向に開口する谷地形の斜面に立地していることが明らかになった。確認された遺構は、窯体 1 基・作業施設 3 基 (1 基はロクロピットが見られる) ・整地部分 (作業空間) ・灰原である。操業の時期は古瀬戸中期 II 段階から古瀬戸中期 III 段階までと考えられる。窯体は谷地形方向の北東ー南西方向に作られており、整地部分は焚口から前庭部にかけてに見られる。灰原は、前庭部から南西方向の中洞川に向かっての傾斜地に形成されている。調査区北東から南西にかけて谷状地形出自の水流によって、全体的に二次堆積の様相を呈する結果となっている。

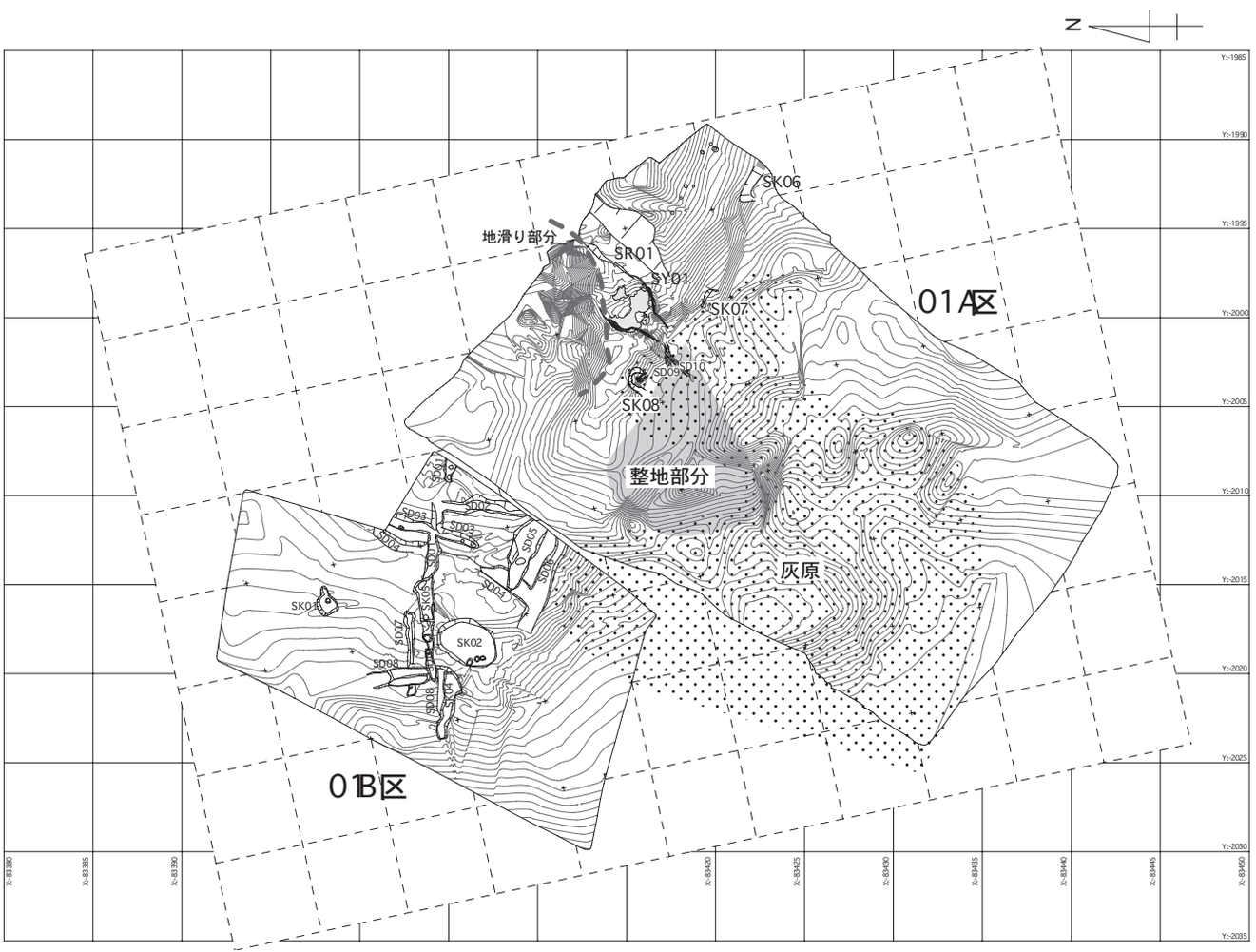
遺　　構　窯跡は燃焼室から焼成室にかけてのみが確認され、全長のおよそ 2 分の 1 のみが残存している。残存部での全長は約 3.5m 、最大幅は焼成室で約 2.5m 、最大傾斜約 30 度、最深部は分焔柱部分で約 80 ㎝を測る。断割りの結果、窯壁で 3 回、床で 4 回の補修が確認できた。窯体の上半部は地滑りにより大きく破壊を受けており、地滑りの成因としては、大地震や集中豪雨などによる地盤の緩みと考えられる。調査により西方向に崩落し大きく陥没した状態で地滑り跡が検出された。

作業施設としては 3 基検出された。SK06・SK07 はともに窯体東側に位置し、南側の大部分がすでに破壊を受けていた。SK08 は窯体西側に位置するもので、長軸 130 ㎝・短軸 110 ㎝、深さ 60 ㎝を測る風化花崗岩を竪穴状に掘り込んだ遺構である。遺構の中心部にさらに長軸 35 ㎝・短軸 30 ㎝の小ピットが検出された。中心部分径 15cm ほどが筒状に土の変化が見られることから、ここがロクロの軸受け部分であったと考えれる。

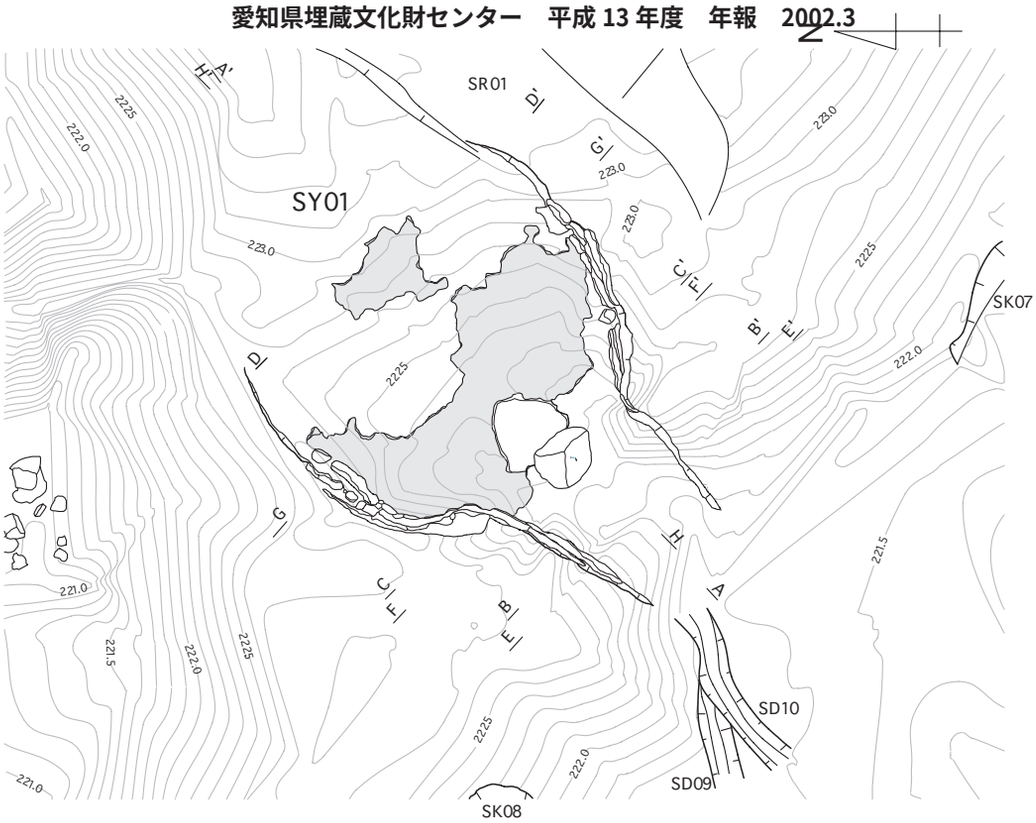
出 土 遺 物　古瀬戸および山茶椀との両者がみられる。古瀬戸では椀・天目茶椀・折縁深皿・卸皿・柄付片口・花瓶・四耳壷・瓶子・水注などの器形が、山茶椀系では椀・小皿・片口鉢が見られる。その他、匣鉢・陶丸なども出土している。古瀬戸および山茶椀は両者とも一定量出土しており、ともにここで生産されていたと考えられる。

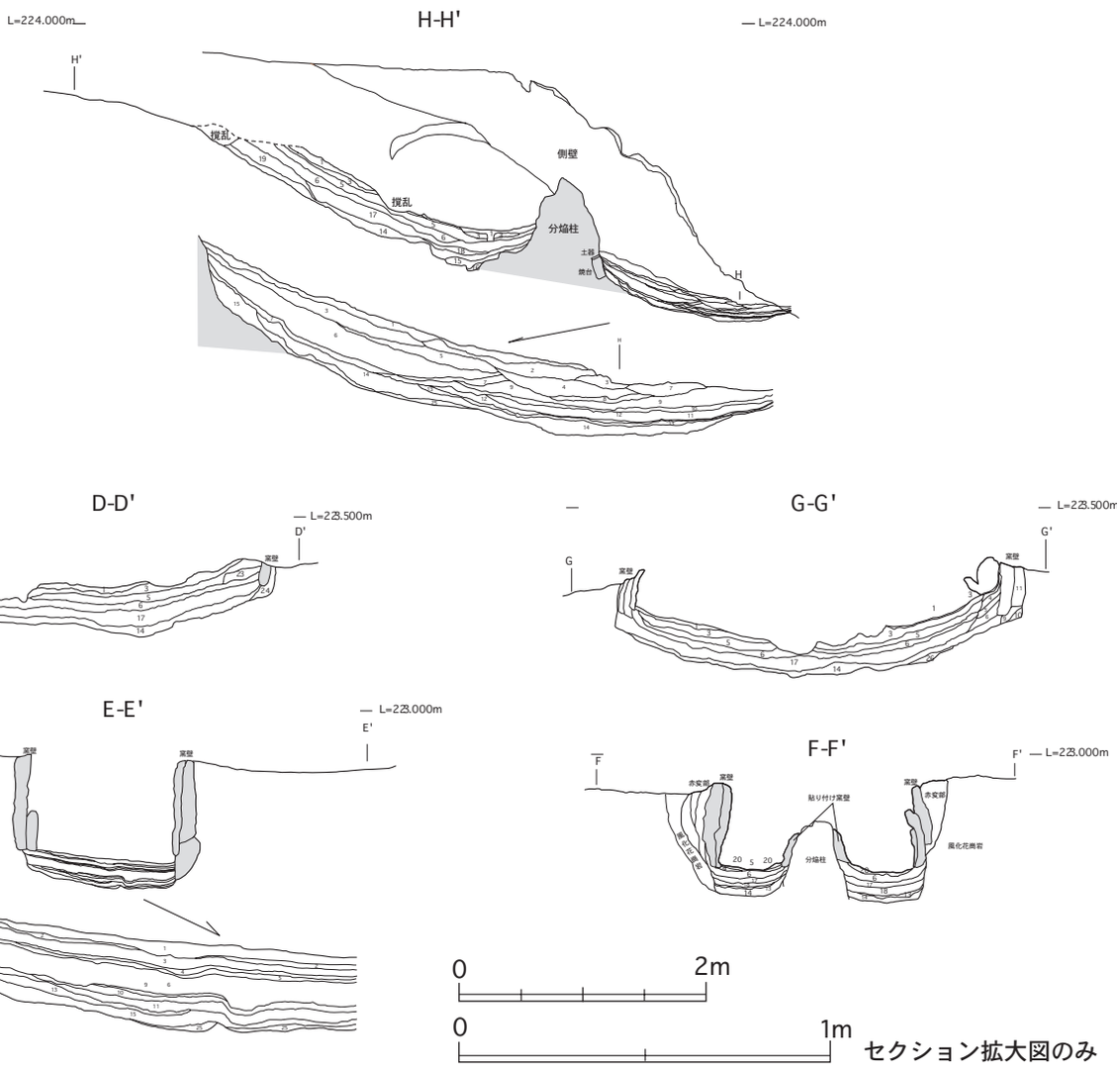
調査の成果　調査により、古瀬戸中期 II 段階から III 段階にわたって操業された当時の窯業生産の場が確認できた。尾根を越えて反対側に作られた宇トゲ窯跡が古瀬戸後期段階であり、一連の変遷を理解できる貴重な資料となると考えられる。また、窯体には地滑りにより破壊を受けていることが確認され、今回の特筆すべき成果として注目される。

末尾になりましたが、中洞窯跡窯体の地滑りの評価について、愛知県立大学鈴木康弘先生より多大なるご教示を賜りました。ここに感謝の意を表します。（藤岡幹根・川添和暁）

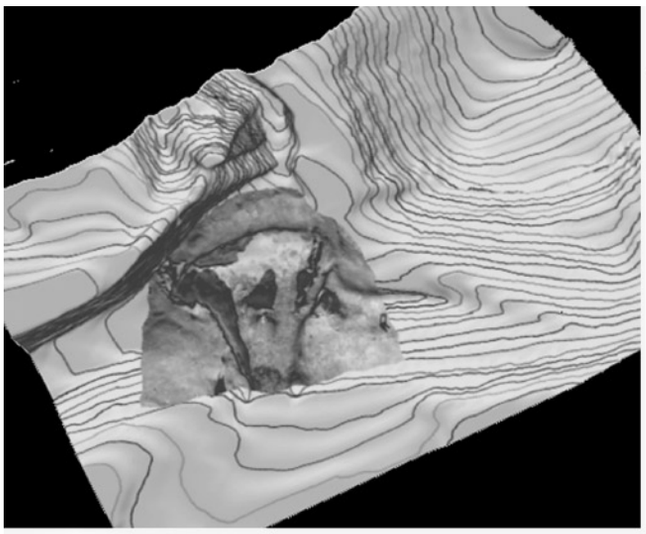


第１図　遺構配置図（1:400 ）

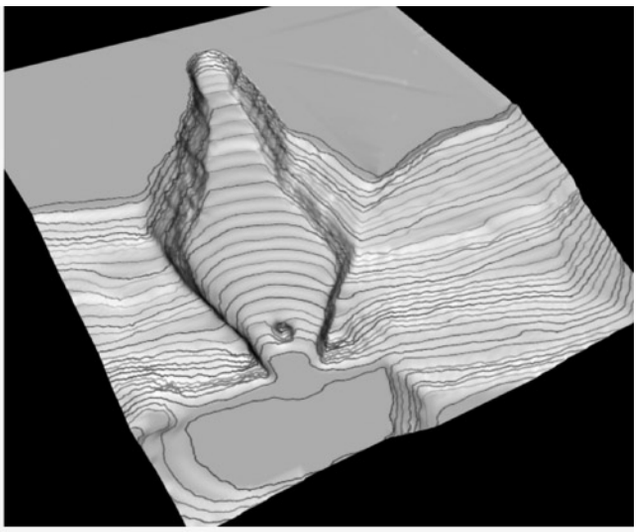




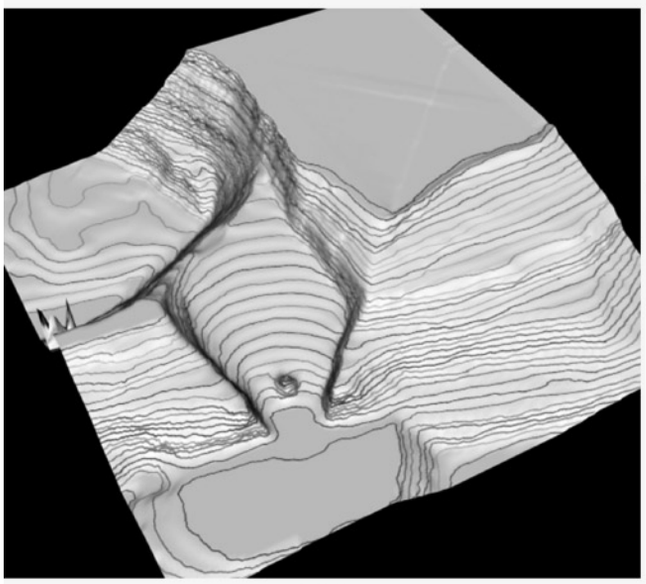
第 2 図　SY01　(1:60　セクション拡大図のみ 1：20)



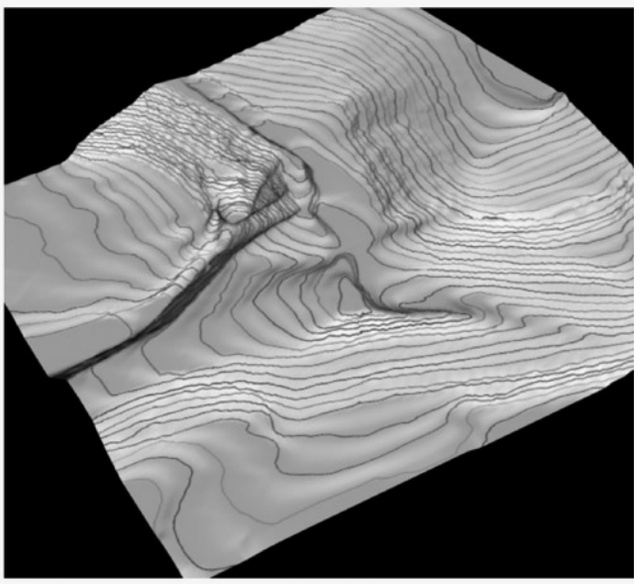
発掘データ



窯創業時



崩落後



道路開鑿時

第 3 図　中洞窯跡の変遷



作業風景



窯体と地滑り部分（北西より）

宇トゲ窯跡（うとげかま）

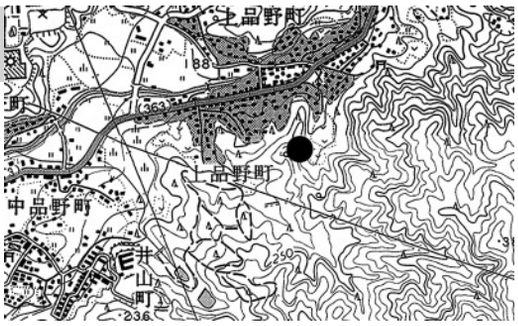
所 在 地　瀬戸市上品野町地内

調査理由　東海環状自動車道

調査期間　平成 13 年８月～９月

調査面積　400 ㎡

担 当 者　服部信博・藤岡幹根・川添和暁

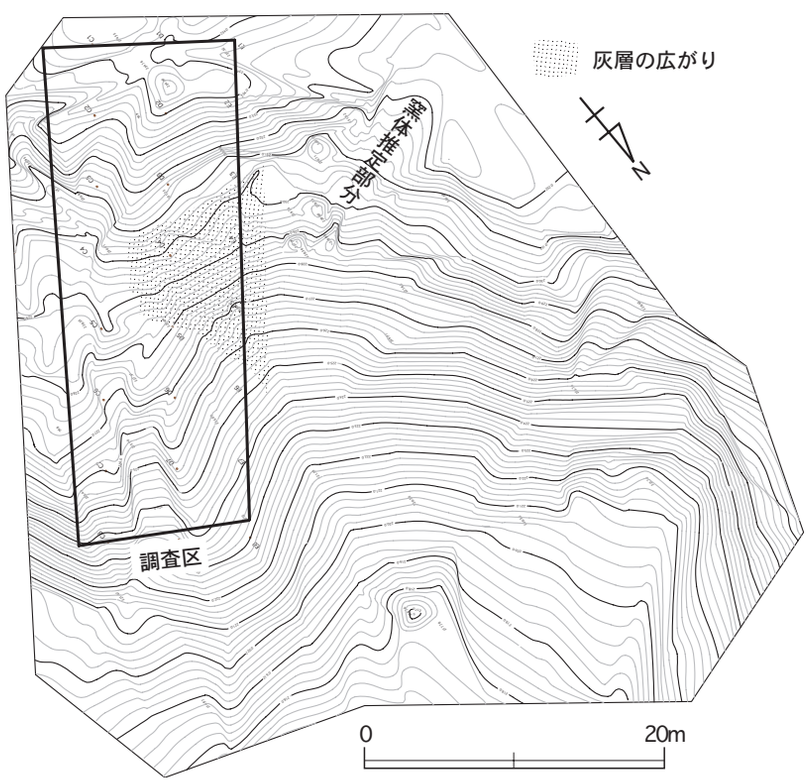


調査地点（1/2.5 万「多治見･猿投山」）

調査の経過　本遺跡の発掘調査は東海環状自動車道建設の事前調査として日本道路公団中部支社岐阜工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。調査面積は 400 ㎡で平成 13 年８月から９月にかけて実施した。

立地と環境　宇トゲ窯跡は、瀬戸市東部、上品野町の品野盆地を囲む丘陵内に位置する古窯である。水野川の支流である大戸下川の右岸、丘陵の南西斜面に立地しており、標高は 230m である。周囲には、中洞窯跡・上品野窯跡・稲荷北神社北窯跡・桑下窯跡・上品野丸山窯跡など中世古窯が多数知られている。

調査の概要　今回検出された遺構は作業施設 1 基 (SK01) と灰原である。SK01 は長軸 300 ㎝・短軸 220 ㎝・深さ 60 ㎝を測り、風化花崗岩を斜面部で竪穴状に掘り込んだ遺構である。埋土の堆積状況から最低３回の使用が認められ、最上面では釉の見られない半完成品が多く出土した。灰原は SK01 から斜面下より、12m×８m の範囲の広がりが確認でき、最深部では約 50cm ほどの堆積が認められた。灰層の堆積は壇状に堆積している状況が確認できた

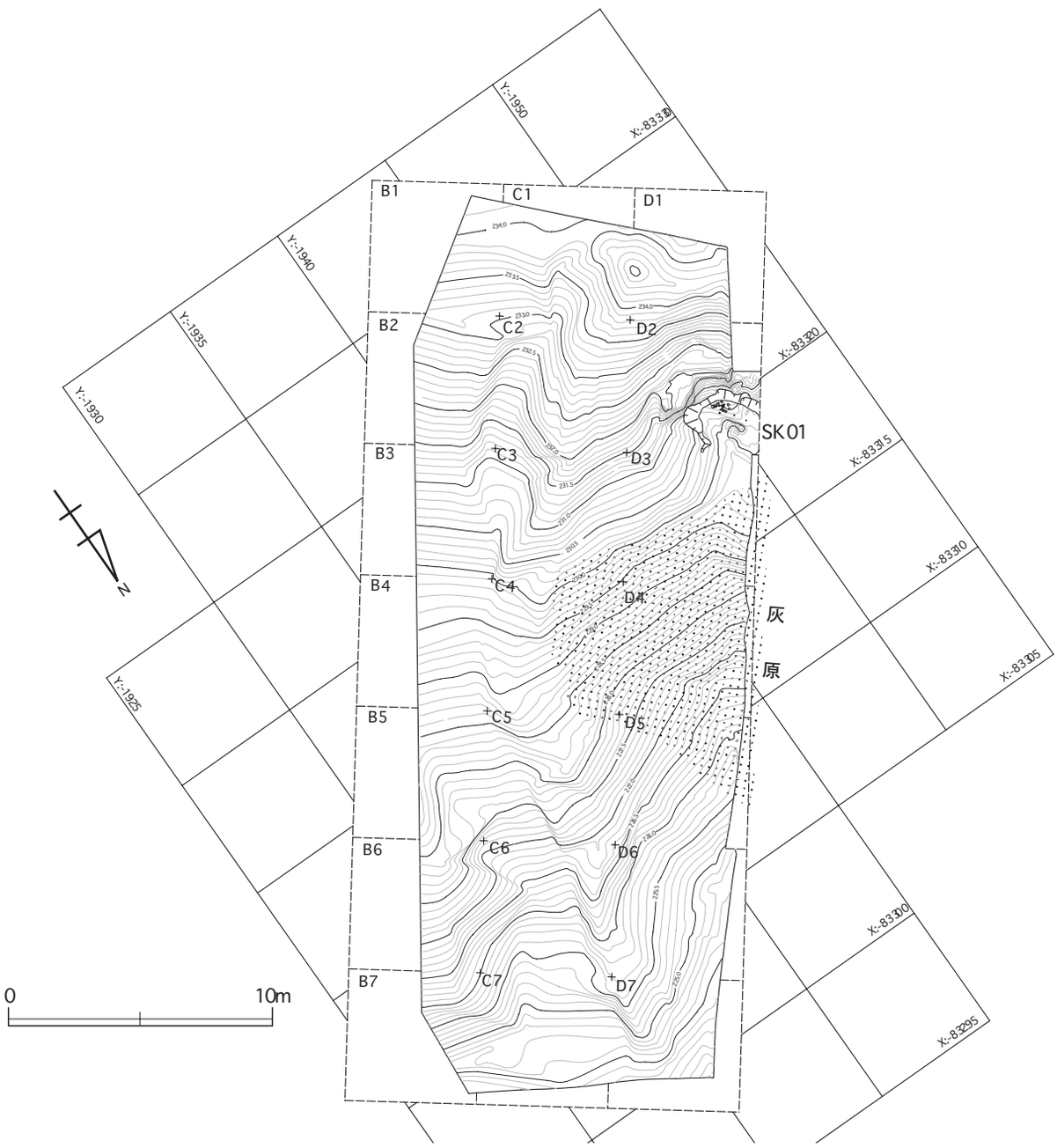


第 1 図　調査区位置図

一方、一部窯体推定部分からして地形的に不自然な位置にも堆積がみられる。灰層の流れの方向は、今回の調査では東側から西側への一方向しか確認できなかった。

古瀬戸後期の、碗・折縁深皿・皿・鉢・天目茶碗・柄付片口・香炉・合子・四耳壷・瓶子・花瓶・水注・片口鉢・擂鉢などが出土した。

今回の調査は遺跡範囲の東端のみであった。灰層の形成に関して、現状からでは自然の掻き出しによる堆積とは認められない部分が存在する。この点に関して、二つの仮説を提示できる。（1）現在は存在しない窯がかつて東側に存在していて、その灰層はこの窯から由来したとするもの、（2）宇トゲ窯の窯内からの掻き出し物により人為的に整地をし、作業スペースとして空間を確保したとするもの、である。今後出土遺物の細密な検討などから灰層の形成を分析することによって、解明していきたい。　（藤岡幹根・川添和暁）



第 2 図　遺構配置図（1：200）

鶯（うぐいす）窯跡

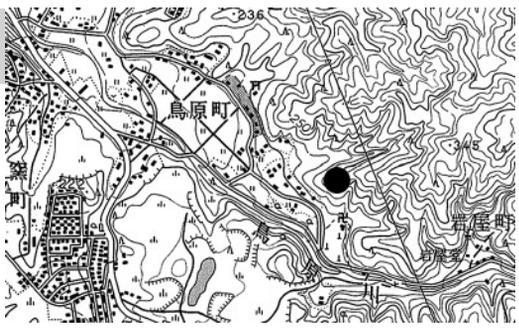
所在地　瀬戸市岩屋町・鳥原町地内

調査理由　東海環状自動車道建設

調査期間　平成 13 年 11 月～平成 14 年 3 月

調査面積　300 ㎡

担当者　服部信博・川添和暁・織部匡久



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

調査の経過　本遺跡の発掘調査は東海環状自動車道建設の事前調査として国土交通省愛知国道工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。発掘調査は平成 10 年度から継続して行われており、平成 10 年度は斜面の灰原末端と灰原直下の平坦部までの調査を、平成 11 年度には尾根から窯体にかけての工房跡が展開する部分と 10 年度調査区の北側灰原の調査を実施した。本年度の調査面積は 300 ㎡で窯本体とその直下の灰原を平成 13 年 11 月から平成 14 年 3 月にかけて調査した。

立地と環境　鶯窯跡は瀬戸市岩屋町及び鳥原町に所在する 14 世紀後半から 15 世紀前半の窯業遺跡で、この時期の瀬戸窯を代表する窯である。また編年資料の標識遺跡としても知られている。本遺跡は品野盆地から水野川支流の鳥原川沿いに南東奥へ細長くのびた谷状地形の北側段丘に立地している。窯体は丘陵の南斜面、標高 227m から 231m に築造され、窯直下から標高約 200m の斜面末端まで灰原が濃密に広がっている。周辺の史跡としては遺跡東側に隣接して、境内南東の丘陵末端に遺物散布がみられる曹洞宗の洞谷山浄源寺が、また鳥原川を上流へ進むと観光地としても著名な愛知高原国定公園岩屋堂の由来にもなっている岩屋山薬師堂がある。遺跡としては縄文時代早期・前期の鳥原縄文遺跡や岩屋堂遺跡、古墳時代以降の鳥原遺跡などがある。また平成 10 年度調査区の南端平坦部分は 19 世紀の屋敷跡、浄源寺遺跡（別名源吉屋敷跡）を一部含むと考えられる。

調査の概要　今年度検出された遺構に、窯体 1 基、工房跡 4 基、土坑数基、整地部分、灰原がある。

遺構　**窯体**　調査区北端部､丘陵の稜線より若干下部に存在している｡天井の残存は見られなかったものの、煙道部から焚口まで残存しており、残存長 7 m50 ㎝、最大幅は焼成室で 3 m を測る。窯体検出時、燃焼部全体に硬化面がみられ、焼台の配列が確認できた。窯本来の堀形以外に壁は 2 面確認でき、最終操業時の最大幅は 1 m80 ㎝である。床の最大傾斜は、約 50 度と非常に急勾配である。煙道部東側には、溝 1 条が検出されている。

工房跡　今年度検出された分では、SX06・08・09・10 がある。SX06・09・10 は近接する遺構群であり、基底部の広範囲に多量の赤色化した焼土と炭化物が堆積していた。SX06 は長軸 3 m50 ㎝・短軸 2 m90 ㎝・深さ約 2 m を測る、風化花崗岩を竪穴状に掘った長方形状の遺構である。検出面より深さ 1 m80 ㎝～ 1 m90 ㎝のレベルで黄褐色土による硬化面が見られ、さらに下層からは 3 層にわたり、炭化物・焼土・粘土を多く含む層が確認できた。繰り返し被熱している部分は、80 ㎝×60 ㎝ほどの範囲である。SX08 は、整地部分の下に存在する遺構である。深さ 80 ㎝を測る、風化花崗岩を竪穴状に掘った長方形状の遺構で、遺構底面には、炭化物・焼土・粘土を多く含む層が確認できた。SX09

は長軸２m40 ㎝・短軸２m10 ㎝・深さ１m60 ㎝を測り、風化花崗岩を竪穴状に掘った長方形状の遺構である。SX06 使用後に SX09 が作られており、SX06 側に土盛りで壁を作った状況が観察できた。遺構床面上十数㎝のレベルで黄褐色土の硬化面が一面見られ、さらに床直上には１m50 ㎝×80 ㎝の範囲にわたり炭化物・焼土・粘土を多く含む部分が確認できた。

灰原および整地部分　灰原は調査区南半分に濃厚に分布している。全面にわたり盗掘などによる攪乱を受けているものの、窯体前庭部より南側の広範囲にわたり、灰層と整地層とが互層堆積をなしていた。最深部で約３m を測る。灰層は、SY01 の前庭部から掻き出された状況が確認でき、鷲窯跡に堆積している灰原は SY01 からのみによることが伺われる。

出土遺物　古瀬戸後期を代表とする緑釉小皿・尊式花瓶・筒形容器・直縁大皿をはじめとして平碗・天目茶碗・折縁深皿・柄付片口・水注・瓶子・四耳壷・香炉などの器種が出土している。釉は濃い緑色の灰釉製品が主で、鉄釉製品も見られる。灰原下層からは無釉の片口鉢が多く出土した。集中して古瀬戸の生産に関わってたものの、操業初頭には無釉の陶器も若干生産していたものと考えられる。

調査の成果　調査の成果は以下の通りである。

（１）窯体・工房跡・整地面・灰原などの遺構群がきわめて良好な状態で検出できただけでなく、工房跡・整地面・灰原の時期的変遷を追うことが可能になってきた。

（２）鷲窯跡の窯体が、最終操業時の床面傾斜が約 50 度と極めて急角度であるなど、構造上の特徴を捉えることができた。これほど急傾斜の窯体は古瀬戸窯では初例となる。

（３）工房跡と考えられる風化花崗岩を竪穴状に刳り貫いた遺構が群集して検出されたこと。これらの遺構はほぼ共通した構造を有している。

（４）今年度も、遺物に関して、標識となりうる膨大な資料が出土した。今までの調査で出土しているものばかりではあるが、遺物数の把握はより実数に近いものとなるであろう。

３年目の調査により、鷲窯跡は遺跡全体のほぼ 80% の範囲を調査したことになる。これまでの調査成果を総合的に検討することにより、古瀬戸後期の窯業生産を具体的に復元しうる資料を提示できると考えられる。さらに窯体構造・陶製茶臼や灰釉馬文皿などの特殊な遺物存在も注目される。

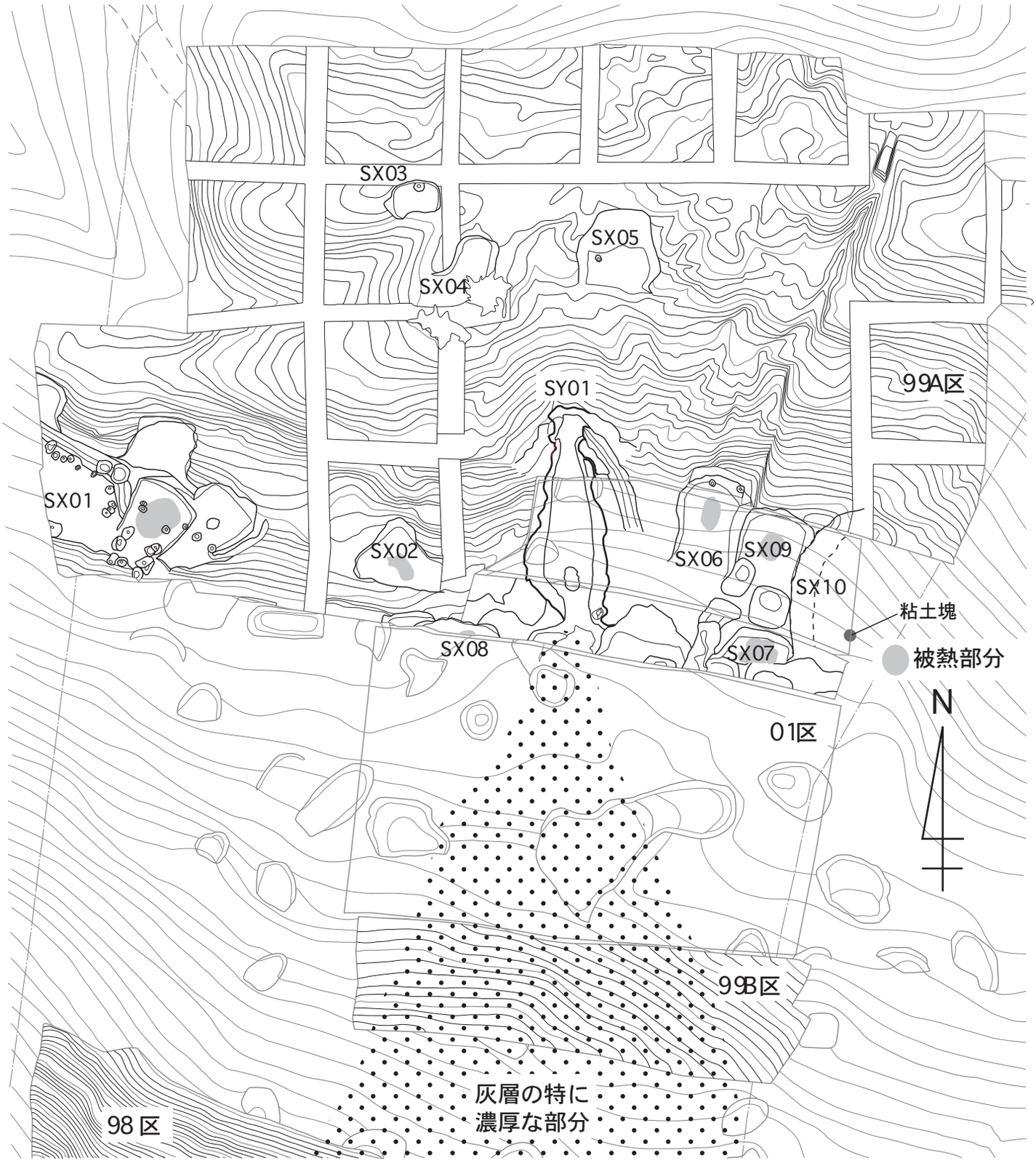
（織部匡久・川添和暁）



SY01･SX06･SX07･SX09･SX10（南東より）



調査区全景　灰原・整地面検出状況（南より）


SX03
SX05
SX04
SY01
99A区
SX01
SX02
SX06
SX09
SX10
粘土塊
SX08
SX07
被熱部分
N
01区
99B区
灰層の特に
濃厚な部分
98 区

遺構配置図 (1 ：200)

八王子（はちおうじ）遺跡

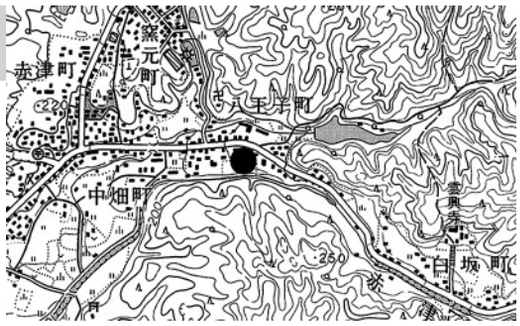
所 在 地　瀬戸市八王子町地内

調査理由　東海環状自動車道建設

調査期間　平成 13 年８月

調査面積　300 ㎡

担 当 者　服部信博・鈴木　裕・武部真木



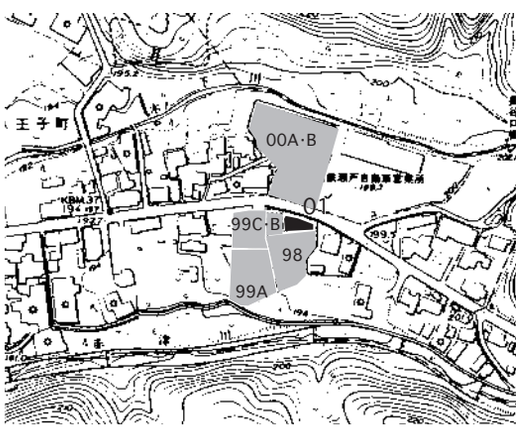
調査地点（1/2.5 万「多治見･猿投山」）

調査の経過　調査は東海環状自動車道建設にともなう事前調査として、国土交通省愛知国道工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。遺跡の調査は平成 10 年度から継続して行われており、本年度の面積は県道瀬戸・設楽線に面する 300 ㎡である。

立地と環境　遺跡は赤津川と木下川によって形成された狭小な沖積地に立地する。最も高い部分を東西方向に県道が通り、この両側に宅地が造成されている。遺跡東方 500m には縄文時代と中世の複合遺跡である白坂雲興寺遺跡があり、また木下川右岸には縄文時代～近世の複合遺跡である長谷口遺跡が隣接して存在する。

調査の概要　調査地点は道路建設および家屋建築による削平を受けていた。表土を除去するとすぐ黄褐色粗粒砂～シルト層のベースに達し、包含層の堆積は確認されなかった。近代～現代の窯業関連遺物を含む撹乱土坑、時期不明のピットなどを検出した。既に調査を終えた県道北側の 00 A区でも道路に面する部分が高く、広く削平を受けていた。縄文早期を中心とした遺物包含層は木下川に接する 00 B区北部に広がり、これらは約１m の比高差を測る。また、県道南側 98 、99 年度調査区でも縄文～中世の遺物包含層の厚い堆積がみられた。

以上のことから道路建設以前の旧地形はさらに高い尾根状を呈しており、この地点の縄文時代の生活面は削平されたものと思われる。　（武部真木）



調査区位置図



調査区全景

凧山屋敷遺跡（たこやまやしき）

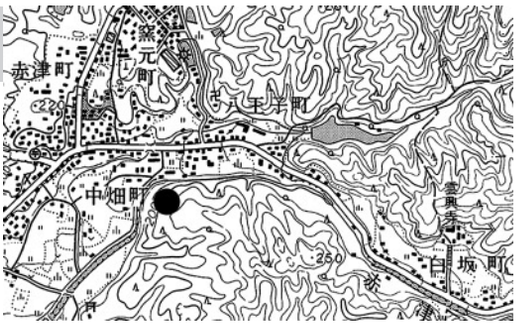
所 在 地　瀬戸市凧山町地内

調査理由　県道瀬戸設楽線建設

調査期間　平成 14 年 1 月～ 3 月

調査面積　1,600 ㎡

担 当 者　服部信博・宇佐見　守・藤岡幹根



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

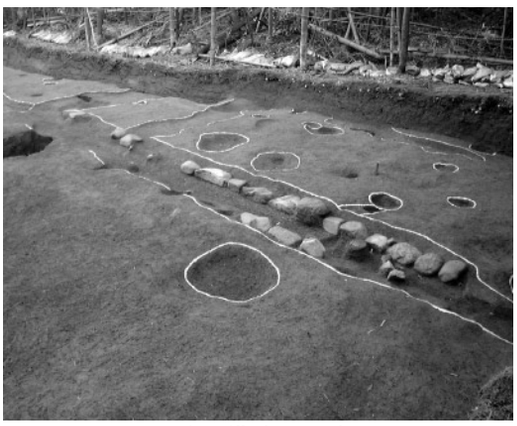
調査の経過　調査は県道瀬戸設楽線建設に先立ち、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け実施した。昨年度の範囲確認調査では、試掘トレンチから、古代から近代にかけての遺物が出土した。本年度の調査は、調査区南側をＡ区、北側をＢ区として実施した。

立地と環境　遺跡は、瀬戸市の南東部、瀬戸市凧山町に所在する縄文時代から近代にかけての複合遺跡で、矢田川支流である赤津川左岸、標高 190 m前後の丘陵（凧山）北西斜面に立地する。周辺の遺跡としては、北東から南西にかけての丘陵に凧山Ａ窯跡・凧山Ｃ窯跡・凧山窯跡・瓶子窯跡と中世から近世にかけての窯跡がある。

調査の概要　Ａ区は遺物包含層が良好に残存し 4 面調査となった。上層から近代（暗褐色砂質土）、近世（灰黄褐色砂質土）、戦国（暗褐色土）、古代・中世（黒色土）の時期に該当すると考えられる。調査区南部に広がる黒色土および地山直上で、古代の竪穴住居 1 軒（ＳＢ 01）と中世の集石遺構（ＳＫ 476）を検出し、古代の須恵器・土師器、中世の山茶椀・古瀬戸製品が出土した。また、黒色土上でピット群を検出したが、その多くが掘立柱建物の柱穴と考えられる。調査区南部に広がる暗褐色土ないし調査区北部の地山直上で、根石を持つ柱穴群、溝（ＳＤ 07 他）、大型土坑（ＳＫ 55・172 、ＳＸ 07 他）を検出した。根石を持つ柱穴の大きさは、まちまちだが、直径 60 ㎝以上の大型のものは、穴を深く掘削し途中まで埋め戻して根石をすえている。ＳＤ 07 は調査区南部で検出した溝で、検出長約 22 m、幅約 2 m、深さ約 50 ㎝を測る。屋敷の区画溝と考えられ、山（東）側から廃棄された様に人頭大の円礫（花崗岩）や陶器（古瀬戸から大窯にかけて）が多く出土した。調査区北部の大型土坑も円礫や陶器が出土し、廃棄土坑と考えられる。遺跡名の由来となった近代の屋敷に関わる遺構として、石垣と石組み溝（ＳＤ 01）を検出した。ＳＤ 01 は調査区南部で検出した溝で、検出長約 17 m（石組みの残存長は 7.5 m）、幅約 1.2 m、深さ約 20 ㎝を測る。石組みは 1 ヶ所のみ 2 段となっている他は 1 段で、石材は花崗岩の円礫である。また、調査区北部で、幕末から近代にかけての陶磁器が多く出土した。出土遺物の多くは近隣の窯跡で焼成されたと考えられる陶磁器や窯道具である。しかし、窯跡で見られる様な失敗作は少なく、窯道具も完形に近いものが多い。また、土師質の鍋や皿など窯での焼成品以外のものや、使用痕のある擂鉢などが出土している。このことから、この地が近隣の窯跡と関連した場と考えられる。　（宇佐見　守）



近代の屋敷に伴う石垣



石組み溝（ＳＤ 01）



調査区全景（2 面）



廃棄土坑（ＳＸ 07）



遺物出土状況（ＳＫ 55）



遺物出土状況（ＳＫ 174）



大型土坑（ＳＫ 172）



遺構検出状況（3 面）

はざまEかま 巡間 E 窯跡

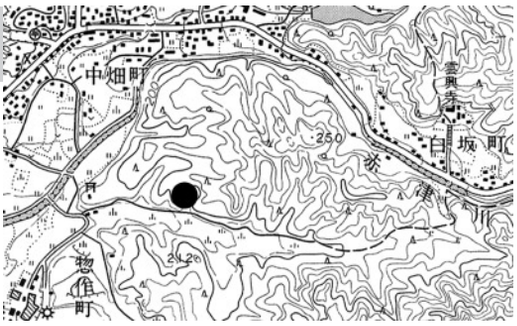
所 在 地　瀬戸市巡間町地内

調査理由　東海環状自動車道建設

調査期間　平成 13 年 4 月～ 6 月

調査面積　1,400 ㎡

担 当 者　服部信博・川添和暁・織部匡久



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

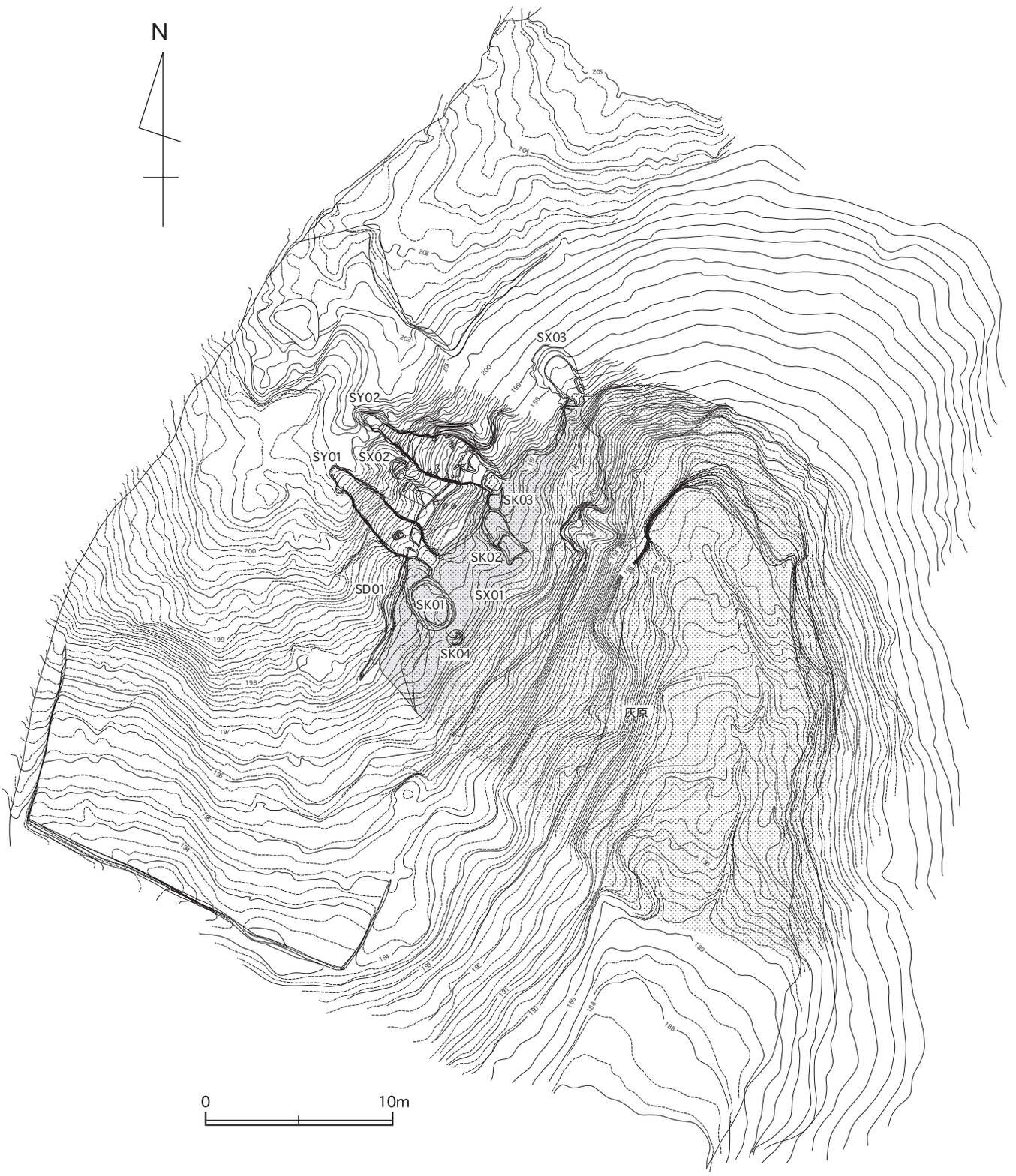
調査の経過　本遺跡の発掘調査は東海環状自動車道建設の事前調査として国土交通省愛知国道工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。調査面積は 1,400 ㎡で平成 13 年 4 月から 6 月にかけて実施した。

立地と環境　巡間 E 窯跡は瀬戸市の南東部巡間町地内に所在する室町時代初頭の窯業遺跡である。本遺跡は矢田川上流の赤津川流域に広がる赤津盆地を囲む丘陵の一角に位置している。巡間 E 窯跡は標高 200m から 210m を尾根とする馬蹄形をした丘陵の内側南東斜面に立地している。窯体は尾根直下に 2 基確認され、その軸線は真北から約 60 度西へ振っており、標高は 198m から 201m ほどである。灰原は窯直下から谷底部の標高約 190m ほどのところまで全体的に広がっている。丘陵の南端には東から西へ流れる惣作川に沿って里道が存在し、里道を挟んだ遺跡の対岸には自動車道の瀬戸東 IC の工事が進んでいる。周辺の主な遺跡としては上述の里道を西に進んだ式内社の大目神社には境内に古墳時代後期の円墳がある。北約 300m に近世の窯跡として著名な瓶子窯跡がある。また北東約 600m のところに縄文時代の八王子遺跡が、さらに西へ約 1km には縄文時代から中世の複合遺跡である惣作鐘場遺跡などがある。

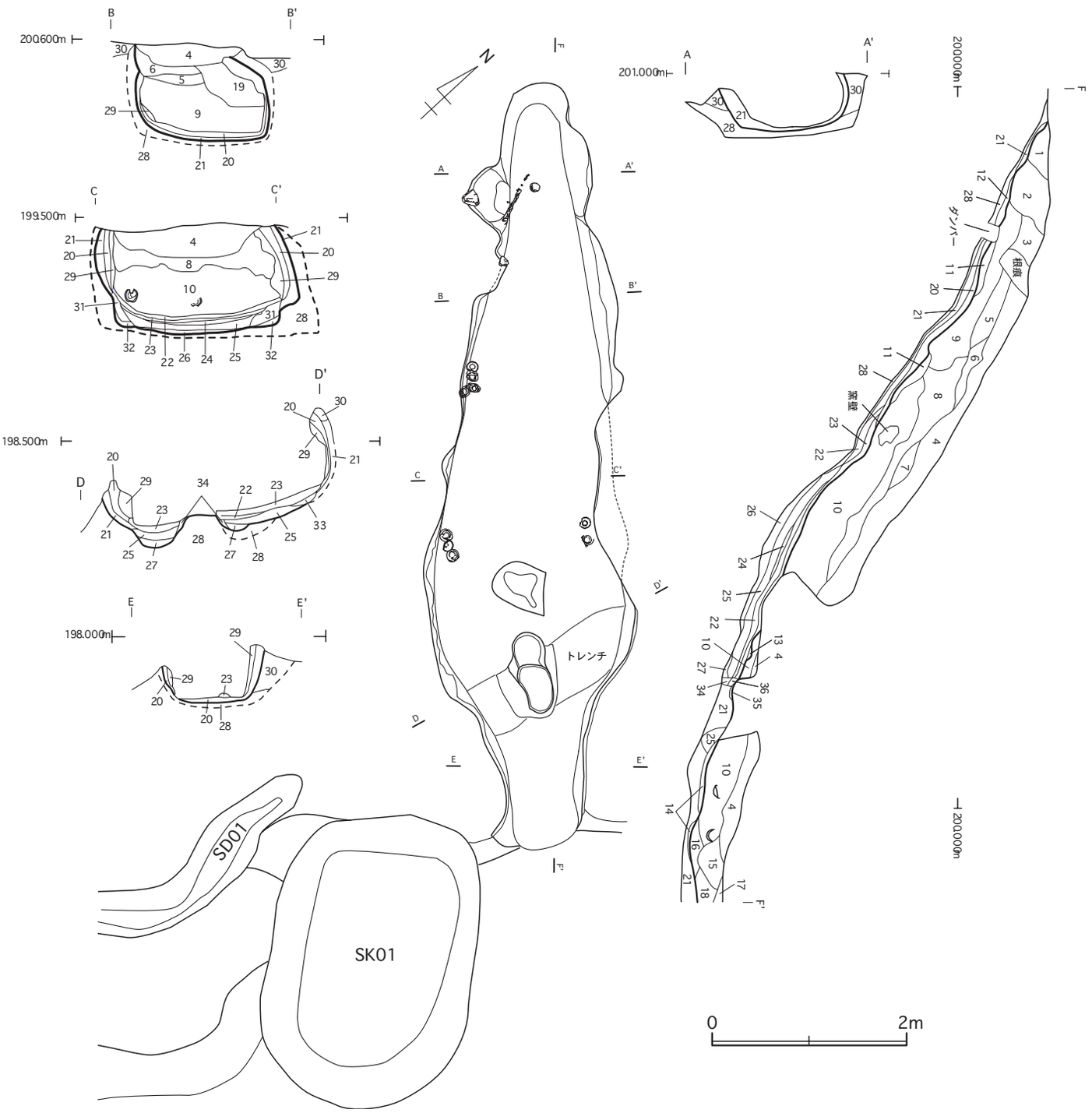
調査の概要　今回の調査で検出された遺構は、窯体 2 基・作業施設 1 基・溝 1 条・整地面に作られたロクロピット 1 基・灰原である。

遺　　構　窯体　SY01 は、煙道部から前庭部にかけて検出できた。天井部分はすでに崩落しており、窯壁から床までの、地山である風化花崗岩を刳り貫いて作られた部分のみ残存していた。残存長約 7.9m・最大幅約 2.2m・最大傾斜 32 度を測る。壁および床で修復の痕跡が最低 1 回は観察できた。出土遺物などから山茶椀を主に生産していたものと考えられる。煙道部からダンパーにかけての残存は良好で、ダンパーで深さ 50 ㎝を測った。ダンパーに使用されたと考えられる炭化材も出土している。焼成室の床表面に見られる硬化面はすでに消失しており、青灰色の粘質土が露出していた。分焔柱は残存高約 40 ㎝で、焼成室側から燃焼室側にかけて一度補修が行われていた。

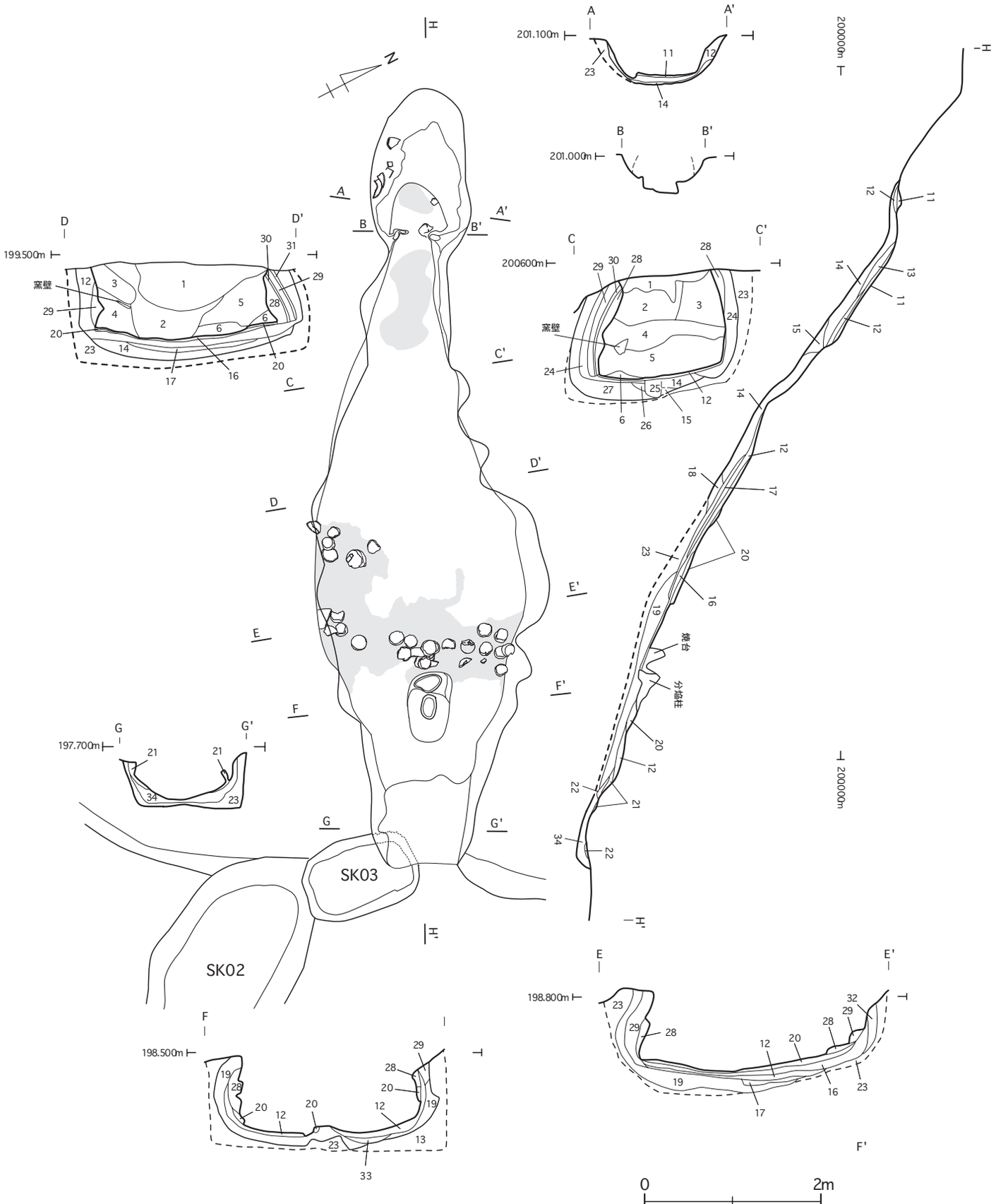
SY02 も煙道部から前庭部にかけて検出され、天井部分はすでに崩落していた。残存長約 8.8m・最大幅約 2.7m・最大傾斜 31 度を測る。出土遺物などから古瀬戸を主に生産していたものと考えられる。SY01 同様に、SY02 も煙道部からダンパーにかけての残存が良好であった。深さ 45 ㎝を測り、空気の開閉部分の形状をよく留めていた。焼成室では、床表面の硬化面が若干残存しており、分焔柱にほど近い焼成室では焼台の配列が観察できた。壁および床で修復の痕跡が最低 2 回観察できた。窯体内は赤色を呈している。分焔柱



第 1 図　巡間 E 窯跡　遺構配置図



第 2 図　SY01（1:60）


N
A
A'
201.100m
B
B'
201.000m
C
C'
200.600m
D
D'
199.500m
E
E'
198.800m
F
F'
198.500m
G
G'
197.700m
H
H'
200.000m
窯壁
焼台
分焔柱
SK03
SK02
0
2m

第 3 図　SY02（1:60）

は残存高約 30 ㎝で、焼成室側から燃焼室側にかけて一度補修が行われていた。

作業施設　地山を切ってさらに窯からの掻き出し物などで整地をしている部分 (SX01)、境目の斜面に対して平行に切っている溝 (SD01) 、SX01 を掘り込む形のロクロピット (SK04) 、SX01 下では土坑２基 (SK01・02) 、SY02 北東奥では、地山を刳り貫いた長方形を呈する遺構 (SX03) が検出された。

SX03 は長さ約 3.2m・最大幅約 2.1m・深さ約２m にわたり、風化花崗岩を刳り貫いて作られた遺構である。内面には厚さ数センチの炭化物が堆積し、周囲には溝が巡る。遺物は生焼けの四耳壷片のみで、SY02 に伴う遺構かと考えられる。SX01 は、古瀬戸片および山茶椀片などの遺物のほかに炭化物および焼土塊を多量に含む灰層を何度も重ねて作られている。SX01 上から掘り込まれた SK04 は、長径約 90 ㎝・深さ約 60 ㎝、軸部で直径約 10 ㎝・深さ約 40 ㎝を測り、遺構上面には片口鉢が正位置で置かれていた。SK01・02 は、長軸約３m 程、短軸約 1.5m から２m 程で、山茶椀のみの出土であった。SY01 に伴う施設と考えられる。

窯の前庭部から SX01 、さらに下方の傾斜する斜面および谷底には、灰原が展開している。谷奥部を中心に、長径約 30m・短径約 23m の範囲にわたっている。セクションでは SY01・SY02 の両窯からの灰層が互層をなしており、さらに風化花崗岩出自の粗粒砂が厚く灰層間に堆積する様子が観察できた。最深部の堆積は約 3.5m であった。

出土遺物　山茶椀系では椀・皿・片口鉢など、古瀬戸では、椀・折縁深皿・皿・鉢・天目茶椀・柄付片口・香炉・四耳壷・瓶子・水注などが出土した。古瀬戸の出土では特に折縁深皿が目立っていた。

窯操業以前に堆積したと思われる赤褐色土からは、縄文土器 (中期後半) が若干出土した。また、石鏃・磨製石斧も採集されている。

ま と め　この調査では、独立した丘陵全体を調査対象とした。そのため、窯本体・作業施設および作業場・灰原を総合して調査できたことにより、窯周辺の窯業生産の復元ができうるのが大きな成果である。窯体内の出土遺物では、SY01 は山茶椀９型式、SY02 は古瀬戸中期 IV 段階が中心である。灰原では両窯からの灰層が互層をなして堆積していることから、SY01 と SY02 はほぼ同時操業していた時期があったと考えられる。しかし SY01 の操業終了後、SY02 の掻き出し物により SY01 の前庭部を土盛りなどして整地されていることから、最終的には SY02 のみが操業していたことが伺われる。窯体についてはダンパー構造の良好な残存状態など、貴重な資料の提示ができるものと考えられる。

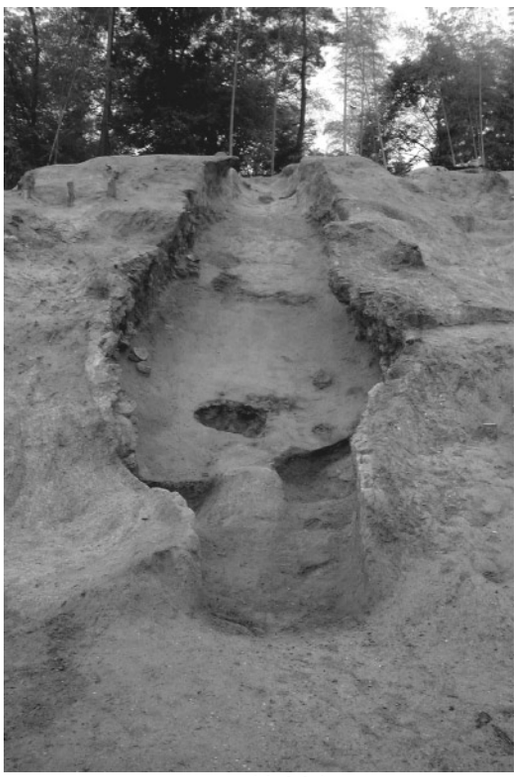
(織部匡久・川添和暁)



完掘状況（東より）



灰層堆積状況（東より）



SY01（東より）



SY02（東より）



SX03（北より）



SK04（北西より）

惣作（そうさく）・鐘場（かねば）遺跡

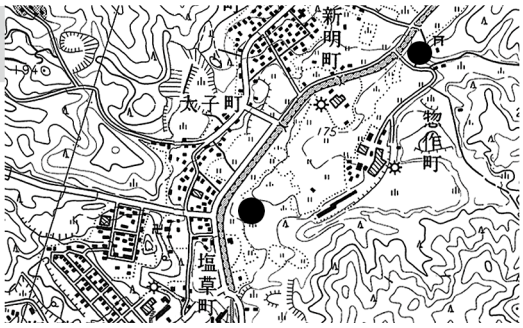
所在地　瀬戸市惣作町、鐘場町地内

調査理由　県道瀬戸設楽線建設

調査期間　平成13年4月～10月

調査面積　5,860㎡

担当者　服部信博・宇佐見　守・藤岡幹根・織部匡久



調査地点（1/2.5万「瀬戸・猿投山」）

調査の経過　調査は県道瀬戸設楽線建設に先立ち、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、昨年度から実施している。昨年度の調査では、後期旧石器時代終末から近世にかけての遺構・遺物が確認され、本遺跡が断絶を伴いつつも長期間にかけて継続する複合遺跡であることが明らかとなった。

立地と環境　遺跡は瀬戸市の南東部、惣作町から鐘場町にかけて所在し、矢田川支流である赤津川左岸の南西から北東方向に形成された、標高約165～180ｍの段丘に立地する。周辺の遺跡としては、南接して太子縄文遺跡・太子遺跡が、北東の丘陵に大目神社古墳・巡間Ｅ窯跡・瓶子窯跡・凧山Ｃ窯跡・凧山窯跡・凧山屋敷遺跡・凧山Ａ窯跡が、北東の赤津川右岸に八王子遺跡・長谷口遺跡がある。

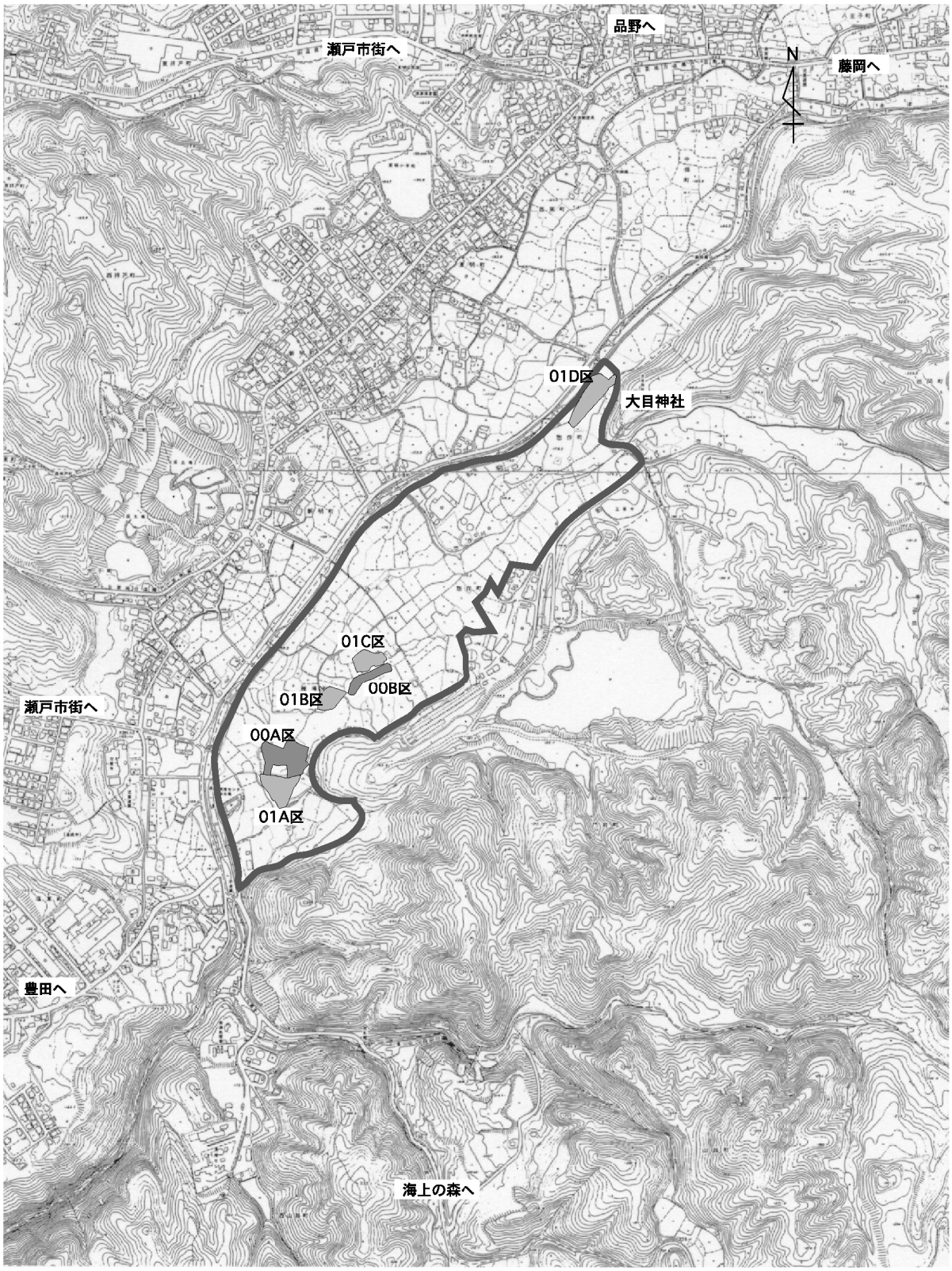
調査の概要　本年度の調査は、00Ａ区の南西側にＡ区、00Ｂ区の西側にＢ・Ｃ区、式内社である大目神社が鎮座する丘陵西裾にＤ区を設定して実施した。なお、Ｄ区は廃土処理の関係から２回に分けて調査を行った（Ｄａ・Ｄｂ区）。

Ａ区　赤津川と門前川に挟まれた南北に伸びた段丘の南端にあたり、00Ａ区より一段下がった場所である。後期旧石器時代終末～縄文時代草創期、縄文時代中期、中世の遺構・遺物を確認した。

00Ａ区との境の南向き斜面から、後期旧石器時代終末～縄文時代草創期の石器（木葉形尖頭器・掻器など）・剥片がまとまって出土した（ＳＸ04）。

調査区西側段丘端で、縄文時代中期の竪穴住居を５軒検出した。00Ａ区で同時期の住居を３軒検出しており、合わせて８軒となる。ＳＢ01は西側が削平されており残存状況は良くないが、直径約3.8ｍの円形をしている。明確な柱穴は未検出だが、西側を除き幅約10㎝、深さ約１㎝の壁溝を検出した。また、住居のほぼ中央で、一辺約60㎝の隅丸方形をした石と土器片を併用した炉を検出した。土器片は炉の内側に二重に貼り付けられており、土器片を取り除くと中央が被熱していた。ＳＢ02はＳＢ01の北隣りにあり、ＳＢ01同様西側が削平されており残存状況は良くないが、長径約4.4ｍ、短径約４ｍの楕円形をしている。柱穴は楕円形をしており、柱跡と掘形が明確なものもあった。西側を除き幅約10㎝、深さ約３㎝の壁溝を検出した。明確な炉は未検出だが、中央北東よりで土器片が出土した直径約50㎝、深さ約10㎝の土坑を検出した。

調査区南西部の同一場所でＳＢ03～05を検出した。ＳＢ05は直径約2.8ｍの円形をしている。西側を除き幅約10㎝、深さ約10㎝の壁溝を検出した。また住居のほぼ中央で、直径約60㎝の円形をした地床炉を検出した。炉の中央には大型の礫が２個置かれ、



第１図　調査区配置図（1：10000）

その下が被熱していた。ＳＢ05の直上で検出したＳＢ04は直径約３mの円形をしている。明確な柱穴・壁溝は未検出だが、住居の中央西よりで直径約60㎝の円形をした石囲炉を検出した。炉の中央は被熱していた。さらにＳＢ04の直上でＳＢ03を検出した。長径約3.7 m、短径約3.3 mの楕円形をしている。明確な柱穴・壁溝は未検出だが、住居内から石囲炉に使用された大型の礫の他、土器片・石鏃・剥片・小型の礫などが出土した。

調査区西側の段丘斜面の上層から山茶椀・古瀬戸製品など中世の遺物が、下層から人面付土器・掻器など縄文時代中期の土器・石器が出土した（ＳＸ01）。

調査区中央から北側にかけて竪穴状遺構や掘立柱建物の柱穴など中世の遺構を検出した。竪穴状遺構（ＳＫ109）は西側が削平され全形は不明であるが、東西約３m、南北2.5m以上を測る。中から山茶椀・古瀬戸製品・伊勢型鍋などが出土した。掘立柱建物の柱穴の中には、完形又は完形に近い小椀や小皿が出土したものがあったが、それらの形式が柱穴ごと違い、建物の建て替えが推定される。

Ｂ　区　　門前川に面した段丘端にあたる。飛鳥時代と平安時代前期の遺構を検出した。

調査区北東部の段丘端で飛鳥時代の竪穴住居を２軒検出した。ＳＢ01の残存状況は大変良好であった。約５m四方の隅丸方形をし、北壁を除く三方に壁溝を巡らす。カマドは北壁中央に位置し、全長約１m、幅約60㎝を測る。中央は被熱し、焚口周辺は炭化物が広がっていた。カマド周辺で土師器甕が出土した。なお、住居中央南よりにも炭化物が広がっており、土師器片が出土した。カマドの東隣で貯蔵穴を検出した。長辺約65㎝、短辺約50㎝の方形をし、深さ約36㎝を測る。周囲に高さ約３㎝の馬蹄形の土手を巡らす。貯蔵穴に長方形の蓋をのせた痕跡も確認でき、中から須恵器高杯・蓋、土師器甕が流れ込んだ状態で出土した。柱穴を中軸より南にずれて４箇所検出した。他には穿孔のある砥石などが出土した。ＳＢ02はＳＢ01の北隣にある。削平を受け痕跡を残すのみであったが、南北約５m、東西残存部約2.5 mを測る。遺物の出土がなく正確な時期は不明である。

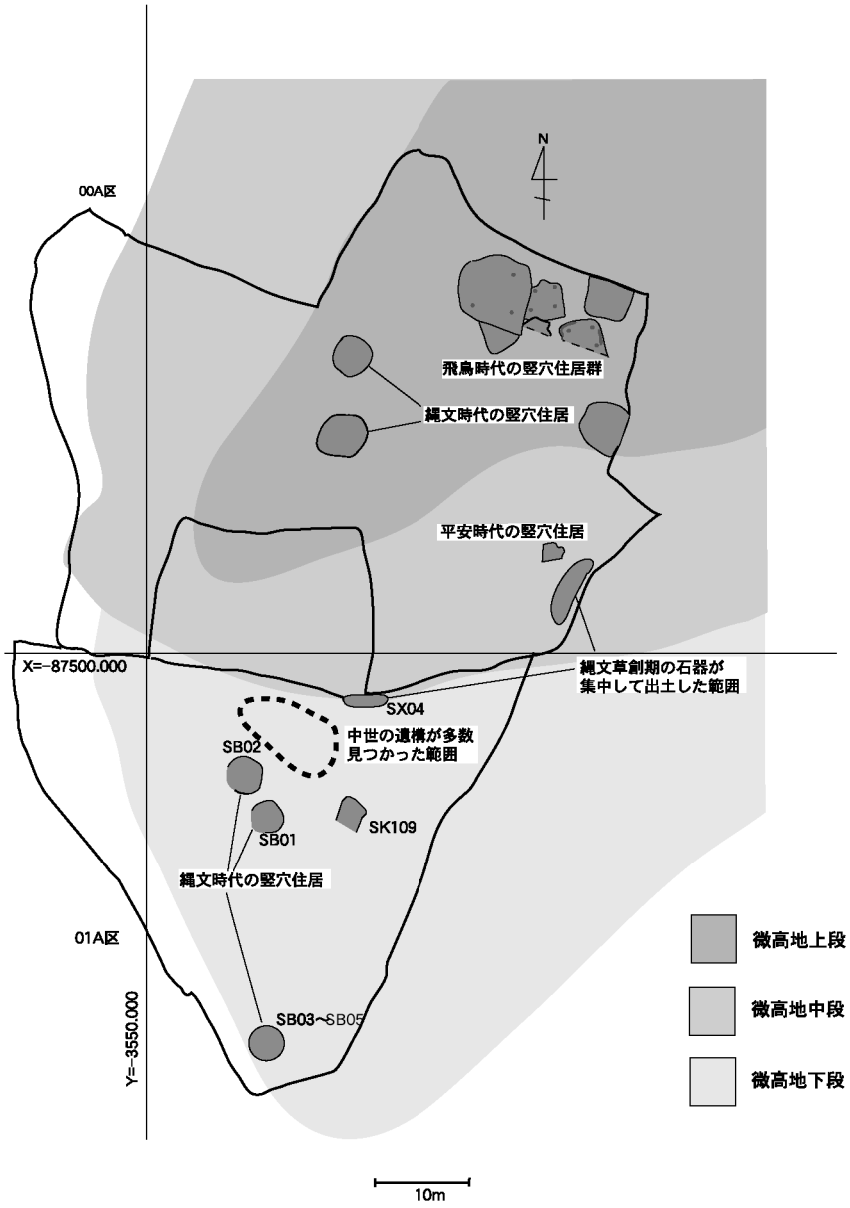
Ｂ区は他の調査区と違い古代の遺物の出土が目立つが、この時期の明確な遺構としては、平安時代前期の大型土坑（ＳＫ108）を調査区北西部で検出したにすぎない。西側が調査区外に続くため、全貌をつかむことはできなかったが、直径約２mの不定形な土坑である。中から須恵器壺・甕、灰釉陶器平瓶などが出土した。

その他、２条の並行する溝、ピット群、集石遺構などを検出したが、遺物の出土がほとんどなく正確な時期は不明である。また、包含層から縄文時代の石鏃、中世の山茶椀・古瀬戸製品・青磁などが出土した。

Ｃ　区　　Ｂ区の約40m北東に位置し、門前川に面した段丘端にあたる。段丘下は00Ｂ区である。弥生時代中期、古墳時代後期、中世の遺構を検出した。

調査区の南西部の段丘端で弥生時代中期の溝を検出した。南側は削平されているが、全長約10 mを測る。中から弥生土器長頸壺が出土した。

古墳時代後期の竪穴住居を２軒検出したが、共に残存状況が大変良好であった。ＳＢ01は北側が調査区外に続くため完掘できなかったが、約５m四方の隅丸方形をしている。幅約20㎝、住居外からの深さ約25㎝の壁溝と柱穴を３箇所検出した。須恵器■、土師器甕などが出土した。ＳＢ02は調査区中央、ＳＢ01の南西約３mにある。約６m四方の隅丸方形をし、北壁の大部分と西壁南側を除き壁溝が巡っている。壁溝未検出の西壁南



第２図　00A・01A 区主要遺構配置図　1：800



01A 区全景



01A 区　SB01・SB02 検出

側に出入り口があったと推定する。住居の埋土に大量の灰が混入していたことと、住居内から鞴（ふいご）の羽口が出土していることから、住居またはその周辺で鍛冶が行われていたことが考えられる。他の遺物として須恵器杯蓋、土師器高杯・甕などが出土した。

中世の遺構は山茶椀などを含む土坑群を調査区東側で検出した。また、調査区南東部は自然流路の一部となっており、中から古墳時代から中世にかけての遺物が出土した（ＳＸ01）。その中に底部に印花が施された山茶椀が出土しており大変珍しい。

他には耕作土から後期旧石器時代終末～縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土した。

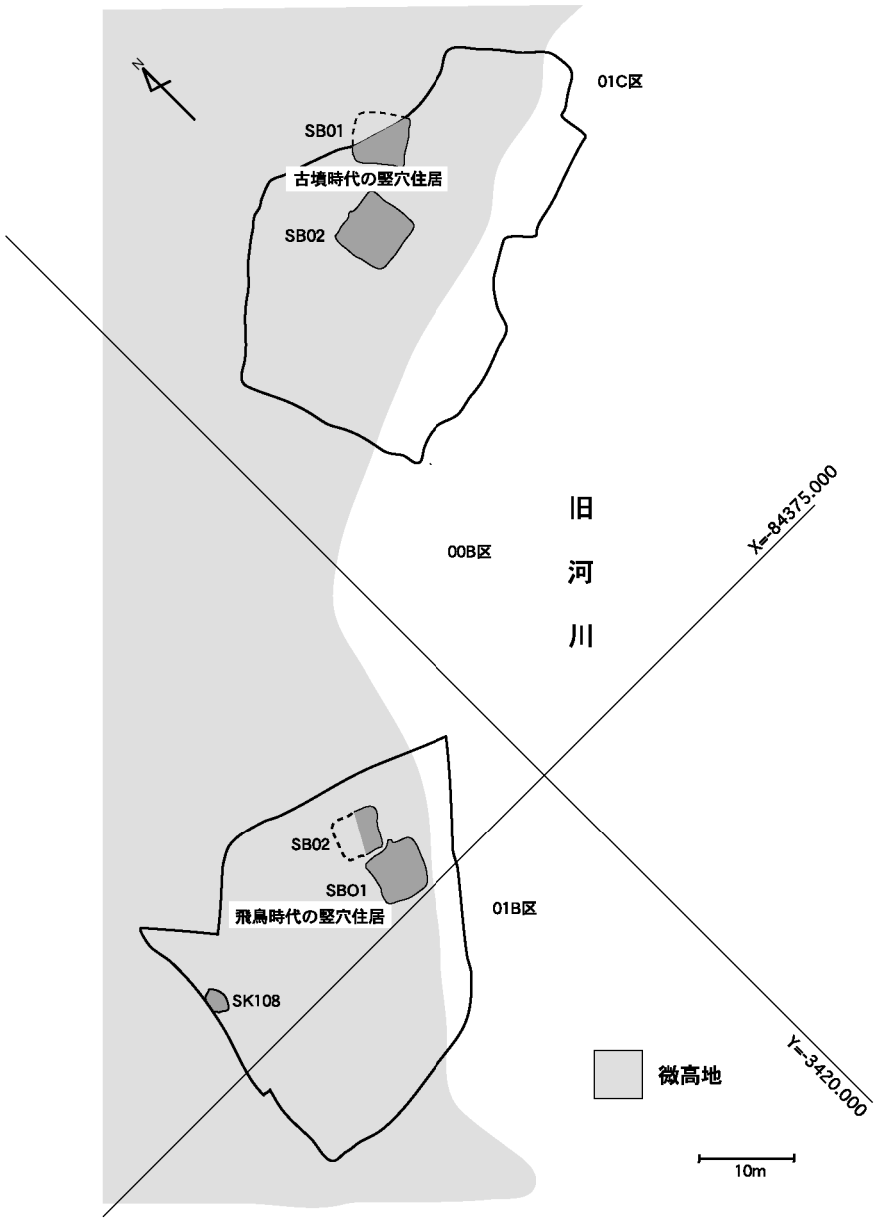
Ｄ　区　大目神社が鎮座する丘陵と赤津川に挟まれた段丘にあたり、調査前は３段の段差のある水田であった。調査の結果、縄文時代中期の遺物包含層、古墳時代後期の竪穴住居６軒・掘立柱建物１軒などを検出した。

下段は北西部で中世の遺物が出土した程度であったが、中段は縄文時代中期の遺物包含層が良好に残存していた。竹管文を施した土器片の他に、石鏃・磨製石斧・打製石斧・石匙などの石器が出土した。明確な遺構は未検出だが、居住域は遺物の出土範囲から推定して、神社のある丘陵上か、その真下あたりにあるものと推定される。

上段は南東部で古墳時代後期の住居群を検出した。水田造成時に削平されたり調査区外に続くため全貌がわかるものは少ない。ＳＢ01は調査区中央東側にある。約５ｍ四方の隅丸方形をし、東壁に沿って幅約40㎝、深さ約10㎝の壁溝を検出した。カマドは北壁中央に位置し、全長約1.6ｍ、幅約１ｍを測る。中央は被熱し、焚口周辺は炭化物が広がっていた。貯蔵穴はカマドの東隣にあり直径約50㎝の円形をしていた。住居内から須恵器高杯・蓋、土師器甕、土製勾玉、鉄鏃などが出土した。ＳＢ01は２間×２間の掘立柱建物により破壊されているが、竪穴住居から掘立柱建物への建て替えが推定できる。

他の住居は狭い範囲に重複して検出された。ＳＢ02はＳＢ03に切られる。約６ｍ四方の隅丸方形をし、北壁を除く三方に幅約30㎝の壁溝を巡らす。カマドは北壁中央に位置し、被熱部分を検出したが、残存状況は良くない。中から土師器甕などが出土した。ＳＢ03は南側が調査区外となる。約４ｍ四方の隅丸方形をし、壁溝、カマドは未検出である。中から須恵器が出土した。ＳＢ04も南側が調査区外となる。検出長東西約４ｍ、南北約2.4ｍである。カマドは北壁位置し、全長約1.5ｍ、幅約1.5ｍを測る。被熱部分を検出し、中から土師器甕が出土した。ＳＢ05はＳＢ04･06に切られるが、南北約5.5ｍ、東西残存部約2.8ｍの隅丸方形をしている。壁溝は未検出だが、柱穴を２箇所検出した。カマドは北壁付近に位置し、被熱部分を検出したが、残存状況は良くない。中から土師器甕などが出土した。ＳＢ06も南側が調査区外となる。検出長東西約1.5ｍ、南北約３ｍを測る。中から土師器が出土した。住居は調査区南東部に集中し調査区外に広がる。大目神社古墳を築いた人々の集落と推定される。

ま　と　め　本年度の調査は昨年度の調査成果をさらに深めるものとなった。特に縄文時代中期の竪穴住居を昨年度と合わせ８軒検出したことは、この時期の住居の検出例が愛知県西部では少ないだけに好資料となろう。また、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての竪穴住居は、昨年度と違い残存状況が良好であった。総数も17軒となり、この時期の集落が赤津川左岸の段丘上に広く展開している可能性が高い。（宇佐見　守・藤岡幹根・織部匡久）



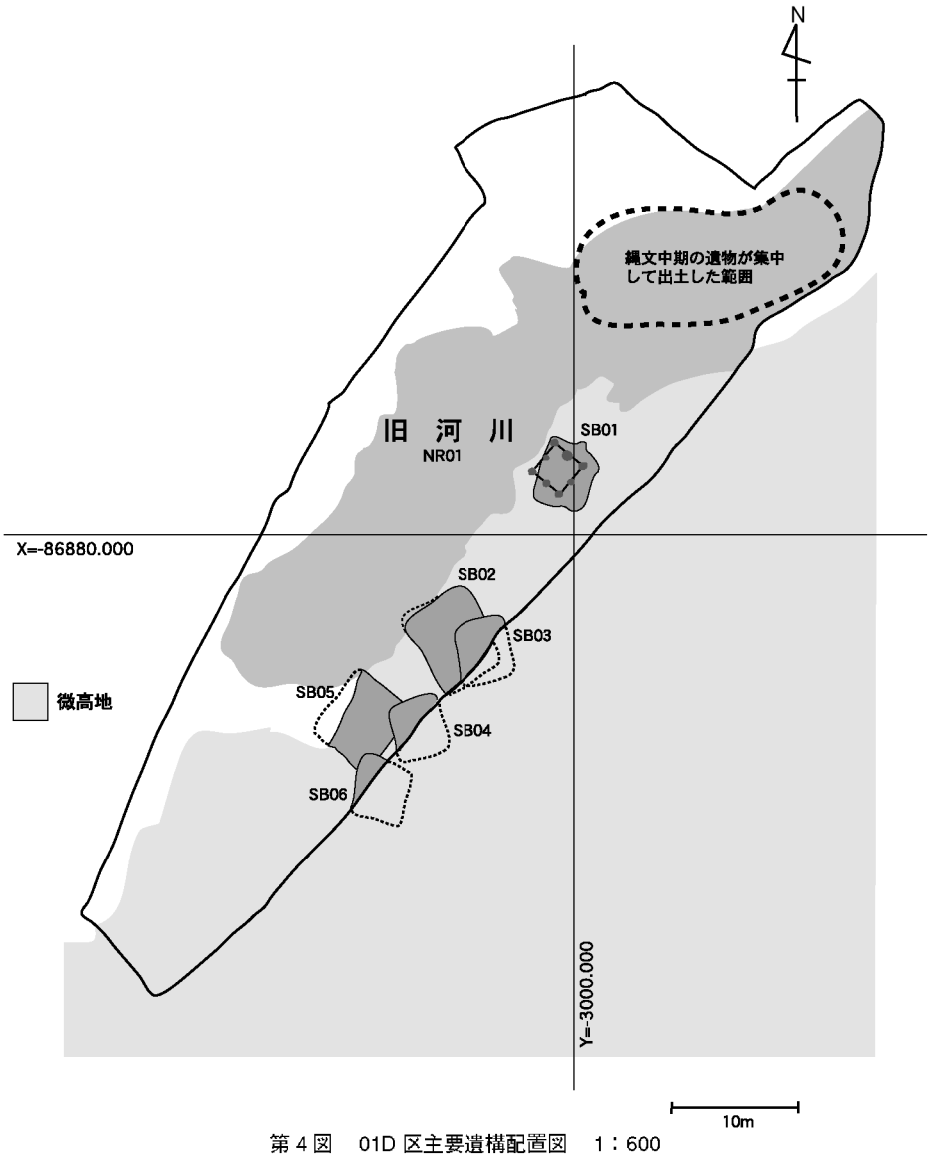
第 3 図　01B・01C 区主要遺構配置図　1：800



01B 区全景



01B 区　貯蔵穴遺物出土状況



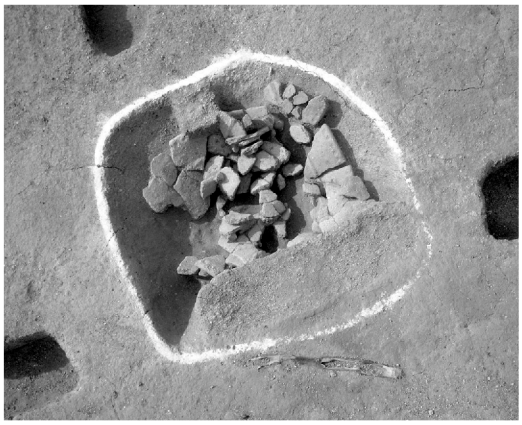
第 4 図　01D 区主要遺構配置図　1：600



01Da 区　SB01



01Db 区　竪穴住居群



01A 区 SB02 炉　出土状況



01A 区 SB02 炉　作業風景



01A 区 SB03



01A 区 SB05



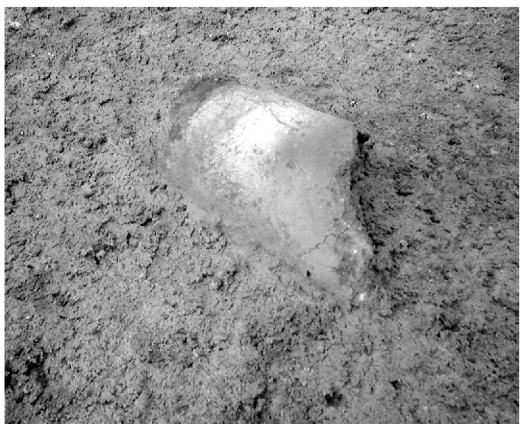
01C 区　全景



01C 区■出土状況



01C 区 SB02



01C 区鞴の羽口出土状況

吉野（よしの）遺跡

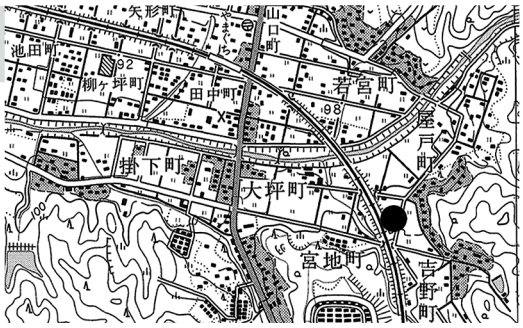
所在地　瀬戸市吉野町地内

調査理由　瀬戸環状線建設

調査期間　平成 13 年 11 月～ 12 月

調査面積　890 ㎡

担当者　服部信博・宇佐見　守・藤岡幹根



調査地点（1/2.5 万「瀬戸」）

調査の経過　調査は瀬戸環状線建設に先立ち、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、昨年度から実施している。昨年度の調査では、上面から近・現代の溝４条と中世の溝１条、下面から古墳時代初頭の柵（しがらみ）状遺構を伴う自然流路１条を検出した。

立地と環境　遺跡は山口川（矢田川）により形成された沖積地である山口谷の南東部、山口川にそそぐ吉田川の右岸に立地する。標高は約 100 mを測る。調査区の約 150 m南には、弥生時代から古墳時代にかけての土器が出土した吉田遺跡が所在する。

調査の概要　本年度の調査区は昨年度の調査区の北側で、東側の旧田地をＡ区、西側の旧宅地をＢ区として実施した。

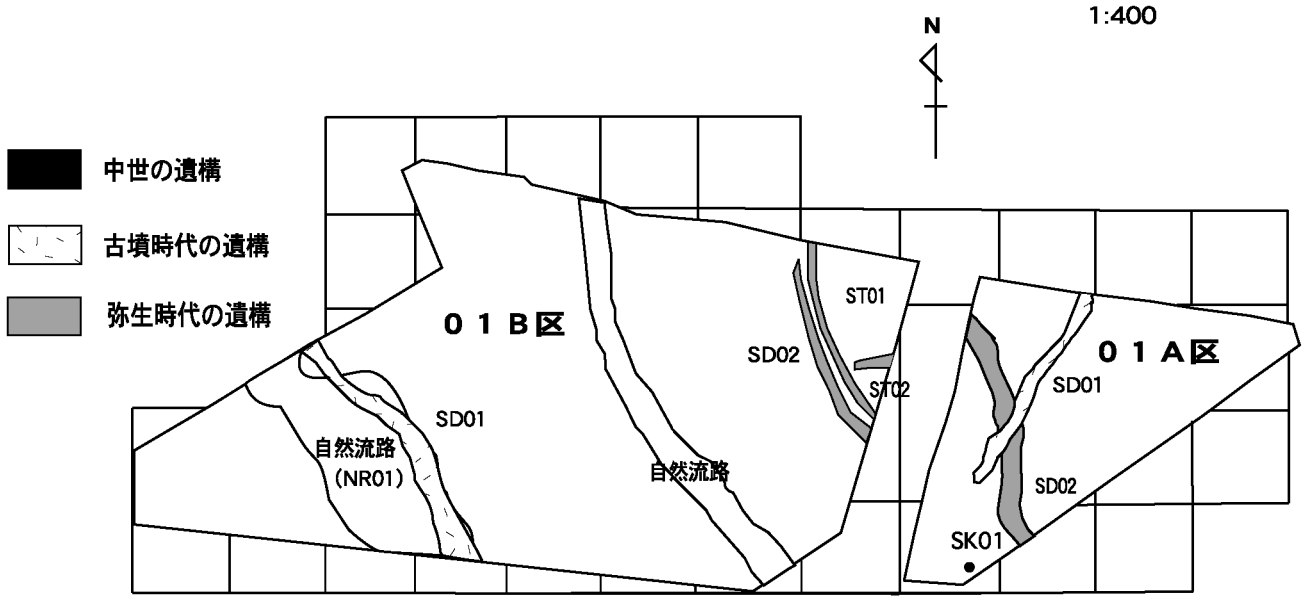
弥生時代中期以前　Ｂ区で自然流路を２条検出した。西側の流路（ＮＲ 01）は 00 区で検出した自然流路から分かれ、東に大きく蛇行して北西に流れる。全長は下流が調査区外に続くため不明であるが、検出長約 10 m、幅約 7.2 m、深さ約 1.2 mを測る。遺構に伴う遺物はないが、条痕文系土器片と石錐が出土した。

弥生時代中期　Ａ区西側からＢ区東側にかけてこの時期の可能性のある水田を２枚検出した。水田は平行して掘削された２条の溝に挟まれ、溝に沿う畦畔２本（Ｂ区側の畦畔で幅約 60 ㎝、高さ約５㎝）と、Ｂ区側の畦畔に直交する畦畔１本（幅約 40 ㎝、高さ約２㎝）を確認した。直交する部分には幅約 10 ㎝の水口が存在する。水田の大きさは２枚とも調査区外に続くため不明である。遺物はＡ区側の溝（ＳＤ 02）の底から櫛描波状文をほどこした壺片が出土した。

古墳時代　Ａ・Ｂ区で溝を各１条検出した。Ｂ区の溝（ＳＤ 01）はＮＲ 01 が埋没した後に掘削された溝で、00 区の柵状遺構と一連の遺構である。つまり、ＮＲ 01 が埋没した後、同一場所にＳＤ 01 を掘削し、水流の確保のために柵を築造したと考える。全長は下流が調査区外に続くため不明であるが、検出長約９m、幅約 2.6 m、深さ約 90 ㎝を測る。この時期の遺物の出土はない。

中　世　Ａ区で無釉の小椀片が出土した土坑（ＳＫ 01）を検出した。直径約 60 ㎝、深さ約 45 ㎝を測る。

ま と め　弥生時代中期の可能性のある水田や古墳時代の溝など、農業生産に関連する遺構を検出した。しかし、住居跡などは検出されず、遺物も極少量出土したにすぎない。00 区で検出した自然流路からは、この時期の遺物が少なからず出土しており、農業生産に携わった人々の集落は調査地点より南側にあると考える。　（宇佐見　守・藤岡幹根）



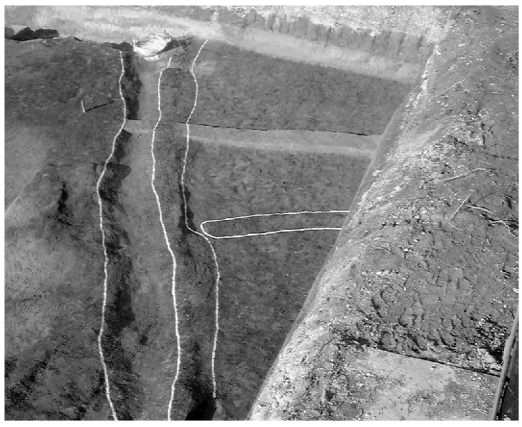
第１図　吉野遺跡 01 区主要遺構略測図



01B 区　全景



01A 区　全景

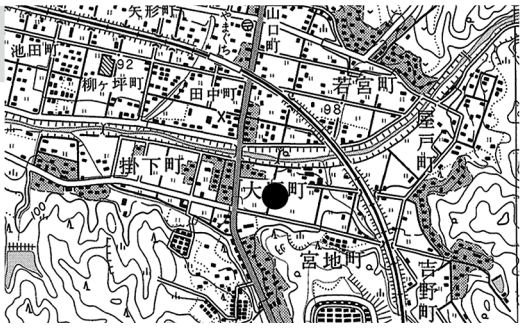


01B 区　畦畔と溝（SD02）



01A 区　SD01・SD02

大坪西遺跡（おおつぼにし）



調査地点（1/2.5 万「瀬戸」）

所在地　瀬戸市大坪町地内

調査理由　瀬戸環状線建設

調査期間　平成 13 年 10 月～ 11 月

調査面積　510 ㎡

担当者　服部信博・宇佐見　守・織部匡久

調査の経過　調査は瀬戸環状線建設に先立ち、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、昨年度から実施している。昨年度の調査では、7 世紀代の須恵器坏身片や土師器甕片が出土した土坑状の落ち込みなどを検出した。

立地と環境　遺跡は山口川（矢田川）により形成された沖積地である山口谷の南東部、山口川にそそぐ吉田川（東側）と薬師川（西側）に挟まれた丘陵裾に立地し、標高は約 92 mを測る。

調査の概要　調査区は遺跡推定範囲の南西部にあたり、調査前は水田であった。昨年度の調査区の西側をＡ区、東側をＢ区として実施した。

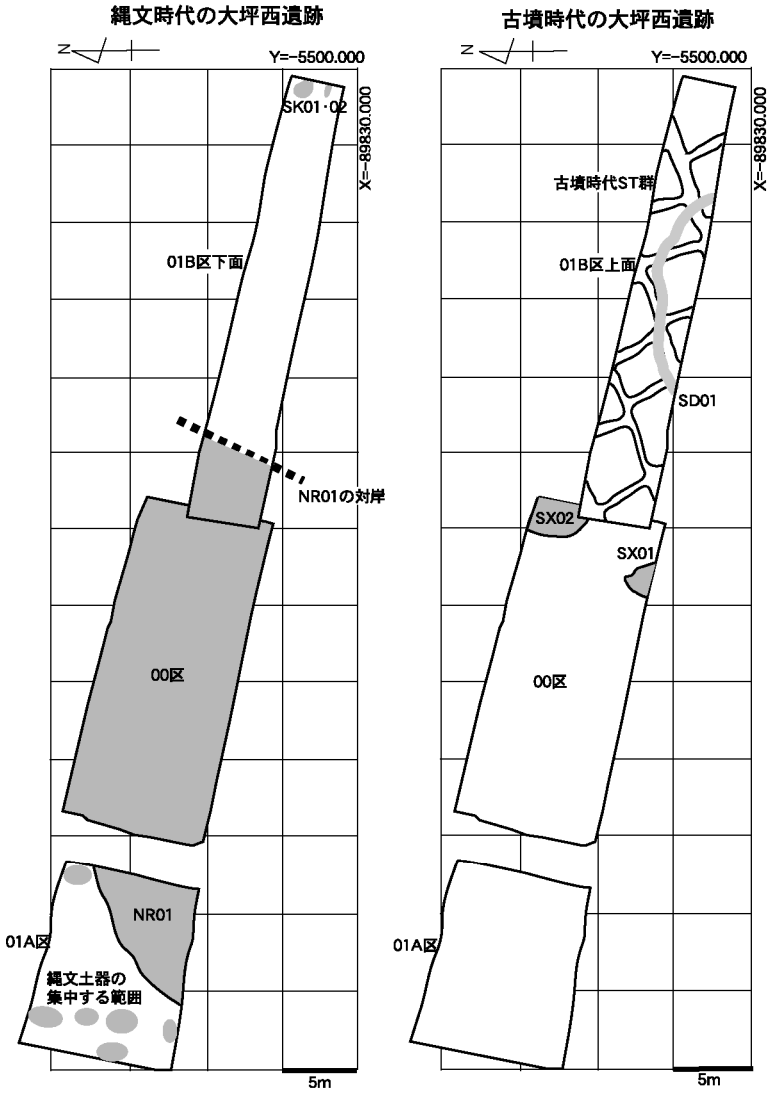
縄文時代後期　Ａ区南東部で自然流路１条と、西部から北東部にかけて土器集積遺構 4 基を、Ｂ区東部で土坑２基を検出した。この時期の遺物の大部分はＡ区で出土した。土器は無文土器の割合が高く、有文土器の出土は少量である。器種は深鉢の他に注口土器が出土している。石器は石鏃・石棒が出土した。石鏃・剥片の石材は下呂石が多い。約 75 m南に所在する大坪遺跡で縄文時代後期の住居跡が１軒検出されており、これとの関係が注目される。

古墳時代　Ｂ区で水田跡 12 枚と溝１条を検出した。水田の残存状況は悪く、畦畔跡を検出するにとどまった。畦畔は北東から南西にかけて並行する大畦畔３本と、それにほぼ直交する小畦畔からなる。調査区が東西に細長く、完掘した水田はないが、およそ 3.5 m四方を測る。溝の残存状況も悪く、調査区南側で円弧を描くように走り、検出長約 12 m・幅約 25 ㎝・深さ約１㎝を測る。溝は切り合いから水田より新しい。遺物は調査区西側で広口壺片が出土した。

中　　世　Ａ・Ｂ区ともに明確な遺構は検出しなかったが、現水田の床土から山茶椀・古瀬戸製品が出土した。

ま と め　大坪西遺跡では従来知られていなかった縄文時代後期の遺物がＡ区でまとまって出土したことにより、遺跡の範囲がさらに西側に広がることを確認した。さらに、同時期の遺跡である大坪遺跡が近接しており、それとの関係も考慮する必要がある。

（宇佐見　守・織部匡久）



第１図　大坪西遺跡主要遺構略測図　（1：500）



01A 区全景（西から）



01B 区水田検出状況（東から）

権現山（ごんげんやま）遺跡

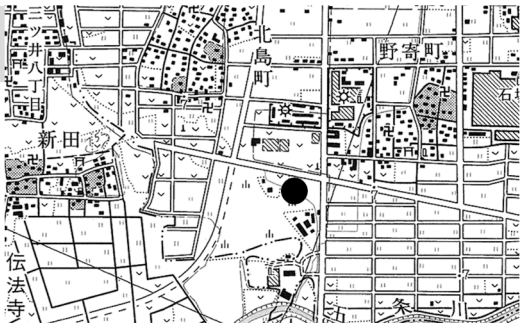
所 在 地　岩倉市北島町・野寄町地内

調査理由　五条川右岸流域下水道事業

調査期間　平成 13 年 6 月～ 10 月

調査面積　2,350 ㎡

担 当 者　石黒立人・鵜飼雅弘・早野浩二

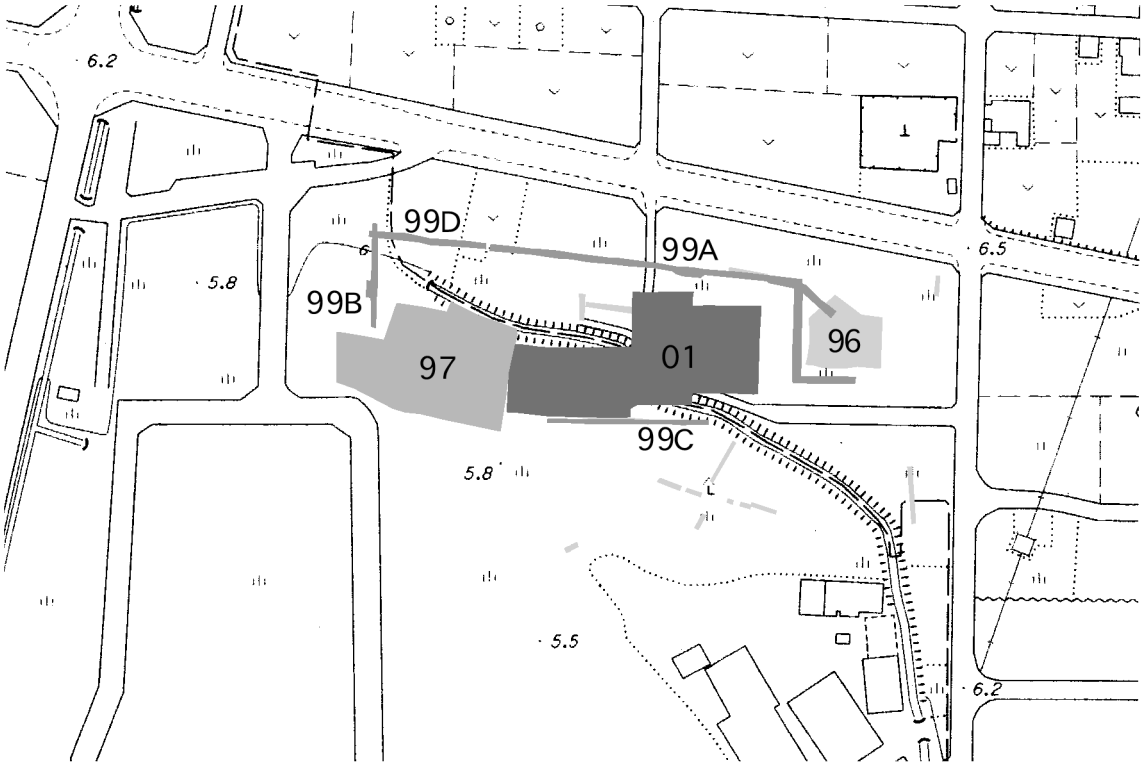


調査地点（1/2.5 万「一宮」）

調査の経過　権現山遺跡は岩倉市南西部の北島町・野寄町地内に位置する。本遺跡の調査は五条川右岸浄化センター建設の事前調査として、これまで平成８年、９年、11 年にわたり行われてきた。本年度の調査はスクリーンポンプ棟建設に伴う事前調査として、愛知県建設部下水道課より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、2,350 ㎡の発掘調査を行った。

立地と環境　本遺跡は五条川右岸の標高７m 前後の自然堤防上に立地する。遺跡の約 0.3 ㎞南には伝法寺野田遺跡、約 0.5 ㎞北西には元屋敷遺跡が近接し、周囲には三ツ井遺跡、猫島遺跡、大地遺跡、三ツ井稲荷山古墳、西春高塚古墳、伝法寺本郷遺跡、伝法寺廃寺、薬師堂廃寺など、弥生時代から古代にかけての遺跡が集中して存在する。

調査の概要　今年度の調査区（01 区）は 96 区と 97 区に挟まれた地点に相当する。今回の調査では 97 区で確認された縄文時代後期の遺物包含層と遺構群が 01 区西部にまで及んでいること、古墳時代初頭と古墳時代後期の墓域が 96 区から 01 区、97 区にかけて広範囲に展開していることなどが明らかとなった。しかし残念なことに、調査区には廃材を処理した撹乱坑が各所に散在し、多くの遺構が破壊を被るといった状況であった。



調査区配置図（1：2500）

縄文時代後期　縄文時代後期の遺構として調査区西部において竪穴住居３棟（ＳＢ02～ＳＢ04）などを検出した。ただし、それらは古墳時代や近世の遺構と複雑に重複し、遺構の認定はきわめて困難な状況にあった。それらのなかで特筆される遺構として、ＳＢ02内において確認した石器製作に関連する土坑（ＳＫ71）、土器片敷遺構（ＳＫ73）がある。ＳＫ71は長径約0.6ｍ、短径約0.4ｍの長楕円形の土坑で、下呂石のみからなる剥片が集中して出土した。ＳＫ73は径約1.5ｍの不整円形の土坑で、破砕された粗製無文深鉢が土坑底面からやや浮いた位置に敷かれた状態で出土した。なお、竪穴住居群以東では明確な遺構は確認されないが、小河川状の緩やかな落ち込みには、遺物がやや集中して出土する地点が認められた（ＳＸ04、ＳＸ05）。

古墳時代初頭　今年度の調査で確認された古墳時代初頭の遺構には方形の墳丘墓４基、竪穴住居１棟がある。これで墳丘墓は97区と併せて計５基（墳丘墓１～墳丘墓５）が確認されたこととなり、これらの墳丘墓は東西100ｍ以上にわたって、一定の間隔を空けながら列状に配置されていることも明らかとなった。97区と01区にまたがる墳丘墓２（ＳＤ64）は墳丘部分の一辺が約18ｍと大型で、周溝も幅約５ｍ、深さ約1.5ｍを測るかなり大規模なものであった。加えて墳丘側がかなりの急傾斜であることも印象的である。それぞれの墳丘墓の周溝内各所では、３世紀後半を前後する土師器壷、高杯などの出土がみられた。なお、埋葬施設は確認されていない。

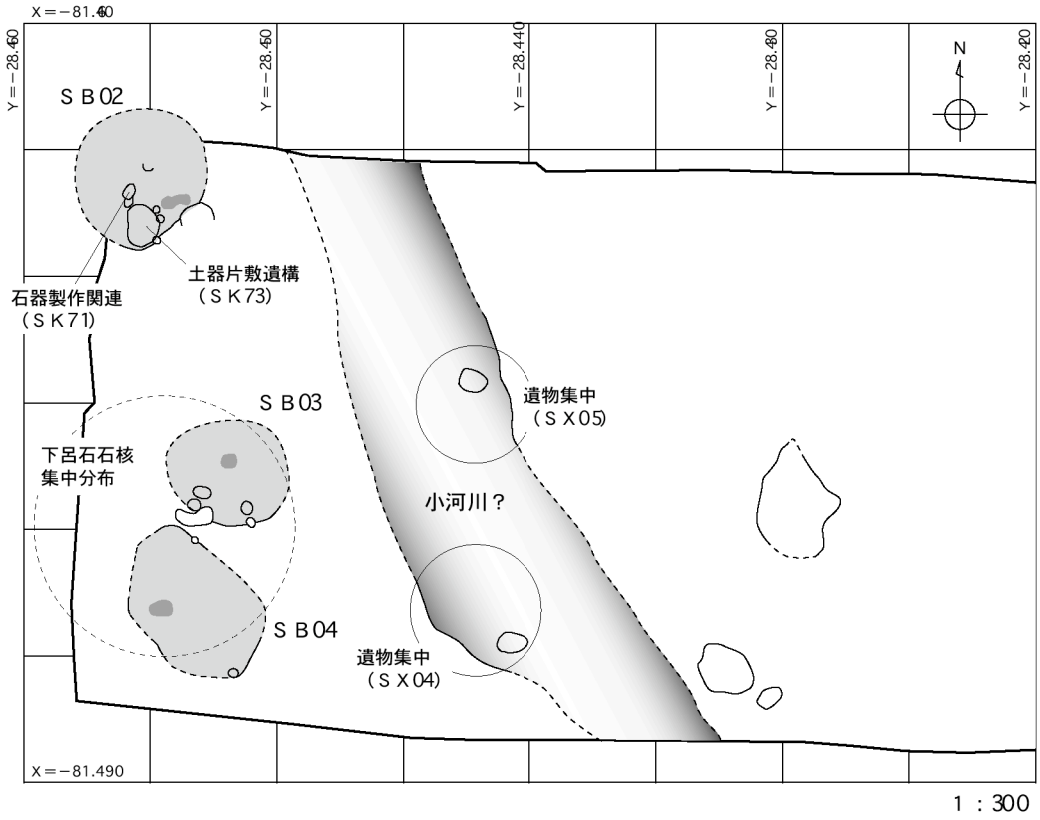
墳丘墓４と墳丘墓５の間に配された竪穴住居２（ＳＢ01）は、周溝状の貼床をもつ構造で、主柱穴と地床炉も明確に検出された。墳丘墓群との重複関係が存在しないこと、墳丘墓群と同時期の土器が出土していることなどから、墳丘墓群にかかわる施設としての可能性が有力視されよう。

古墳時代後期　調査区の南東部で、円墳の周溝（ＳＤ08）を検出した。これは遺構の形状や位置関係などから96区南西部において検出された溝（96区ＳＤ08）と同一の遺構と判断される（円墳４）。円墳の規模は径約25ｍに復原され、周溝からは６世紀前半の須恵器壷が出土した。なお、円墳４の周溝は墳丘墓５の周溝を避けるようにして掘削されていることから、古墳時代後期においても、古墳時代初頭の墳丘墓群は削平されずに残存していたことが推測される。

古代・中近世　古代の遺構として８世紀後半の溝が数条、中世の遺構として土壙墓の可能性が高い円形土坑などが散発的に検出されている。近世の遺構は区画溝、土坑などが比較的濃密に検出され、区画溝からは陶磁器をはじめとする遺物の出土も多い。一方で井戸は検出されなかったことから、01区は屋敷地（97区）の周辺に相当するものと考えられる。

ま　と　め　縄文時代の遺構群が尾張平野低地部において発掘調査された事例は皆無であることから、本遺跡の調査成果は当地域の縄文時代研究に大きく貢献するものとなろう。また、遺跡の時期もこれまで資料が希薄であった縄文時代後期初頭から後期前葉を充足するものであるだけに、その資料的な価値はきわめて高い。

古墳時代初頭には、本遺跡は大型の墳丘墓のみから構成される墓域であった可能性が高い。古墳時代初頭における墓域の構成、景観を具体的に知ることのできる資料として貴重である。また、この墳丘墓群を造営した集落が周辺の遺跡に存在した可能性が高いとすれば、近接する元屋敷遺跡との関係が重要となるであろう。（鵜飼雅弘・早野浩二）



01 区西半縄文時代後期遺構配置図



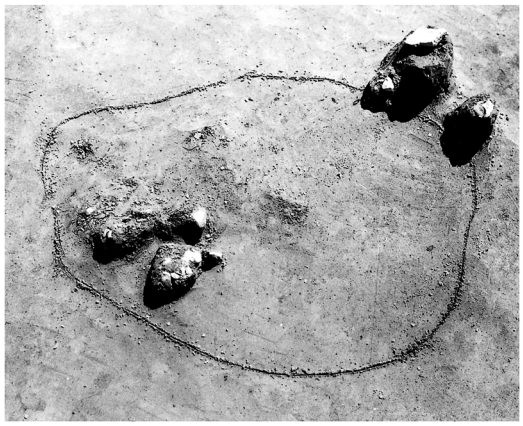
縄文時代後期の遺構



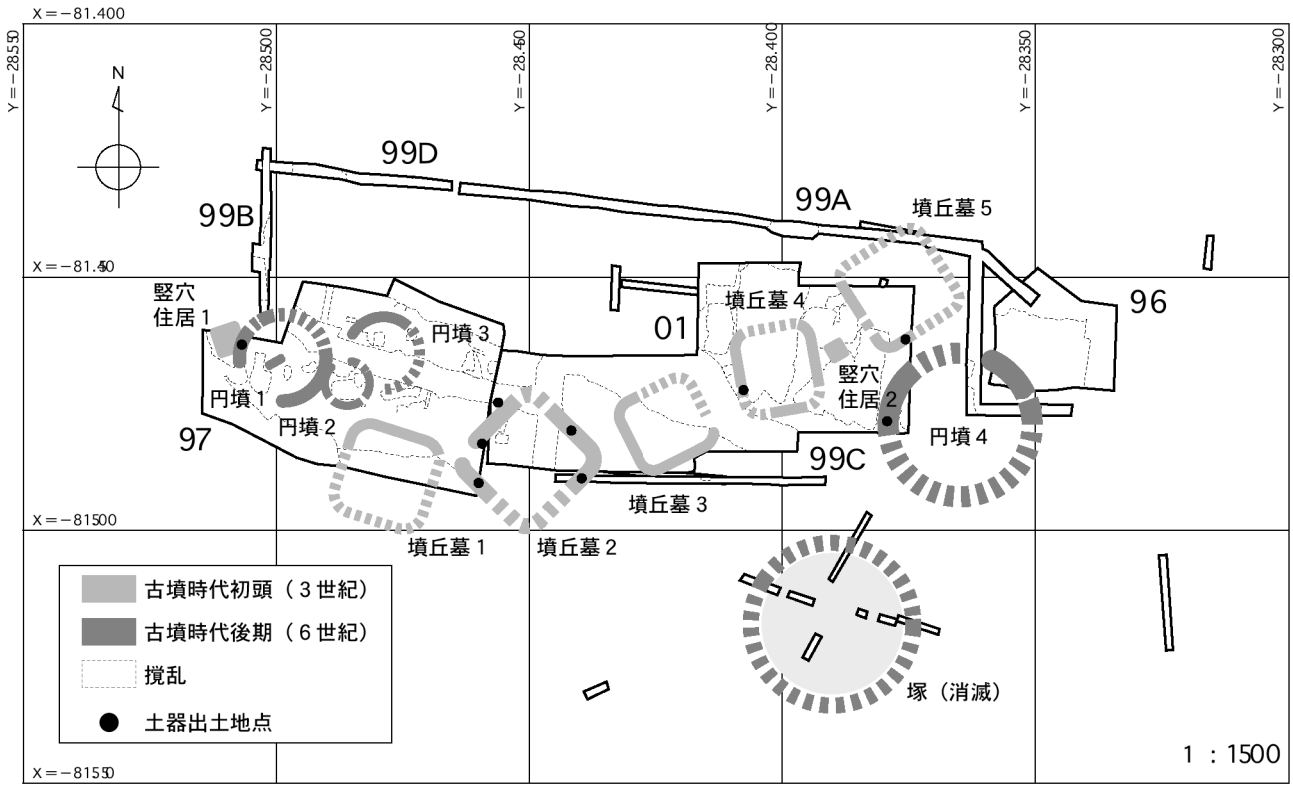
SB02



土器片敷遺構（SK73）



石器製作関連（SK71）



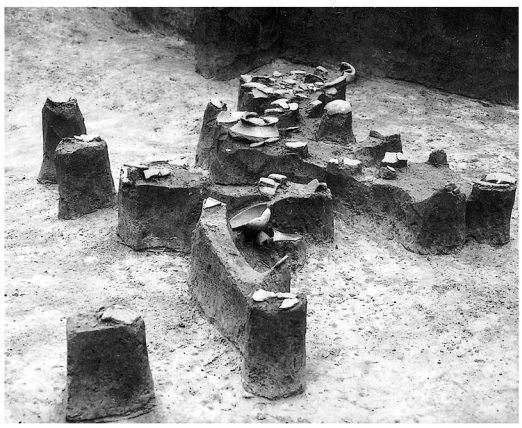
古墳時代遺構配置図



墳丘墓２（手前）と墳丘墓３（奥）



墳丘墓２の周溝の断面



墳丘墓２の土器群



墳丘墓５（奥）と円墳４（手前）

清洲城下町遺跡（きよすじょうかまち）

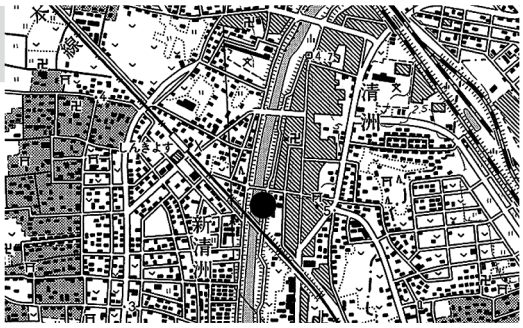
所在地　西春日井郡清洲町地内

調査理由　五条川改修

調査期間　平成14年1月～2月

調査面積　1,000㎡

担当者　石黒立人・松田　訓・堀田剛史



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　調査は五条川改修工事に伴う事前調査として、愛知県建設部河川課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成14年1月から2月にかけて実施した。調査面積は1,000㎡である。

立地と環境　清洲城下町遺跡は、尾張平野南部に町域を広げ、名古屋市西区に東で接する西春日井郡清洲町に所在する。遺跡は、五条川が岩倉市方面から南流した地点の両岸に位置し、河川の氾濫などによって堆積した沖積低地に立地する。調査地点の旧態は堤防及び畑地で、周辺は住宅地が広がる。現地表高は、約3.0mを測る。

調査の概要　調査地点の基本層序は、旧耕作土が0.2～0.3m入り、その直下に旧堤防の客土が約0.8～0.9m盛られており、この基盤と思われるにぶい黄褐色砂質シルト層が0.1～0.2m認められた。さらにこの下に近世後期の遺物がわずかに含まれる灰黄褐色砂質シルト層が0.1～0.2m堆積する。この灰黄褐色砂質シルト層までは遺構が認められず、この下に0.2～0.8mの厚さでにぶい黄褐色シルトが堆積しており、この上部においてわずかながら遺構が検出された。このにぶい黄褐色シルトの下部では沈鉄が顕著であり、この下の基盤層は灰白色細粒砂であった。この層は一部が窪地状に落ちこんでおり、ここには褐灰色砂質シルト・にぶい黄橙色細粒砂等が堆積していた。

今回の調査で確認された遺構は、戦国時代のものと思われ溝が4条、土坑10基、不定型な掘り込み1基などである。

戦国時代の遺構では、主として溝・土坑が検出された。溝は、隣接する五条川に直交して東西方向に検出され、このうちの3条は検出面において溝の上端間の距離1m内外、または切り合い関係を保って併走する。この東西に併走する3条の最も南の溝からは、土器、陶器、木製品等が出土している。土坑は調査区の中に散在して検出され、ほとんどのものが無遺物であった。

戦国時代の遺物では、土器皿、陶器皿、擂鉢、木製部材、木製薄片（墨書入り含む）などが検出される。　（松田　訓）



調査区全景（北から）



作業風景（南西から）



SD01 ～ 03（東から）



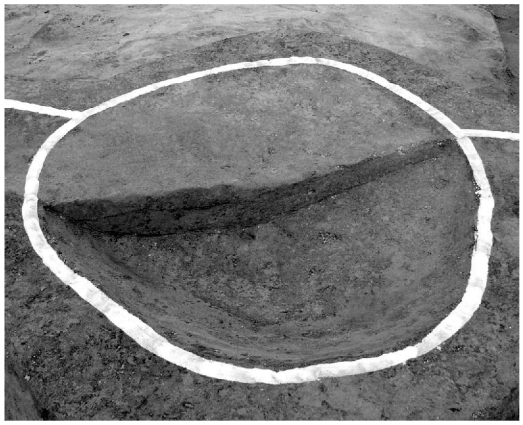
作業風景（東から）



SD03 遺物出土状況



文字資料出土状況



土坑断面



調査区全景（南から）

朝日（あさひ）遺跡

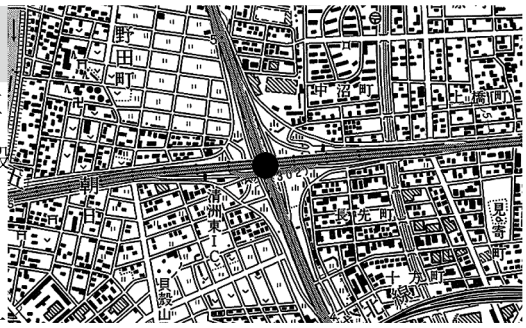
所 在 地　西春日井郡清洲町、新川町、春日町、名古屋市西区

調査理由　近畿自動車道清州東 JC・県道高速清洲一宮線建設

調査期間　平成 13 年 11 月～平成 14 年 3 月

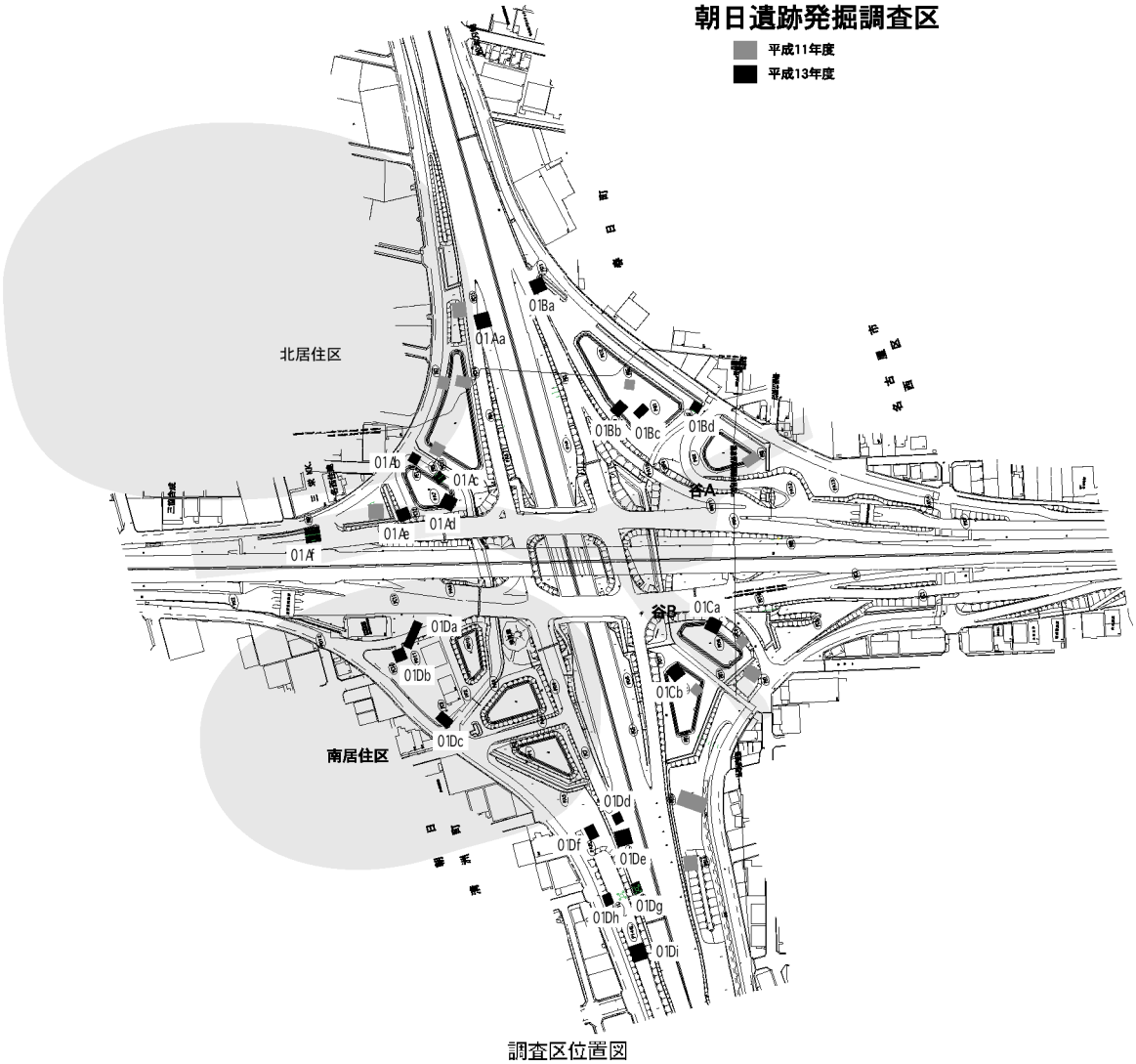
調査面積　2,952 ㎡

担 当 者　赤塚次郎・樋上　昇・皆見秀久・蔭山誠一



調査地点（1/2.5 万「清洲」）

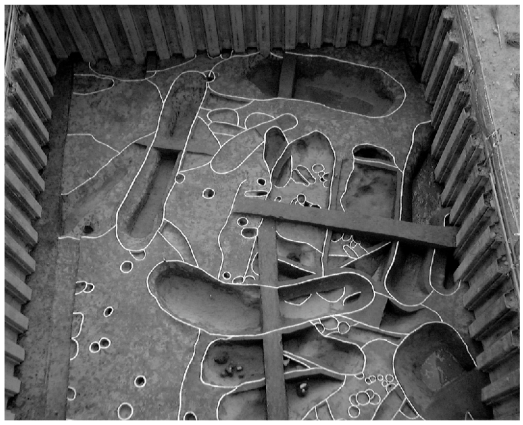
調査の経過　近畿自動車道清州東 JC および県道高速清洲一宮線建設に伴い、朝日遺跡にかかる部分について事前調査を行う必要があった。そこで平成 10 年度から日本道路公団・名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通して委託された当埋蔵文化財センターにおいて発掘調査を実施している。今年度の調査は平成 10 年度年報における朝日遺跡「調査区の表記について」に準じて A 区に 01Aa 区～ 01Af 区の 6 ケ所、B 区に 01Ba 区～ 01Bd 区 4 ケ所、C 区に 01Ca 区・01Cb 区の 2 ケ所、D 区には 01Da 区～ 01Di 区の 9 ケ所の併せて 21 ケ所の調査区を設定し、2,952 ㎡を調査した。調査期間は平成 13 年 11 月から平成 14 年 3 月である。



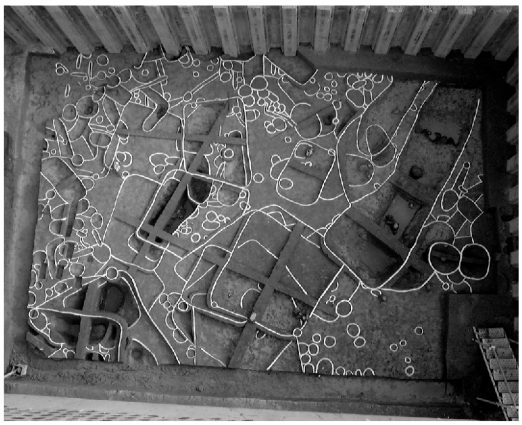
調査区位置図



01Ac 区　SD02 の貝層



01Bb 区　全景（1 面）



01Bc 区　全景（2 面）



01Cb 区　全景（2 面）

立地と環境　朝日遺跡は西春日井郡清洲町を中心に同春日町、新川町、名古屋市西区に広がる東海地方屈指の弥生時代集落で、現在では五条川左岸の後背湿地にあたる地域となっている。

調査の概要　01Aa 区はこれまでの調査で「北居住区」東の環濠帯、01Ac 区・01Ad 区～ 01Af 区は「北居住区」南の環濠帯に想定されている地域で、表土下標高 2.0m ～ 2.6m において灰褐色粘質シルトが 20 ～ 40 ㎝堆積しており、その直下にて環濠等を検出した。環濠の埋土は層厚 1.0m ～ 1.5m 程の黒色細粒砂を主体に堆積しており、溝の底部を標高－ 0.3m ～ 0.0m にて検出した。隣接する 01Ac 区と 01Ad 区では弥生時代中期中葉の環濠を 8 条、弥生時代中期後葉～弥生時代後期の環濠を 7 条、弥生時代中期中葉の「乱杭」、弥生時代中期後葉の谷 A 、土坑 2 基を確認した。この中で貝層を伴う環濠が、中期中葉のものが 3 条、後期のものが 1 条あり、弥生時代中期中葉の環濠の中には逆茂木が伴う可能性がある。谷 A の直上に堆積している層から戈形木製品が出土した。

01Bb 区では弥生時代中期前葉の竪穴住居・土坑、古墳時代前期初頭の竪穴住居、01Bc 区では弥生時代中期中葉の方形周溝墓 1 基・溝・大型の土坑、01Bd 区では弥生時代後期の溝、弥生時代前期の竪穴住居・溝・土坑を検出した。01Bc 区では方形周溝墓が確認されなかったことから、B 区全体に隙間なく墓が形成されているわけではないようである。また 01Bc 区では、中期の環濠の可能性がある溝、掘立柱建物と思われる柱穴が確認された。

01Ca 区では、弥生時代中期の土坑、方形周溝墓 1 基、谷 B と思われる旧河道を検出した。旧河道の堆積物には流木等を含む腐植物の堆積が顕著に見られた。01Cb 区は弥生時代後期前葉の環濠 1 条、弥生時代中期中葉～弥生時代後期の竪穴住居・土坑が検出された。環濠は弥生時代後期の「南居住区」の外環濠にあたるものと思われる。

01Da 区～ 01Dc 区はこれまでの調査で「南居住区」に想定される地域で、表土直下標高 2.4m ～ 2.6m にて黒色細粒砂を主体とする弥生時代～古墳時代前期の遺物包含層が検

出された。この遺物包含層は層厚 60cm ～ 80cm 堆積しており、この間に 4 面～ 5 面の遺構検出を実施した。3 調査区で弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居約 250 棟・土坑約 750 基を検出した。01Db 区では弥生時代後期の「南居住区」の内環濠を、01Dc 区にて古墳時代前期前半の方形状にめぐる墳丘墓の溝と思われるものを検出した。

01Dd 区～ 01Dh 区はこれまでの調査において「南居住区」の南に展開する墓域に想定される地域で、弥生時代中期中葉～後葉の方形周溝墓 10 基、弥生時代後期の溝 1 条を確認した。方形周溝墓のマウンドと溝は 2.1m ～ 2.3m にて検出され、軸線を変えて重複するものもあった。01Dg 区の方形周溝墓では南溝の掘り直しが行われ、マウンドの拡張が行われた様子が確認できた。

01Di 区では 99Da 区から続く朝日遺跡の南限と思われる溝 2 条を検出した。弥生時代中期後葉の土器片が出土した。（蔭山誠一）



01Db 区 1 面（1：100）



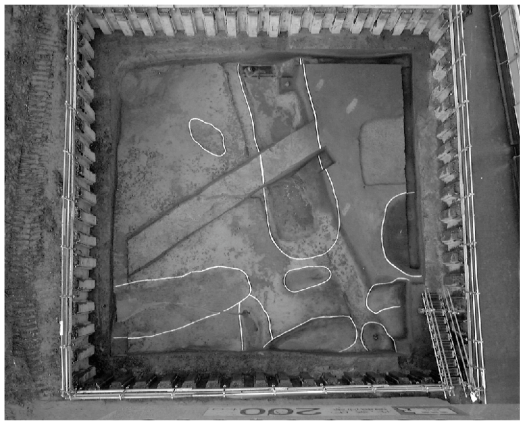
01Da 区　SK16 出土状況



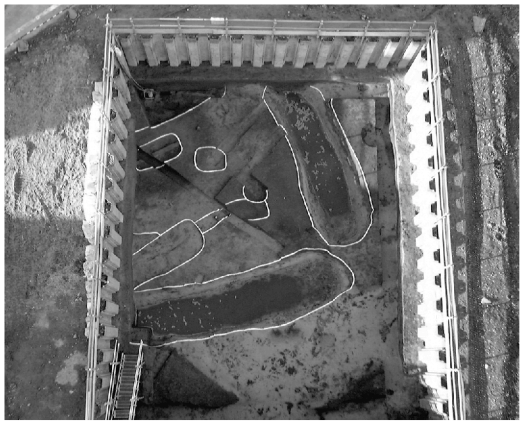
01Db 区　弥生時代後期の環濠



01Dc 区　全景（2 面）



01De 区　全景（1 面）



01Df 区　全景 (2 面)



01Dh 区　全景（2 面）



01Dg 区 1 面（1：100）

中之郷北遺跡（なかのごうきた）

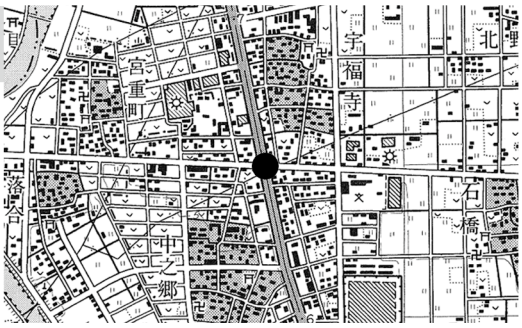
所在地　西春日井郡西春町中之郷地内

調査理由　県道高速清洲一宮線建設

調査期間　平成 13 年 10 月～平成 14 年２月

調査面積　2,400 ㎡

担当者　石黒立人・鵜飼雅弘・早野浩二



調査地点（1/2.5 万「清洲」）

調査の経過　中之郷北遺跡は、西春日井郡西春町中之郷地内に位置する。本遺跡の発掘調査は県道高速清洲一宮線の事前調査として、名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。調査対象は橋脚部分のみ 12 工区、合計 2,400 ㎡で、国道 22 号線中之郷交差点の以北にＡ～Ｅ区（Ｂ区はＢａ区とＢｂ区に二分割）の６調査区、以南にＦ～Ｋ区の６調査区を設定した。調査期間は平成 13 年 10 月～平成 14 年２月である。

立地と環境　本遺跡は五条川左岸の自然堤防と後背湿地が複雑に入りくむ沖積平野に立地する。調査地周辺の現況は住宅地で、現地表の標高は 5.5m 前後を測る。遺跡の約３㎞南には弥生時代の大集落として著名な朝日遺跡（清洲町・春日町・名古屋市）が位置するほか、約２㎞北東には弥勒寺御申塚遺跡、弥勒寺廃寺跡（いずれも西春町）が、五条川を挟んだ約２㎞北に今年度発掘調査を実施した伝法寺本郷遺跡（一宮市）、約２㎞北西に中世を中心とする下津北山遺跡や鎌倉街道周辺遺跡（いずれも稲沢市）が存在する。また、交差点以南の調査地東には、すでに滅失した古墳時代後～終末期の古墳、宇福寺古墳が近接する。

調査の概要　今回の本遺跡の調査において、古墳時代初頭、古墳時代前期、古墳時代中期前半、古墳時代中期後半～古代、中世～近世の遺構と遺物が各層序ごとに連続して検出された。また、調査区を設定した範囲は南北約 350m に及ぶため、暗褐色粘土層（Ｅ～Ｈ区）、褐色中粒砂層（Ｃ～Ｈ区）、黒色粘土層（Ｂａ～Ｈ区）を鍵層として、各調査区間の層序の対比を認識しつつ調査を行った。

古墳時代初頭・前期　Ｂ区からＨ区にかけて、標高 2.5m 前後に古墳時代初頭（廻間Ⅱ式が中心）の遺物を包含する黒色粘土層が安定して堆積していることを確認した。このうちＢａ、Ｂｂ、Ｃ、Ｈ区では黒色粘土層の直下で幅約 0.4m の平行小溝群が検出された。Ｂｂ、Ｃ区の平行小溝群は北東―南西方向で、それぞれの溝は 1.5m 間隔に配される一方、Ｈ区の小溝群は北西―南東方向で、それぞれの溝の間隔は 0.5 m前後とやや密となる。またＨ区では、黒色粘土層の直上で古墳時代前期後半（廻間Ⅲ式後半～松河戸Ⅰ式前半）の土器集積を検出した。

古墳時代中期前半　黒色粘土層の上位には、青灰色シルト層と青灰色粘土層が互層状に堆積する。この層中で明確な遺構は確認されなかったが、標高３m 前後には古墳時代中期前半（松河戸Ⅱ式）の土器が包含されていた。これらの土器群は出土した層位によって概ね二分される。土器の出土は散漫ではあるものの、Ｓ字甕、小型壷、大型高杯、手捏ね土器など全形を知りうる個体の出土が目立つ。Ｈ区やＢｂ区では、土器がやや集中して出土する地点もみられ、Ｂｂ区では鞴の羽口が土器群に共伴して出土した。

なお、Ｉ区では古墳時代中期後半～古代の遺構面の下位で、緩やかな谷状の落ち込み

（ＮＲ01）を確認した。ＮＲ01では古墳時代中期の土器群のほか、赤色顔料（ベンガラ）や有袋鉄斧といった特殊な遺物の出土がみられたことから、今後、遺構の性格を慎重に検討する必要がある。

古墳時代中期後半～古代

Ｄ区からＦ区にかけて、青灰色シルト層の上位、標高3.5m前後で褐色中粒砂によって埋没した水田を検出した。とくにＦ区では幅0.5m、高さ10～20㎝の大畦畔を良好な状態で検出することができた。

その水田を埋没させた古墳時代中期以降の沖積作用は、Ｄ区周辺、Ｈ～Ｉ区周辺に自然堤防状微高地を形成し、本遺跡周辺においても集落形成が本格化する。Ｄ区とＩ区では同一遺構面（標高約4.0m）で、古墳時代中期後半～奈良時代後半の竪穴住居がそれぞれ８棟、10棟と濃密に検出された。これらのうち、Ｉ区ＳＢ07、ＳＢ10では古墳時代中期後半（宇田Ⅱ式）の土器群が出土していることから、集落形成の開始をこの段階に求めることができよう。なお、ＳＢ07では体部に円窓（焼成後）を穿った須恵器有蓋高杯が床面に伏せられた状態で出土した。飛鳥時代以降の竪穴住居には竈が付設されており、Ｄ区ＳＢ03では花崗岩を利用した石製支脚がともなっていた。さらにＨ区では暗褐色粘土層の上面で、微高地縁辺において北東―南西方向の平行小溝群を検出した。溝の幅は0.4m前後、それぞれの溝の間隔は0.3～1.0mを測る。集落近郊に営まれた畠であろう。

一方、Ａ区とＢａ区は旧河道に相当し、Ａ区では河道にほぼ平行する杭列を確認した。構造を知りえたのは杭列のみであったため、旧河道との対応関係には不明な点が多く残されるものの、護岸を目的としたものと考えられる。Ａ区の河道内からは土師器甕、須恵器蓋杯、高杯、甑、甕、土錘など古墳時代後期～飛鳥時代の遺物のややまとまった出土をみた。

中世～近世

Ｉ区では竪穴住居群の上位で柱穴群が検出されたことから、Ｉ区の周辺では古代以降にも集落としての土地利用がなお継続していたことがうかがわれる。その他の調査区では中世以降、高燥な土地には島畠が、低湿な土地には水田が広がる景観へと移行する。

ま　と　め

今回の調査において、尾張平野における古墳時代から古代にかかる遺跡の形成過程、地形環境の変遷をつぶさに跡づけることができた意義は大きい。しかし一方で、現地表下3mにおいて古墳時代の遺跡が広範に展開するという予期しえなかった事実は、沖積低地に眠る遺跡の分布状況の把握の困難さを改めて我々に思い知らしめる結果となった。このような遺跡の存在をいかにして周知し、開発行為に対応するかが今後の重大な課題となる。

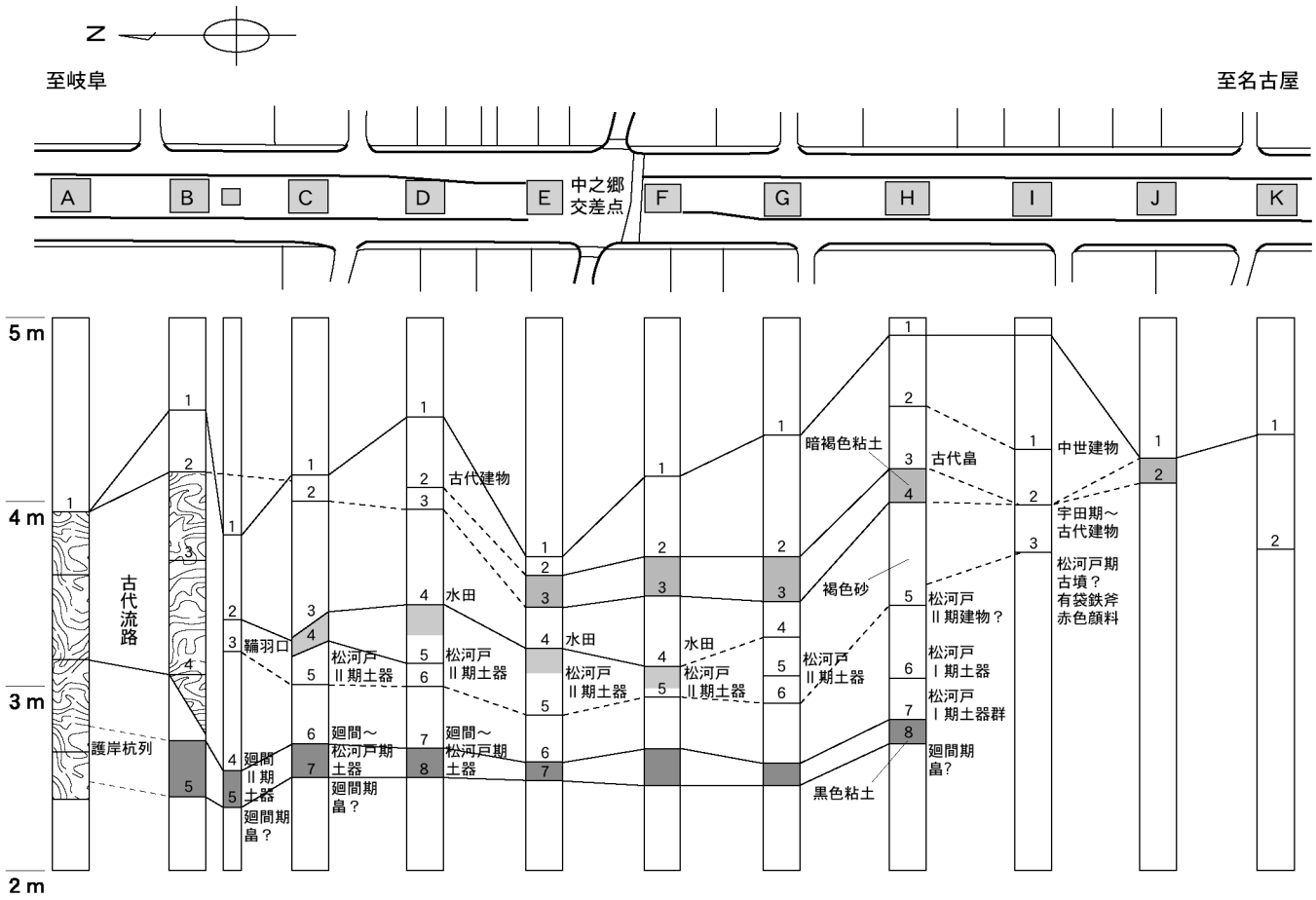
（鵜飼雅弘・早野浩二）



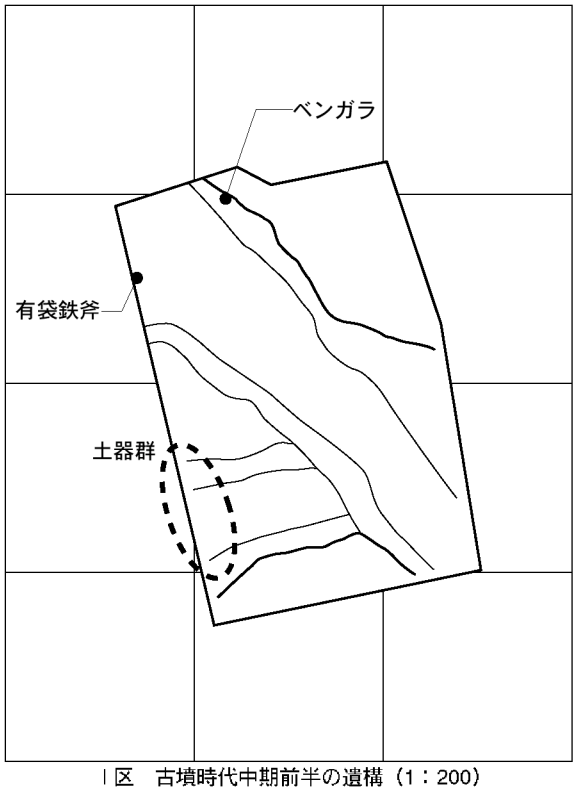
Ｃ区　調査風景



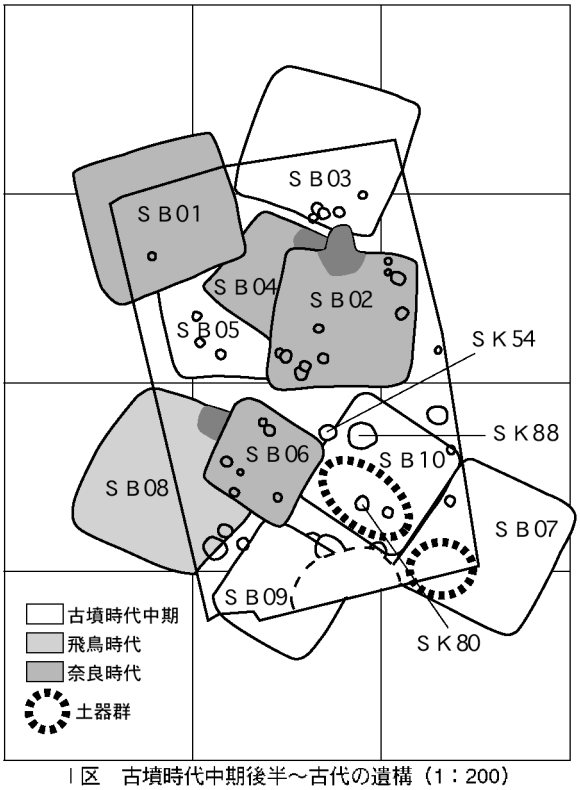
Ｄ区　土層断面



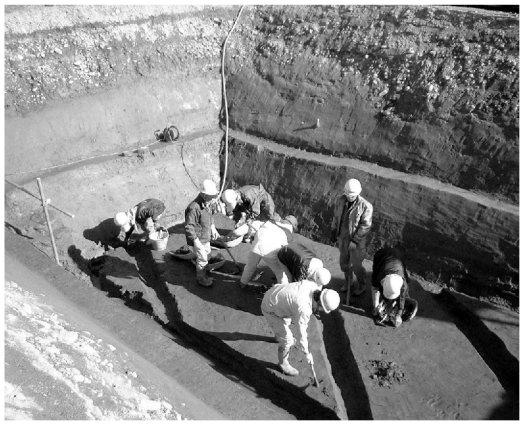
調査区配置図（1：2000）と土層中柱図（1：40）



Ⅰ区　古墳時代中期前半の遺構（1：200）



Ⅰ区　古墳時代中期後半～古代の遺構（1：200）



C 区　平行小溝群



H 区　土器集積



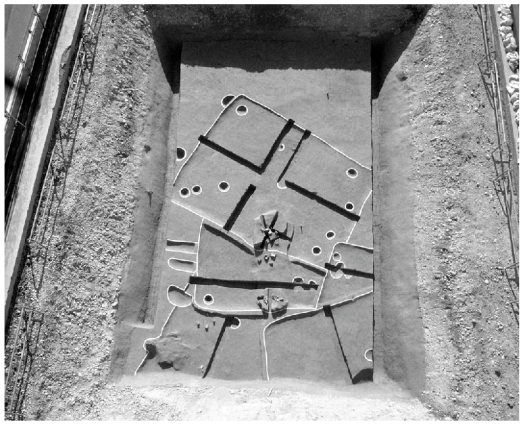
E 区　土師器大型高坏



F 区　水田と大畦畔



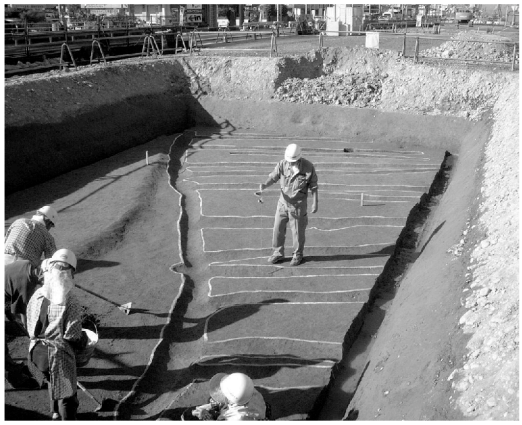
I 区　竪穴住居群



D 区　竪穴住居群



A 区　自然流路と杭列



H 区　古代平行小溝群

三ヶ所（さんがせ）遺跡

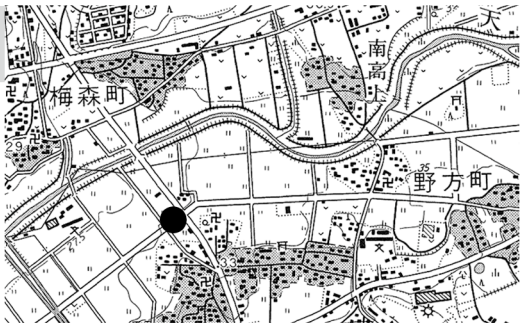
所在地　日進市浅田町地内

調査理由　県道岩崎名古屋線建設

調査期間　平成 13 年 10 月～ 12 月

調査面積　1,550 ㎡

担当者　石黒立人・松田　訓・堀田剛史



調査地点（1/2.5 万「平針」）

調査の経過　調査は県道岩崎名古屋線建設に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 13 年 10 月から 12 月にかけて実施した。調査面積は 1,550 ㎡である。

遺跡の立地　三ヶ所遺跡は、猿投山西南麓に市域を広げ、名古屋市に東で接する日進市に所在する。遺跡は、岩崎川、天白川、折戸川が合流した地点のやや下手に位置し、これらの河川によって開削された浅く広い谷に立地する。調査地点の旧態は水田で、周辺は土地改良事業によって水稲耕作地が広がる。現地表高は、約 28.2 mを測る。

調査の概要　調査地点の基本層序は、現水田耕作土の下に約 0.1 mの客土が盛られており、その下に旧耕作土が 0.1 ～ 0.2 m入り、その直下に明黄褐色シルトが約 0.3 m堆積する。この明黄褐色シルト層は無遺物で、さらにこの下に須恵器・灰釉陶器を主体とする遺物包含層である黄灰色シルト層が 0.1 ～ 0.3 m堆積する。この層は客土を入れる際に填圧を行ったためか極端に締まっており、調査を難航させた。基盤層はにぶい黄橙色シルトで、この層は一部が窪地状に落ちこんでおり、ここには径１～４㎝の円・角礫を多く含むにぶい黄橙色細粒砂が堆積する。

今回の調査で確認された遺構は、溝が５条、土坑 24 基、不定型な掘り込み７基などである。

平安時代の遺構では、主として溝が検出された。これらは、谷を流れる川の方向と併行して東西方向に検出され、このうちの２条は溝の中心間の距離５m内外を保って併走する。これらの併走する溝下層からは、平安時代中期の灰釉陶器を主体とし須恵器も出土している。

中世初頭の遺構は、山茶碗・皿を含む土坑が１基のみ確認された。この土坑は、灰釉陶器を主体とした遺物が出土する溝を切っており、先に述べた併走する溝は中世初頭の時期には機能していなかったものと思われる。

このほかには、礫を大量に含んだ自然流路と思われる痕跡が検出されたが、戦国時代の陶器片がわずかに含まれており、この痕跡は当該期の河川の氾濫に伴うものと思われる。

（松田　訓）



C 区から A 区を臨む（西から）



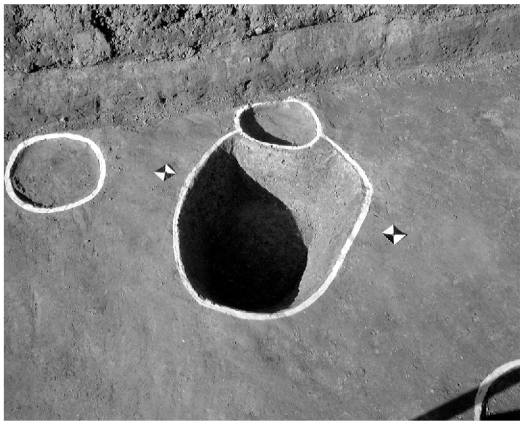
A 区全景（南西から）



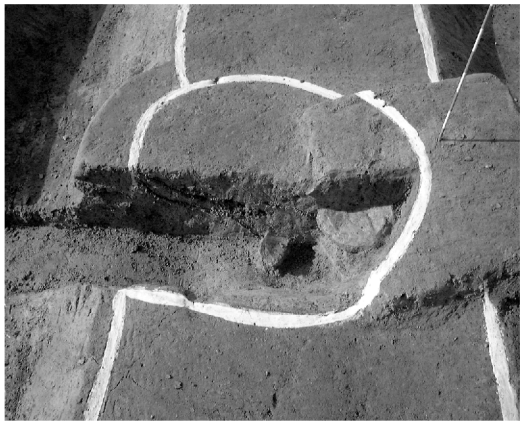
C 区全景（南西から）



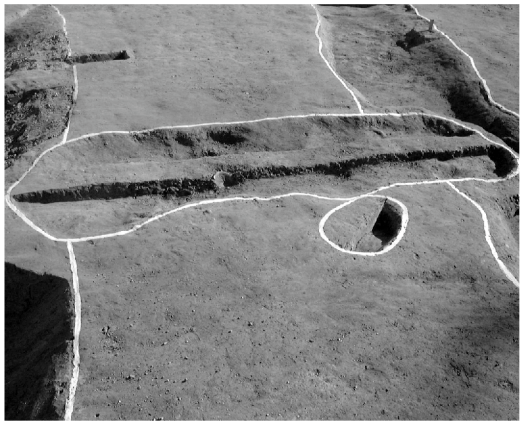
古代の溝と自然流路



土坑完掘状況



遺物出土状況



中世初頭の土坑



作業風景

西田面（にしだめん）遺跡範囲確認調査

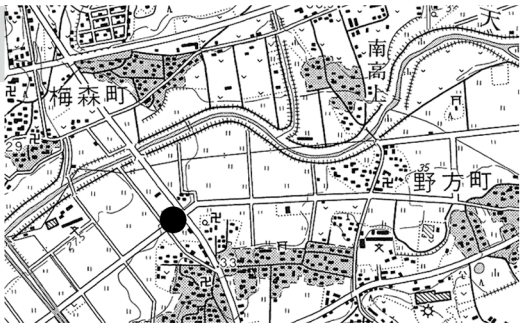
所 在 地　日進市浅田町地内

調査理由　県道岩崎名古屋線建設

調査期間　平成 13 年 4 月 17 日～ 4 月 20 日

調査面積　200 ㎡

担 当 者　赤塚次郎・皆見秀久



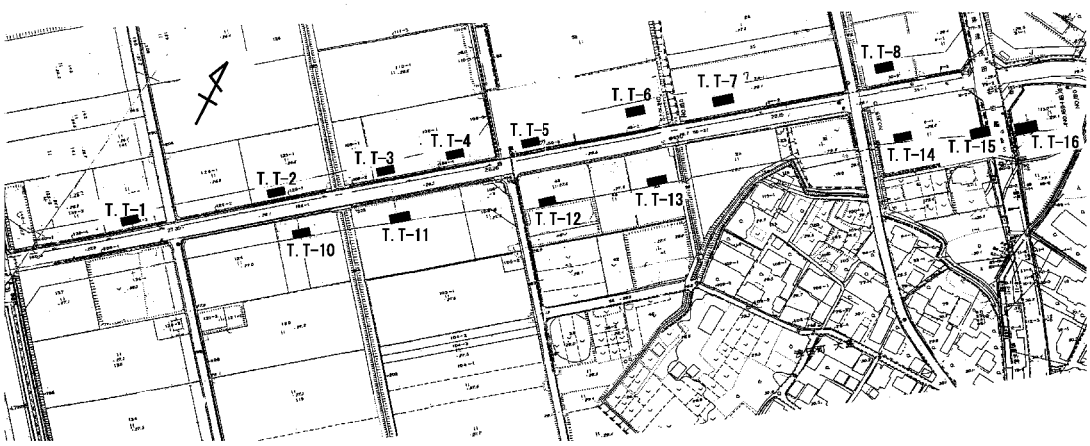
調査地点（1/2.5 万「平針」）

調査の経過　調査対象地内に 15 ヶ所の試掘坑 (テストトレンチ、以下 T.T と略す) を設定し、断面観察を行った。その後、各テストトレンチの遺構の有無、遺物の出土状況を精査し、遺跡の範囲とその性格を確認した。

立地と環境　日進市の西部、天白川上流域の左岸の低地付近に所在する。周辺には猿投窯が展開し、北東には岩崎古窯支群、東には折戸古窯支群が存在する。

調査の概要　T.T-8 、T.T-14 、T.T-15 については、耕作土下に明黄褐色シルト層が堆積し、T.T-8 については幅約 1.8 mの溝を検出した。溝下層より須恵器、灰釉陶器が出土した。T.T-14 は遺構、遺物とも確認することはできなかったが、T.T-15 において灰釉陶器が出土した。T.T-16 は、地表面より約 95 ㎝下に包含層とみられる暗オリーブ褐色シルト層が 15 ～ 20cm 堆積していた。この土層から須恵器、灰釉陶器が出土し、幅 2.5 mの溝を検出した。溝の断面はU字形で 65 ㎝の深さがあり、埋土は 3 層に分かれていた。溝からは須恵器、灰釉陶器が出土しており、特に最下層（暗灰黄色中粒砂）からの出土が多かった。調査対象地東側については須恵器、灰釉陶器が出土して T.T-8 と T.T-16 では溝がそれぞれ確認できたことから平安時代を中心とする集落跡を想定することができる。

その他の調査対象地については、全体的に 10 ～ 20cm の耕作土下に 40 ～ 60cm の明黄褐色シルト層が堆積し、その下はすべて礫層となっていた。シルト層直上にて検出を行ったが遺構、遺物とも確認できなかった。ただし、T.T-1 地点においては中世陶器及び須恵器片 2 点が出土し、焼土も検出された。（皆見秀久）



西田面遺跡範囲確認調査地点 (1:4000)

四池（しいけ）Ａ古窯（こよう）

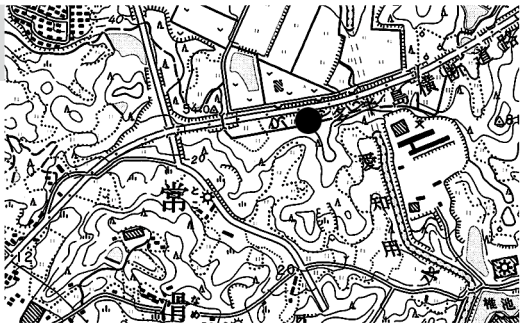
所在地　常滑市金山字四池地内

調査理由　知多半島横断道路拡張

調査期間　平成 13 年５月～平成 13 年６月

調査面積　600 ㎡

担当者　赤塚次郎・武井繁樹・皆見秀久



調査地点（1/2.5 万「常滑」）

調査の経過　調査は、知多半島横断道路拡張工事に伴う事前調査であり、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 13 年５月から平成 13 年６月にかけて実施した。調査面積は、600 ㎡である。

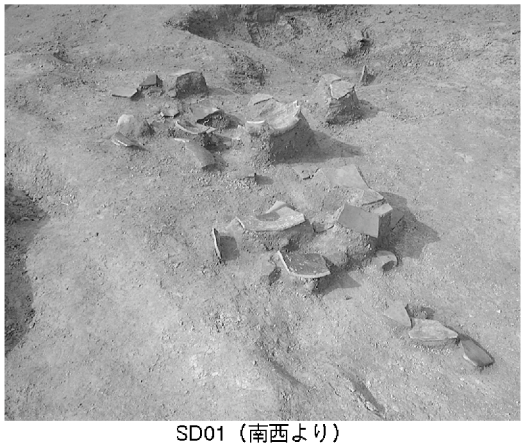
立地と環境　知多半島の中央を南北に低丘陵が背骨のように貫き、そこから東西に小規模な尾根が数多く延びている。それらの尾根に知多古窯跡群と呼ばれる数千にも及ぶ古窯が存在している。四池Ａ古窯は常滑市金山字四池に所在する。前述の半島中央部低丘陵から西に延びる尾根の北側斜面に立地し、標高約 45 ｍを測る。調査区の北側を知多半島横断道路が東西に走り、南側は急激に落ち込み谷地形となっている。また調査区のすぐ西には、1992 年に常滑市教育委員会によって調査された四池Ｂ古窯が存在する。

調査の概要　調査は、樹木の伐採の後、表土剥ぎを行い、その後人力で掘削を行った。その結果、周辺の道路建設や農地整備のため、窯体南側煙り出し部分は削平され既に消失していた。また、数箇所に盗掘の跡も確認された。天井部も落下しており焚口や焼成室の明確な区別は確認できなかった。窯体の規模は現存した床面で南北約８ｍ、最大幅約３ｍ、傾斜角度は 19 度を測る。なお分焔柱は確認されなかった。また、灰層確認のため窯体北側に南北３本、東西１本の土層観察用のベルトを残し、最大で約４ｍ掘り下げたが、調査区内において灰層は確認されなかった。

調査の結果、窯体１基と溝３条、階段状遺構と性格不明の土塁が検出された。遺物は大型の甕が主体で壺、鉢、椀も極少量出土した。また、羽釜、陶錘、陶丸が各１点出土した。出土量はコンテナ 35 箱で、遺物から 13 世紀前半の古窯であると推察される。

（武井繁樹）


SY01 断ち割り（北より）


SD01（南西より）

東端城跡（ひがしばたじょう）

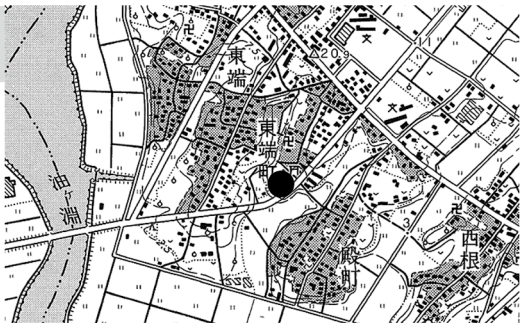
所在地　安城市東端町中縄手地内

調査理由　緊急地方道（安城碧南線）整備事業
自転車歩行者道設置

調査期間　平成 13 年 10 月～ 11 月

調査面積　800 ㎡

担当者　竹内　睦・宮腰健司・武井繁樹



調査地点（1/2.5 万「西尾」）

遺跡の環境　東端城は、舌状に延びる碧海台地の南端、標高６～７ｍに場所に立地する。城は文献資料によると 1580 年（天正八年）長田尚勝による築城とされており、規模は約 70 × 70 m、隅丸方形の平面形態をしている。現状では県道に接する南東側以外の三方に土塁が巡るが、築城時には四方向に土塁があった可能性が高く、北西～南西の土塁外側には帯曲輪が取り付く。

調査の経過　今回の調査は自転車歩行者道の設置に伴うもので、県道と接する東端城の南東部分を、城域に沿って 800 ㎡の面積を調査した。

調査の概要　**古代**　製塩土器の支脚と土師器甕口縁部片が出土するが、遺構は確認されていない。

戦国時代　遺構は東西の土塁とそれに伴う堀（ＳＤ 23）と、その間にある溝・土坑群に分かれる。前者については時期を確定することはできず、後者は 16 世紀中葉があてられた。この両者の関係は、ＳＸ 01 と東土塁が重なる部分で、ＳＸ 01 →東土塁の順となり、このことから土塁遺構は築城年代とされた 16 世紀後葉に属すると想定された。

中央の遺構群のうちＳＤ 16 は台地の南端に沿って走り、北東で直角に曲がり SD14 に続く。南西については撹乱によって不明で、北東部分のように明瞭に屈曲する部分は確認できなかった。ＳＤ 21 はＳＤ 16 に切られた状態で埋没するが、ＳＤ 14 のように一連の遺構を形成していた可能性がある。SX01 は SD16 の東に広がる不定形な落ち込みで、それに向かってＳＤ 22 が掘削される。また埋没途中に、アサリ・ハマグリ・カキなどの貝廃棄がみられた。

東西土塁は、郭内側が後世の溝の掘削により形状が不明であり、さらに東土塁は外側も削平されている。西土塁の西側では幅約４ｍ、深さ約 1.5 m、土塁頂部との比高４ｍの堀（ＳＤ 23）が検出された。ＳＤ 23 は東側で急に浅くなり、収束して途切れ部分ができるようである。

江戸時代　台地縁にそってカットされた痕跡であるＳＸ 05、井戸と思われるＳＫ 32 とそれに向かう溝ＳＤ 15・17 が検出されている。　（宮腰健司）


調査区北東部（北西から）


西土塁・堀（ＳＤ 23）セクション（南から）



SX01 貝廃棄・SD22（北西から）



西土塁・堀 SD23（北西から）

主要遺構図（1：300）

東土塁（南から）

上橋下遺跡（かみはしか）

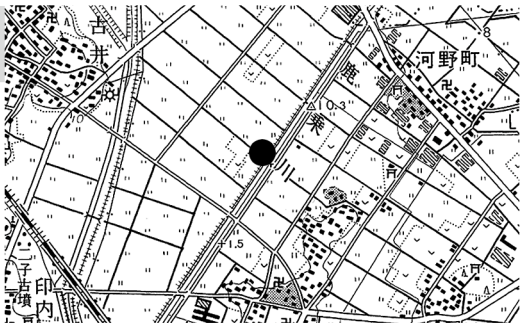
所在地　安城市川島町・古井町地内

調査理由　鹿乗川改修

調査期間　平成 13 年 10 月～平成 14 年 3 月

調査面積　4,200 ㎡

担当者　竹内　睦・池本正明・鈴木　裕



調査地点（1/2.5 万「安城」）

調査の経過　調査は、鹿乗川改修工事予定地内における事前調査であり、県建設部河川課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成 13 年度 10 月から平成 14 年 3 月にかけて、当センターが行っている。調査面積は、4,200 ㎡である。

遺跡の立地　上橋下遺跡は、愛知県安城市川島町・古井町に所在する。地形的には沖積低地の微高地に該当する。地表面の標高は 8.8 mをはかる。

調査は、中央を横断する農道を境界として、南側をＡ区、北側をＢ区と区分した。

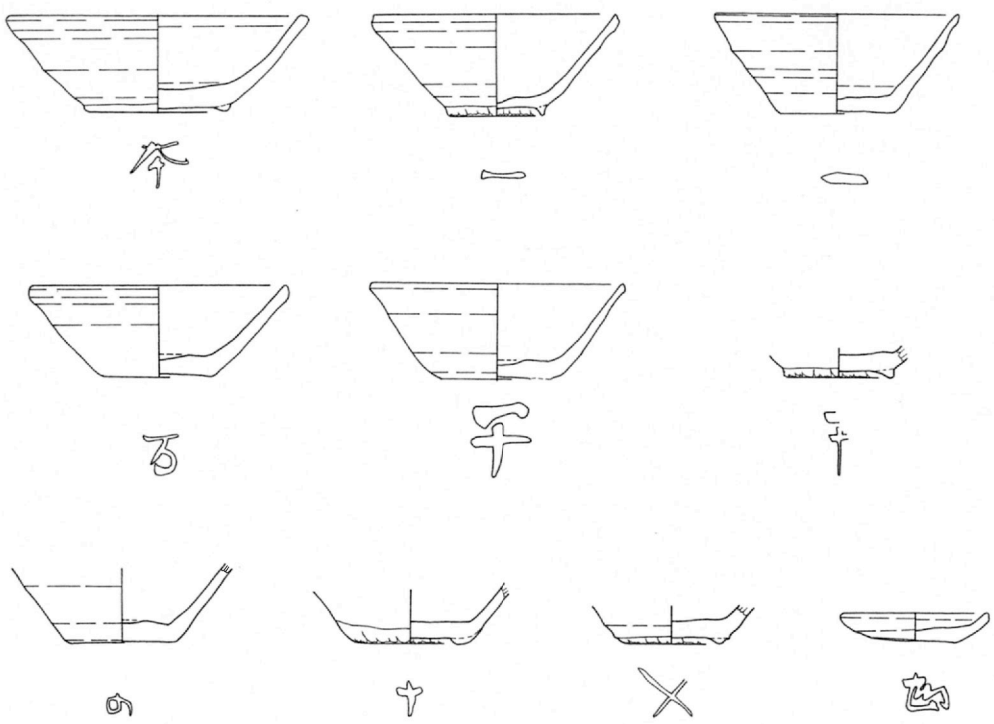
調査の概要　今回の調査で検出できた遺構には、弥生時代後期 (I 期) 、鎌倉時代 (II 期) 、江戸時代 (III 期) にまとまりを見る。なお、自然地形として、弥生時代～明治時代に属する旧鹿乗川の流路も二本確認されている。

I 期に属する遺構は、方形周溝墓、土坑、溝などがある。方形周溝墓は全てＢ区で検出され、総数は約 10 基を数える。いずれも平面形はやや歪む。規模は、一辺５m程度と、10 m程度のものがある。この他に、Ａ区では鹿乗川の旧河道と考えられる流路も確認されている。幅は約７m。埋土からは、弥生時代後期に属する土器類の他、木製品も数点出土している。

II 期に属する遺構は、土坑、溝などがある。性格が判断できる遺構は乏しいが、注目できる遺構には、Ａ区で検出された鎌倉時代の祭祀遺構がある。調査時にＳＸ 02 と呼称した遺構で、旧鹿乗川の旧河道に伴う淵状の自然地形に、溝や土坑を掘削するなど、若干の改変を加えたものである。中央部分の二カ所には杭や竹をランダムに打ち込んだ構造も確認できた。出土遺物は、遺構の外郭線に沿う形で灰釉系陶器の椀、小皿類が多数得られている。これらは、使用痕が確認できないものが多く、墨書土器も幾つか含まれていることから、日常生活に伴う遺構とは考えにくい。この他に、獣骨片や銭貨なども確認できた。

III 期に属する遺構は、土坑、溝などがある。遺構は、Ａ区でのみ検出した。やはり性格が判断できる遺構は乏しい。このうち、Ａ区ＳＸ 01 は、幅の一定しない不整形な溝状の落ち込みである。Ａ区の北側で検出している。埋土中からは江戸時代初期の土器類とともに、『十六』と墨書された木札が１点出土している。なお、Ａ区では鹿乗川の旧河道も確認されている。鎌倉時代頃～明治に属する河道で、幅は約 15 mをはかる。

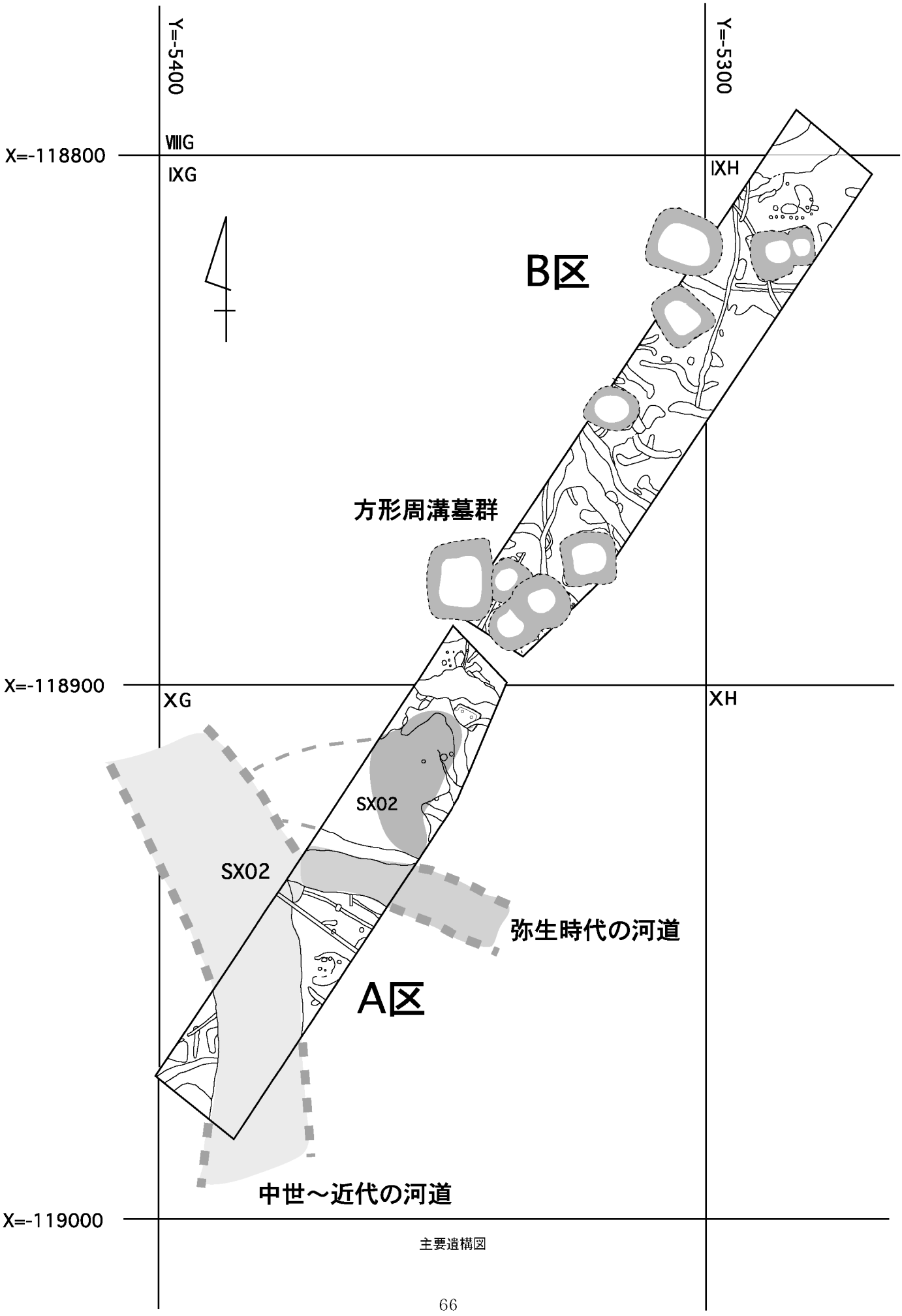
(池本正明)



ＳＸ 04　出土土器実測図（1：4）



調査区位置図（1：6000）


Y=-5400
Y=-5300
X=-118800
X=-118900
X=-119000
ⅧG
ⅨG
ⅨH
XG
XH
B区
A区
方形周溝墓群
SX02
SX02
弥生時代の河道
中世～近代の河道

主要遺構図



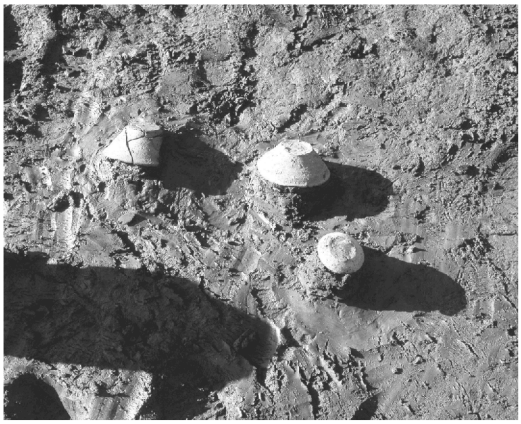
A 区全景



A 区 SX01　木札出土状況



A 区 SX02



A 区 SX02　墨書土器出土状況



B 区全景



B 区　方形周溝墓 1



B 区　方形周溝墓 2



B 区　方形周溝墓 3

御船城跡（みふねじょう）

所 在 地　豊田市御船町地内

調査理由　東海環状自動車道建設

調査期間　平成 13 年 4 月～平成 13 年 8 月

調査面積　3,570 ㎡

担 当 者　竹内　睦・鈴木　裕・成瀬友弘・武部真木



調査地点（1/2.5 万「豊田北部」）

調査の経過　調査は国土交通省名四国道工事事務所による東海環状自動車道の建設に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成 13 年 4 月から平成 13 年 8 月にかけて実施した。農業道路を隔てて、調査区をＡ・Ｂ・Ｃの三区に分けて実施した。

立地と環境　御船城跡は、豊田市の北部、藤岡町との境にある御船町に所在する。矢作川の支流である御船川の周辺にできた狭い沖積地と洪積台地の境にあたるような場所にあり、現在は水田となっている。調査区から周辺を見渡すと、現在の集落が少し丘陵をあがった所に立地している。調査区は、地籍図により推定される御船城跡の南西側にあたり、地籍図によれば城跡の南西側に展開する方格地割部分にあたる。

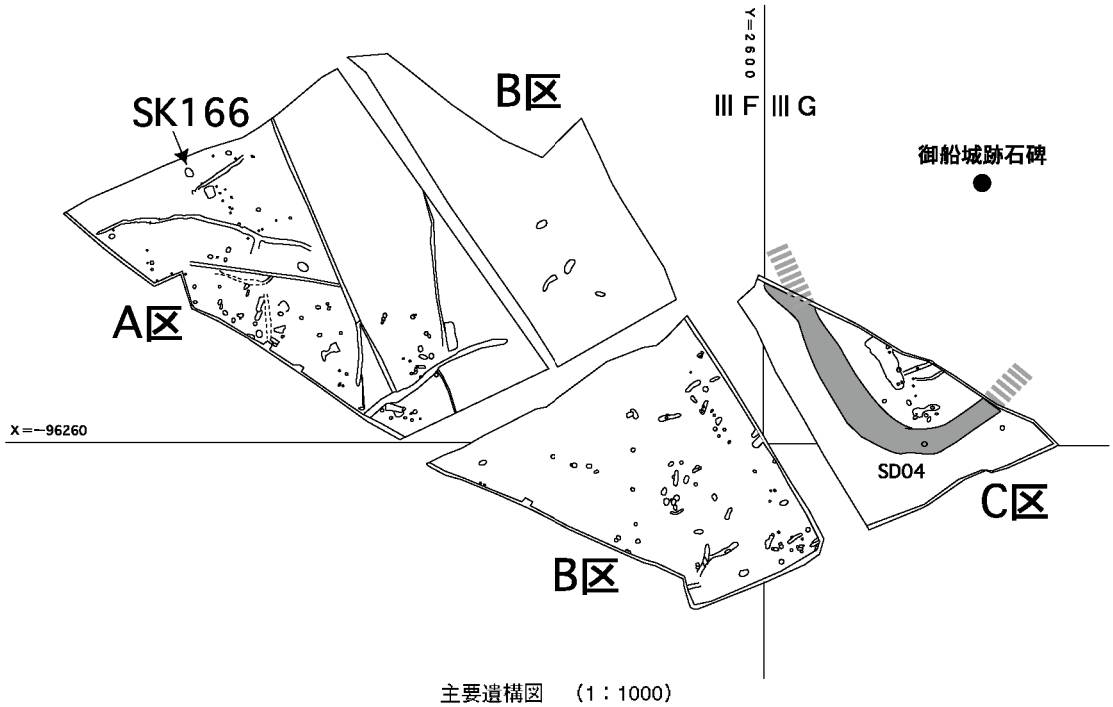
調査の概要　今回の調査は、3,570 ㎡をＡ・Ｂ・Ｃ区の三区分に分けて調査を行った。Ｂ区の出土遺物は水田耕作土層とその直下にある遺物包含層に含まれている。混入した近世や近代の陶磁器を除いて、中世後半段階から戦国時代にかけての陶器が中心であり、山茶椀、小皿、陶丸、灰釉皿、鉢、天目茶碗、擂鉢、土師器の皿、土師器の鍋、青磁の碗などの小さな破片等が出土している。Ａ区は地形的には微高地上にあり、耕作土直下が赤褐色の地山面となっており、溝、土坑等を検出しているものの遺構、遺物は全体的に乏しく、御船城との関連性を見出せるようなものは確認できなかった。農道を隔てて調査区の東側にあたるＣ区は、地籍図から推定しても、御船城の中心に近い位置と考えられる。Ｃ区の中央部から幅約６m程の溝（ＳＤ 04）、東トレンチ際に井戸が検出されている。また、東トレンチから中世後半から戦国期の鍋、茶碗等の遺物片が比較的多く出土しているものの、いずれも城との関連性を示すまでには至っていない。　（鈴木　裕）


調査区全景（北西から）


SK166 遺物出土状況



調査区全景（南東から）



主要遺構図　（1：1000）

矢並下本城跡（やなみしもほんじょう）

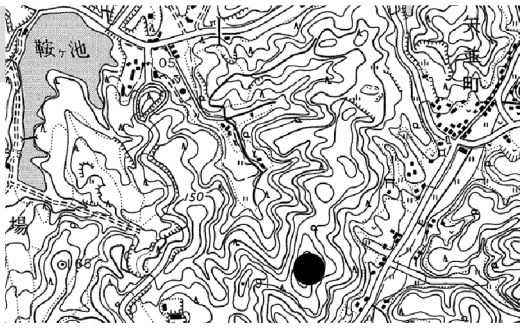
所在地　豊田市矢並町地内

調査理由　東海環状自動車道建設

調査期間　平成 13 年６月～９月

調査面積　4,500 ㎡

担当者　竹内　睦・池本正明・成瀬友弘



調査地点（1/2.5 万「豊田北部」）

調査の経過　発掘調査は、東海環状自動車道建設に伴う事前調査で、国土交通省名四国道工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 12 年度に行われた範囲確認調査（面積 200 ㎡）の結果を元に調査区（面積 4500 ㎡）を設定し、平成 13 年６月から平成 13 年９月にかけて調査を行った。

遺跡の立地　矢並下本城跡は豊田市矢並町に所在する戦国時代の山城跡である。本遺跡は矢並集落の南西端にあたる矢並川右岸の南北に細長い山地頂部の標高約 190m に立地している。集落からの比高は約 90m で城の規模は南北約 130 m、東西約 40m を測る。

城の付近には、矢並川を挟んだ対岸に戦国期に豊田市北東部から足助・小原にかけての地域を領域とした鈴木氏の祖が紺屋を営んだとの伝承のある鈴木善阿弥屋敷が、北東約１㎞の矢並集落の北方山地頂部に矢並上本城跡が存在している。伝承によれば、「鈴木氏＝矢並殿ははじめ矢並を本拠としたことは明らかであり、矢並町の上・下の２城址は鈴木氏が築いたものであることは間違いない」（『豊田市史』）とあるが、この城の築城時期や存続期間など具体的な状況についての記録はほとんど残っていない。

調査の概要　調査の結果、城域の拡大を伴った大規模な改修が少なくとも一度は行われており、この改修を目処に前期・後期に分けて概観を見ていきたい。

前期の城は、主郭の南北を浅い堀切で遮断し、東側斜面に幅約１m20 ㎝深さ 20 ～ 80 ㎝の箱堀状の断面を有する横堀を南北に走らせている。この横堀は中央付近で土橋状に掘り残されており、ここから主郭上に上がったところで柵列跡と見られる柱穴列に食い違いが見られることから、虎口として利用されていたと推定される。この主郭上の柵列は径が 30 ㎝ほどのものと 15 ㎝ほどのものが規則的に並んでおり、北辺から東辺を通って南辺へとコの字状に巡っていることが確認された。主郭上に柵列のない西辺では斜面上を南北に並行して走る幅 30 ㎝ほどの浅い溝が数条確認され、これらの溝から等間隔に並ぶ小さな穴が検出されていることから柵列を形成し、主郭上の柵列の空白を補っているものと推定される。

またこれ以外の遺構として主郭西側中央に位置する土壇がある。おおよそ５m 四方の規模で周囲より残存高で 30 ㎝ほど高くなっており地山と黄褐色土との版築により作られていることが確認された。土壇上には柱穴と思われる土坑もいくつか検出されたが明確に建物跡と呼べるような痕跡は確認することが出来なかった。

後期の城は北方を意識しての改修が行われており、城域は北に向かって拡大をしている。主郭の 50m ほど北で城の北端部にあたる部分に柵列を形成したと思われる浅い溝が東西に走り１m ほどの進入路に限定しておりここが城内への入り口と考えられる。ここから主郭方向に向かうと西斜面には下幅１m20 ㎝ほどの箱堀状の断面を呈する竪堀が数条検

出され畝状竪堀を形成していることが確認された。一方、東斜面は切岸を施しており、切岸下の緩斜面には土塁状の高まりを２本検出している。これらは地山を掘り残して作ってあることが確認された。こうして進入路を限定した城内道を主郭に向かって進むと北堀切の手前で馬出状の曲輪にぶつかる。この曲輪の東側では堀切沿いに竪土塁を走らせている。主郭に入るとこの曲輪内を通り堀切に架かる土橋にたどり着くこととなる。土橋を挟んで東西に伸びる北堀切は下幅で約２m、主郭との比高約５m箱堀状の断面を有しており、両端は斜面へ竪堀として落としている。また、堀切は土橋の東側で北東方向に屈曲しており主郭の北東に付随する腰曲輪から土橋への横矢掛けを意識した構造になっている。　土橋は馬出状の曲輪から 60 ㎝ほど下がっており幅４m を測る。この土橋は地山を掘り残して作ってあり、土橋側面に前段階の堀切と思しき箱堀状の痕跡が見受けられ堀切が改修によって幅・深さとも拡張されていることが確認された。なお、土橋上面の状況を見ると東よりの幅 70 ㎝ほどがほかの部分より荒れていることから初期の土橋がこの部分にあり土橋の上面が堀底であったとも考えられ、遺構が３時期に分けられる可能性もある。土橋から主郭に上るには主郭側の切岸に幅 30 ～ 40 ㎝ほどのスロープが左上がりにきってあることからこれを使用したものと思われる。

主郭は黄褐色土の盛り土により本来西から東へと傾斜している地形を西側にあわせて平坦にしており、東側では前期の遺構面から 50 ㎝以上かさ上げがされている。このかさ上げされた主郭上に北堀切に沿うかたちで北土塁が構築されている。土塁は幅約２m50 ㎝残存高約 40 ㎝で、東側は主郭下の腰曲輪を経て竪土塁として斜面を下る。

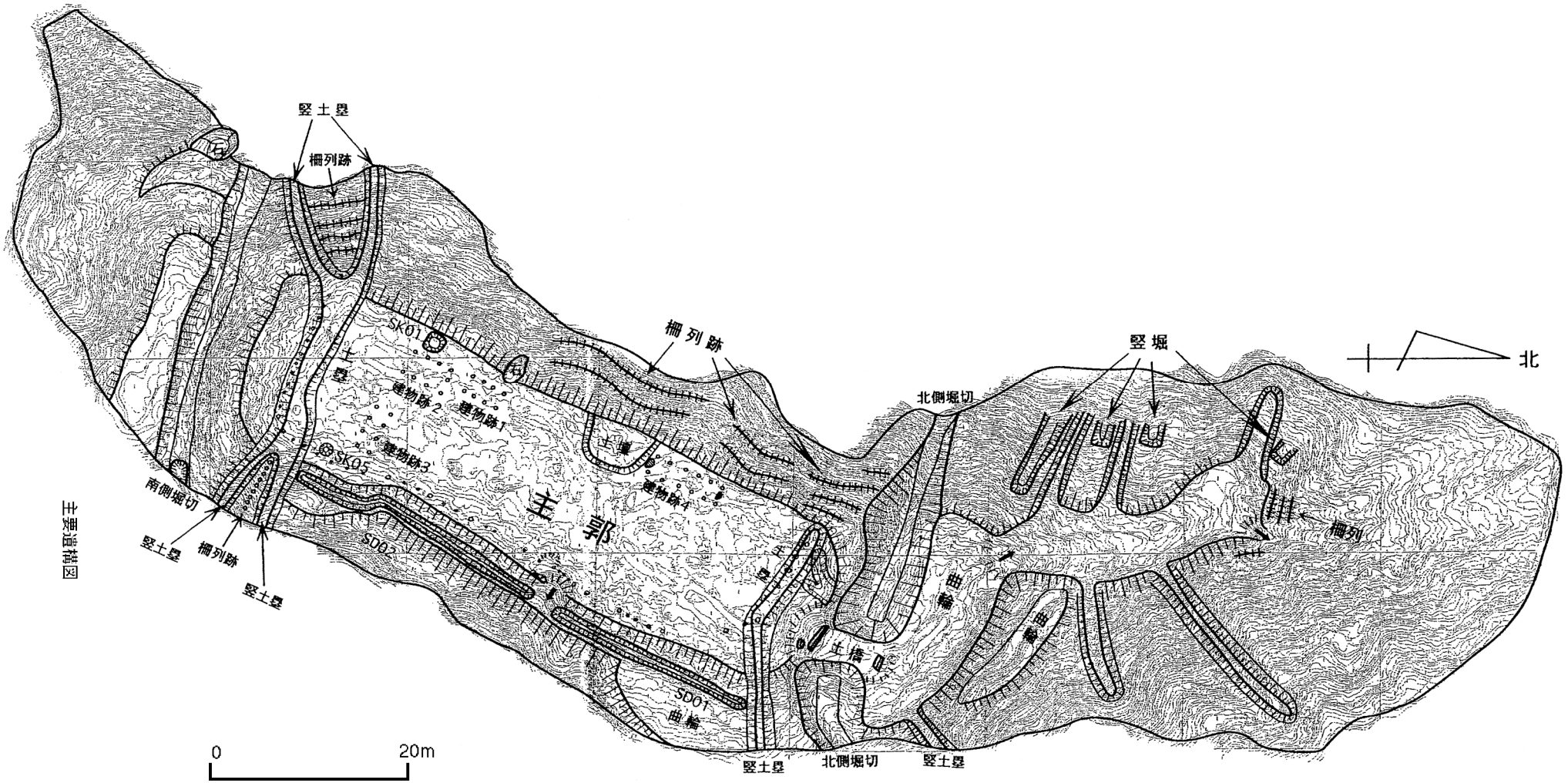
主郭内部には掘立柱建物が４棟確認された。このうち建物跡４は柱通りも悪く建物とするには疑問も残るが南側にカマドらしきものが検出されており、これに伴う簡素な小屋ではないかと考えている。建物跡１～３はＬ字形に並び、一連のものとして機能していたと考えられる。建物跡１と３については、方向は異なるもののほぼ同サイズで１間×３間（約２m70 ㎝×５m40 ㎝）であった。建物跡２は、１・３よりもやや大きく２間×３間（約３m60 ㎝×約５m40 ㎝）の規模を有することからこの城の中心となる建物と考えられる。

この他の遺構として SK01 が挙げられる西側斜面に面する形に作られておりその構造は小型の窯のようでもあるが遺物等決め手となる物はなく現段階での使用目的は不明である。建物跡２・３の南には南堀切に沿って南土塁が東西に走る。下幅約３m50 ㎝残存高約 50 ㎝を測り、両端は枝分かれして、２本の竪土塁となって斜面を下る。東側の竪土塁の間からは柵列と思われる径 15 ㎝ほどの柱穴が 50 ㎝ほどの間隔で 10 個確認されている。

南堀切は下幅約３m50 ㎝の箱堀状の断面を有するもので、北堀切と同じく改修の痕跡が認められる。しかし北堀切と違い堀切西端に大岩が横たわっていたため深くすることができず堀幅の拡大に重点を置いたものと考えられる。また同じ理由で東端は竪堀として斜面を下っているのに対し西端は竪堀の痕跡は確認できなかった。南堀切を越えるとまったくの自然地形となり人の手の加わった形跡はなかった。

以上遺構の概観を述べてきたが、遺物はおそらく前期段階に属すると思われる 14 世紀末～ 15 世初頭ころの擂鉢・内耳鍋を中心として土師器の皿や天目茶椀片などが出土しているが、改修時期や廃城の時期を特定できる遺物はほとんどなく多くの検討課題を残している。

ま と め　今回の調査では、城跡が後世の改変をほとんど受けていないこともあって戦国期の山城の状況を非常に良好な状態で確認することが出来た。県内における山城の発掘事例は少なく今回の遺構・遺物は貴重な資料となるものと思われる。　（成瀬友弘）


竪土塁
柵列跡
SK01
土壙
建物跡2
建物跡1
建物跡3
SK05
南側堀切
竪土塁
柵列跡
竪土塁
SD02
主郭
柵列跡
建物跡4
土壙
竪堀
北側堀切
曲輪
曲輪
柵列
土橋
SD01
曲輪
竪土塁
北側堀切
竪土塁
北
0
20m

主要遺構図



主郭東側横堀



西斜面柵列跡



北堀切



建物跡１



主郭柵列



主郭南東竪土塁



SK01



出土遺物

城山城跡（しろやまじょう）

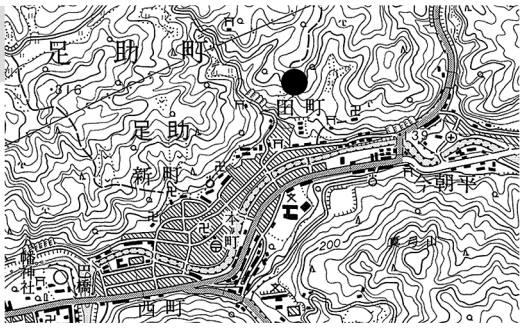
所在地　東加茂郡足助町字城山及び引陣地内

調査理由　国道 153 号足助バイパス建設

調査期間　平成 13 年 10 月～平成 14 年３月

調査面積　3,100 ㎡

担当者　竹内　睦・宮腰健司・武井繁樹・成瀬友弘・永井邦仁



調査地点（1/2.5 万「足助」）

調査の経過　城山城跡は、戦国時代（15 ～ 16 世紀）の山城で、およそ 350 × 150m の規模と推定されている。国道 153 号足助バイパス建設に伴う事前調査として、国土交通省名四国道工事事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた。調査対象地は主郭推定地から南西方向にのびる４つの尾根である。調査は平成 12 年度から実施され、平成 12 年度は西から２つの尾根について調査を行い、山城の西端を画する堀切と高低差約 10m の切岸、および西端部の曲輪を脇から防御する腰曲輪が確認された。時期を特定できる遺物は少ないが、16 世紀後半の土師器鍋や瀬戸美濃産の擂鉢が出土した。今年度（13 年度）は、東側の残り２つの尾根について調査を実施した。

立地と環境　城は足助町市街地北側に連なる山地から南～南西方向に伸びる尾根（標高 175 ～ 230m）を占地している。調査区の北には、主郭と思われる平場と通称「馬場」と呼ばれる平場があり、城の主要部と考えられる。さらに、01 B区の南には居館と考えられている平場がある。足助川北岸の市街地との高低差は、約 45 ～ 100m ある。東隣に大観音城跡、市街地を挟んで南方の山地には真弓山城跡、南西に飯盛山城跡が所在する。

調査の概要　**A区**　調査直前の状況は、調査区全域が竹林になっており、南北に走る尾根上に存在する４つの平場として認識することができた。調査の便宜上、最も北の平場を平場１とし、南へ平場２～平場４の順で調査を行った。調査区中央の平場以外は、南東または南西に向かって急激に傾斜している。調査区範囲は南北約 50 m、東西の最も幅の広いところで約 30 mである。標高は最も高いところで 204 m、下も低いところで 180 mである。

平場１では平場の南北中心線より西側では明確な遺構が少なく、数個のピットと斜面を削り込んだところに集石が見られるに留まった。東側は西側とは様相が異なり 100 近くに及ぶピット、溝数条、性格不明の盛土などが確認された。また東側中央では竪穴状遺構（ＳＸ 01）が確認された。長軸 3.5m の楕円形をしている。平場縁辺につくられており、後の削平により一部は失われている。

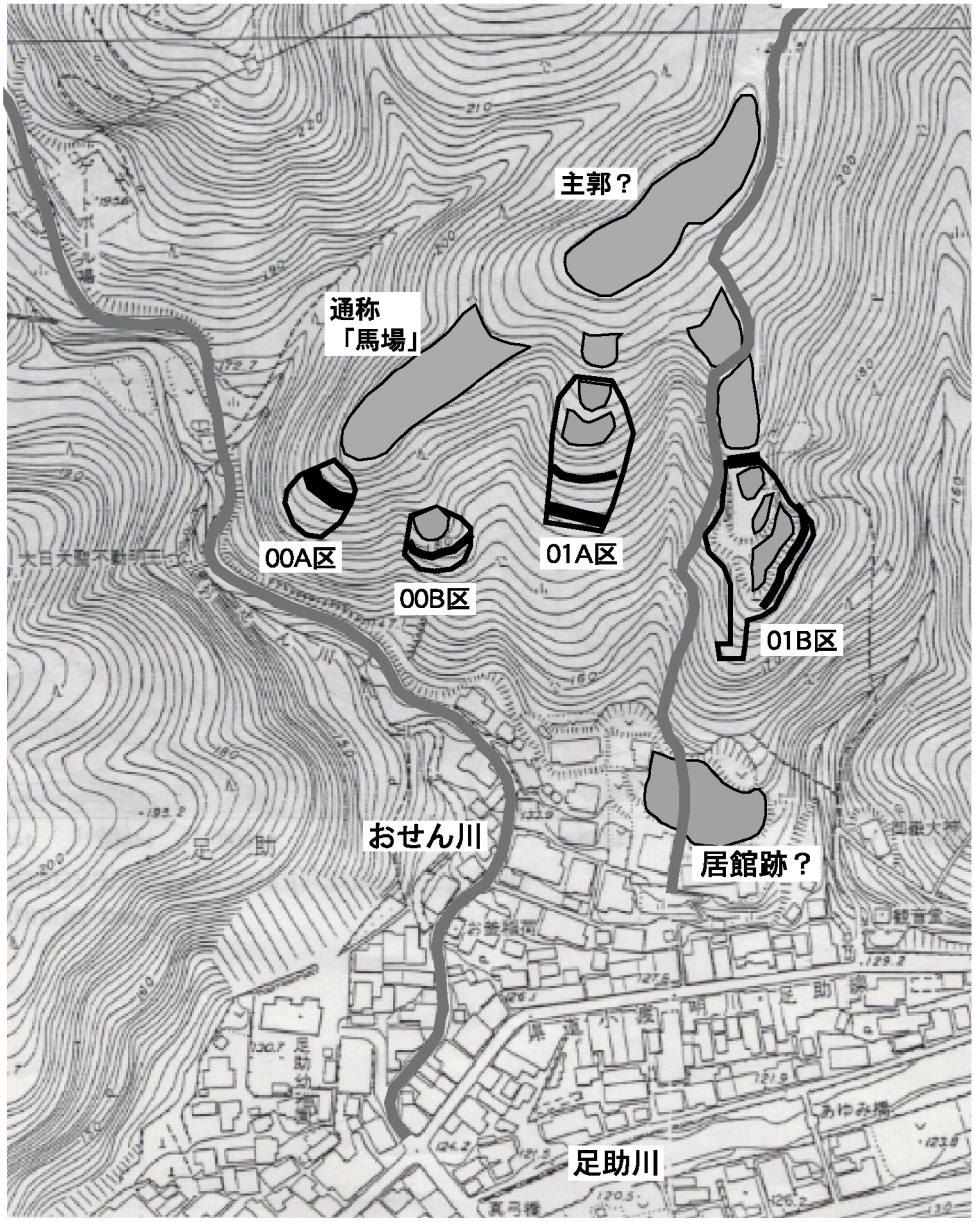
平場２も平場１と同様、平場中心線の西側よりも東側に遺構が集中しており、南東側斜面には意図的に小平場を設けるなど、明らかに南から東にかけての方位を意識をした構成になっている。また、調査区北西では、西から東へ延びる柵列が検出されており、その柵列に向かって上る、階段状に削り込まれた遺構が確認されている。

平場３と平場２の間には、高低差 8.5m の斜面があり、その下端で横堀（ＳＤ 07）が確認された。ただし西から東に向かって少しずつ浅くなり、平場の中心線より東側の状況は不明瞭である。西端で幅約１m、深さ約 1.2m である。この堀の南には、堀と平行する柵

が確認されている。平場１，２が城跡の南から東を意識した造りになっているのに比べ、平場３の堀や柵列はやや向きが違うことから時期の違いなどを感じるが、今後の検討課題といえる。

平場４と平場３の間は高低差８mの急斜面である。そして斜面下端で尾根筋に直交する堀（ＳＤ 10）が検出された。最大幅３m、深さ１mの箱堀であるが、東から西に向かって少しずつ幅が狭まっており、西端では幅１ｍである。位置的には堀切と想定されるが、後述するＢ区で確認された薬研堀のような防御性の強いものではない。

Ａ区で出土した遺物は、黒褐色の表土層からは後世の削平や畑作によって戦国時代から現代に至る様々な遺物が確認されている。その層の下に広がる黄褐色土層からは戦国時代と思われる土師器の皿・鍋、瀬戸美濃産の擂鉢や常滑産の甕や、江戸時代前半と考えられる陶器片などが出土した。また、竪穴状遺構からは青磁片が出土している。

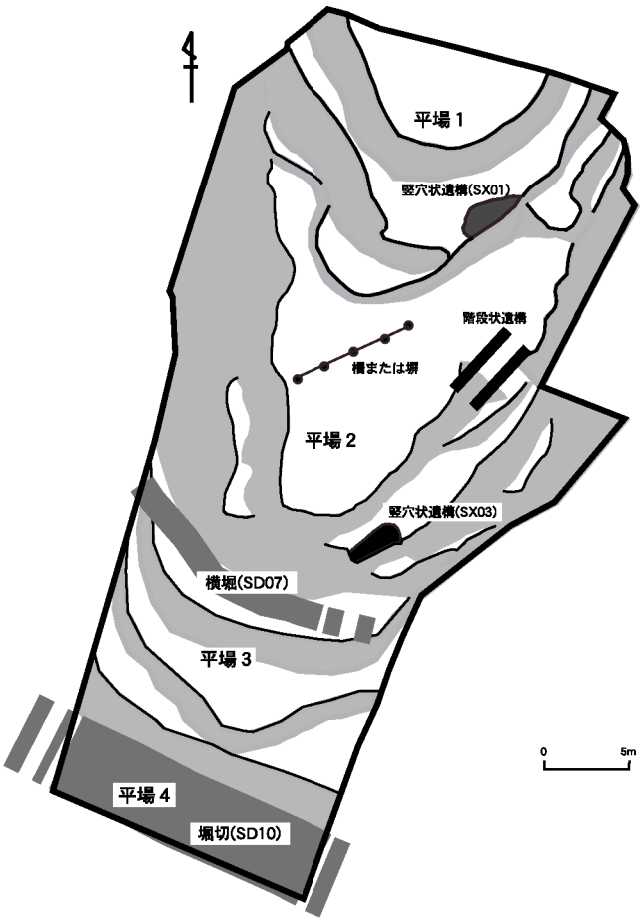


第１図　城山城跡の主な推定曲輪と調査位置図

B区　調査直前の状況として、調査区北端（標高 190m）に堀状の地形、その南方に若干の高低差をもちながら４つの平場が確認され、さらにこれら平場群より約４～８m 下方を帯曲輪状の地形が廻っているのが認められた。堀状地形・平場群は畑として利用されいていた。従前の研究では堀状の地形が堀切と想定されている。発掘調査では、想定された地点での堀切や、平場群で戦国時代から江戸時代にかけての３時期以上の遺構の変遷が確認された他、下方の帯曲輪状地形にて横堀が確認された。この順で以下に概要を記す。

堀切は、調査区範囲内ではその南半分のみが確認された。上幅３m 以上、堀外側からの深さ 2.8m 以上の薬研堀である。堀内側は現状の地形から切岸になっていると考えられ、切岸上端と堀底との高低差は約８m 、堀外側からの実効堀幅は約 10m と推定される。全長は約 17m で、東端では、地山を削り出して造った土橋と、そこから堀外へと伸びる通路や柵が確認された。土橋は上幅が 50 ㎝である。通路は約１m 幅で、堀切に沿って緩やかに下り土橋に至る。当該遺構は遺物の出土がほとんどみられなかったが、堀の形状などから山城の堀切と考えて問題ないであろう。

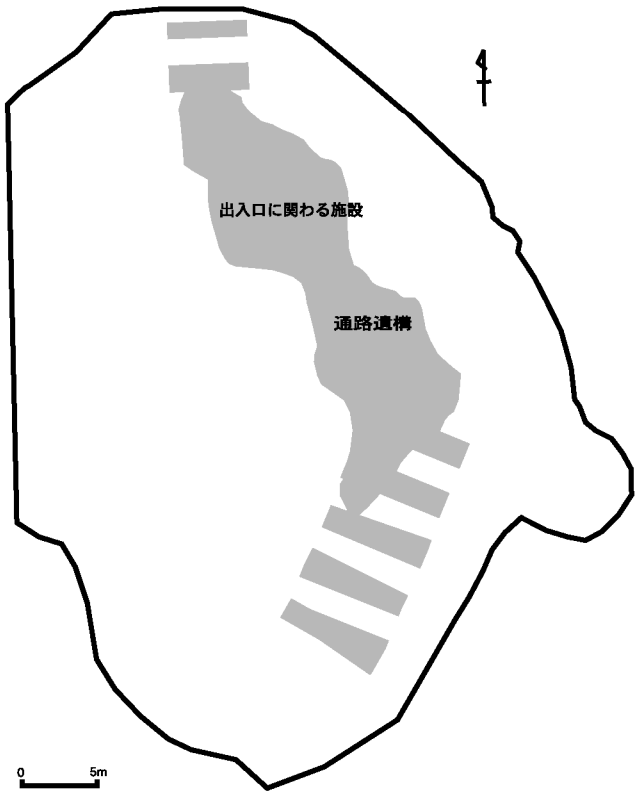
平場群は堀切の南方に位置し、一部は江戸時代以降、耕作時に削平されたり拡張され改変を受けている。戦国時代から江戸時代初めには、尾根筋より西側はほとんど造作の対象



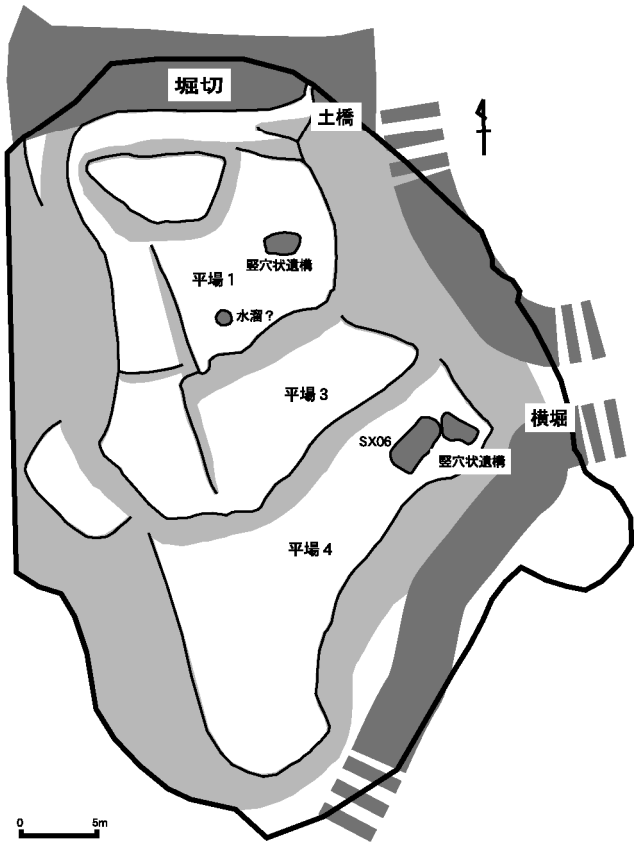
第２図　01A 区遺構概略図

になっていなかったと考えられる。一方尾根筋より東側の状況は、遺構の重複から３時期の変遷が想定できる。１時期目は、地山を掘り込んだ堀割状の通路が調査区内を下方から北端の堀切まで伸びる。上幅５ｍ以上、深さ２ｍ以上の逆台形の断面をしている。２時期目の平場３から平場１へ移る地点でくびれ、平場１相当地点で上幅約８ｍ×10ｍの箱形に広がる。出入口に関わる施設と推定される。この通路は下層の砂質土と上層の粘質の強い土で埋められており、平場３相当地点では、上下層位間で径15～30㎝の円礫・角礫が集中して出土している。２時期目は通路遺構を埋め地山を削って３つの平場が造成され、さらに竪穴状遺構などの施設が造られる時期である。平場どうしは1.5～２ｍの高低差がある。竪穴状遺構は３つ確認され、最大のものは平場４のＳＸ06で、４ｍ×２ｍ規模の隅丸長方形を呈している。埋土からは鉄滓・土師器鍋・瀬戸美濃産陶器の小片が出土しており、遺物の年代は16世紀前半と考えられる。３時期目は、竪穴状遺構が埋められた後に建物が建てられる時期である。径25㎝、深さ10㎝の円形の堀形が１～1.5ｍの等間隔で並び、２間×２間でまとまっている。礫が出土しないので掘立柱建物と考えるが、小規模な礎石建物の可能性も考慮したい。ただし時期の特定はできていない。

平場群の東から南側斜面は、平滑な急斜面へと造り変えられ切岸となっている。最も急



第３図　01B区遺構概略図（１時期目）



第４図　01B区遺構概略図（２時期目）

な東側の切岸は下方の横堀底との高低差８ｍ、傾斜角度は 36°である。切岸は１時期目の通路を埋めた粘土層を削っており、それ以降の造作であることが確認できた。その下方の横堀も同時につくられたと考えられる。横堀は、標高 184m の地点をほぼ水平に伸びており、地形に合わせた曲線を描いている。調査区内で一旦途切れ、端部が谷方向へ抜ける形となっている。上幅は３ｍ、深さ２ｍの薬研堀である。

ま と め　２年次にわたる発掘調査の成果を概括し、まとめにかえたい。

（１）城山城跡の範囲に関わる成果である。昨年度確認された腰曲輪に伴う横堀、今年度 A 区の堀切、B 区の横堀は標高 180 ～ 185m に位置している。おそらくこの地点で山城の南端を防御していたと考えられる。これらの発掘成果によって従来考えられていた城域より若干広い城域であったことが判明した。

（２）今年度 A 区で確認された箱状を呈する堀切と B 区などで確認された薬状を呈する堀切という形状の異なる堀が、一つの山城の中で混在している点である。これらは別の時期あるいは別の造営主体によって構築されたと考えるべきであろう。

（３）今年度 B 区で確認されたような大規模な改修である。B 区では、通路を埋めて平場を造成し、さらにそれらを囲むようにして横堀を廻らしている。実年代としては 16 世紀前半以降が考えられる。足助の地は元亀２（1571）年以降に武田氏の軍勢に攻め込まれており、そのような史料で確認できる歴史的事件に象徴される、戦国時代末期の逼迫した情勢にどのように関わっていたのか、今後の検討課題である。（武井繁樹・永井邦仁）



A 区　作業風景（南から）



A 区　SX01 遺物出土状態（南西から）



A 区　階段状遺構（南西から）



A 区　SD07 付近（北東から）



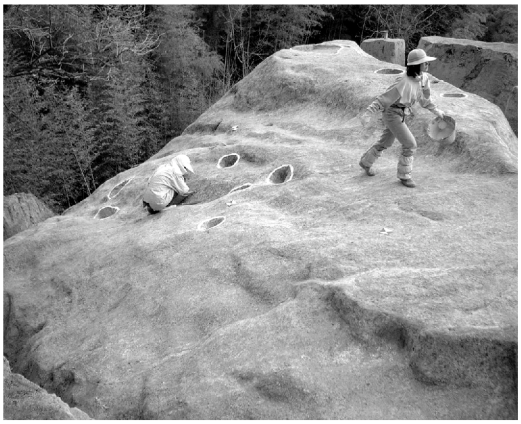
A 区　SX03 全景（南西から）



A 区　SD10 セクション（西から）



B 区　堀切の断面（東から）



B 区　堀切の土橋付近（北西から）



B 区　1 時期目の通路遺構（北西から）



B 区　通路遺構の礫出土状態（南西から）



B 区　平場全景（北から）



B 区　横堀断面（北から）